

1994

# 金峰山修驗道遺跡

—中世末～江戸時代に金峰山ふもとの川端下  
地区に展開した修驗道遺跡の調査—

平成6年3月

長野県南佐久郡川上村教育委員会

1994

# 金峰山修驗道遺跡

—中世末～江戸時代に金峰山ふもとの川端下  
地区に展開した修驗道遺跡の調査—

平成6年3月

長野県南佐久郡川上村教育委員会



1 金峰山（雪のある山）  
屋根岩遠景（秋山原より）



2 屋根岩近景（東方より）



3 1号・2号建物址跡全景（東方より）



1 3号建物址・礫群集石地点全景（北方より）



2 烏居跡全景（南方より）



1 3号墳物址周辺の遺物出土状態



2 焼土

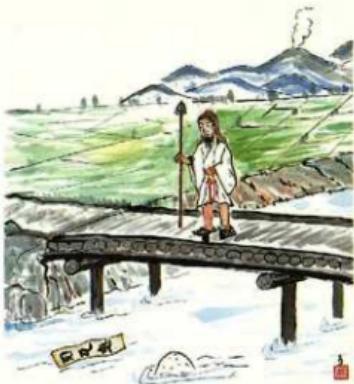
3 焼土断面



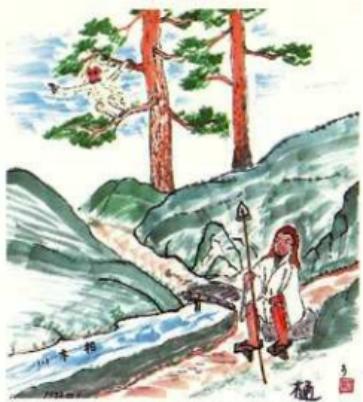
4 這跡内にはヤナギラン・ベニバナイチャクソウが咲き乱れていた



1 役行者



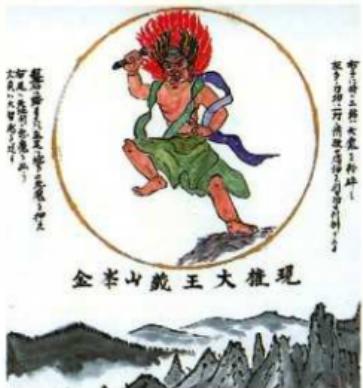
2 役行者水想観図



3 相木から白駒に遙かれカッパ坂を越えて橋沢に出る



4 橋沢から川端下へ蝶が案内する



5 金峰山で吉野金峯にて祈り奉りし金剛王大権現に再拜す。  
六月十六日たそがれ時



6 金峰山大鳥居から登拝の想定図

## 序

川上村教育委員会  
教育長 林 忠利

川上村内には、先土器時代の柏垂遺跡や馬場平遺跡、縄文中期の大深山遺跡、三沢遺跡等47か所に存在する遺跡が確認されております。しかし、中世～近世の発掘調査は今回が初めてであります。また、修験道に関連した遺跡調査は全国的にも少ないようです。

日常生活している時には、昔からそこにあるものについて深く考えもしないし、疑問もわかないことが沢山あります。私たちの住んでいる村の歴史として、古代から中世、そして近世、近代と先人の足跡を学術的に正しく復元し、理解することが、これからの人類の進歩発展に寄与し、また先人の遺産を受け継ぎ、保存することが現代の人々に課せられた責務であろうかと思います。

この遺跡は、現在川端下宿の入口にある大鳥居跡や寺院跡、大日堂との関連や金採掘など伝承に基づいて調査を行い、本格的に発掘が実施されました。遺構や遺物などによって古代が模索され、その時代や当時の状況が判明してきます。出土した遺物は、古銭200点を始め、銅製キセル、銅製薬王権現半肉像、鏡、陶器類などの出土品があり、これらによって時代は中世末～江戸時代前半と比定され、建物跡は、社殿あるいは火葬に関するものである。これに隣接している礫群集石地点の集石や焼土散布地点は意図的に作られたものであり、これは参詣者の祭場であると想定しております。また、大鳥居跡はこの建物跡に後続するもので、大日堂と関わり合っていることが判明しました。

靈峰金峰山は、山梨県との県境にあるので、入峰は当然、金桜神社のある甲州側からも多くあったと思われます。また、金峰神あるいは、薬王権現の勧請によって称せられたものが多いと伝えられております。7世紀に吉野の金峰山に、役の小角と言う行者が実在し、ご本尊に山岳信仰と海外から伝道された仏教が習合した感が深いと思われ、また信濃川上流に位置する秩父山系の金峰山と吉野金峰山とのつながりも「甲斐国誌」によって知られており、修験の場として地形も非常に勝れていたものと思われます。古くから海や山岳など、大自然を「世の常ならぬ力」つまり大自然の力として敬いつづけて来たわれわれ日本人の心に神、仏の教えがなじんだものと思われます。また、深山れい谷の山は、山そのまで御仏そのままであると修験道では教えていたようです。

この遺跡の金峰山山岳信仰は、中世から江戸時代には、近在の千曲川流域のみならず近県に、また関東地方と広い信仰圏があったと思われます。尚、この遺跡とも関連があると推測される川端下、梓山の金山開発、大日堂、金峰山神社など今後も逐次遺跡調査を実施して、古代の遺産を解明し、保存することが必要であると思われます。

本発掘調査には、佐久考古学会（会長由井茂也氏）、報告書作成担当の島田恵子さん（南佐久郡誌刊行会常任編纂委員）、川上村文化財保護委員並びに発掘調査関係にご指導ご助言をいただいた諸先生方に、心より感謝申し上げます。尚、発掘調査場所の土地所有者井出由太郎氏には深いご理解とご協力により、発掘調査ができましたことに対し、厚くお礼申し上げます。

平成6年3月

## 本文目次

|                               |             |
|-------------------------------|-------------|
| 題字                            | 川上村収入役 中島 徳 |
| 序                             | 川上村教育長 林 忠利 |
| 例言・凡例                         |             |
| 本文目次・挿図目次・付表目次・図版目次           |             |
| 第1章 発掘調査の経緯                   | 1           |
| 第1節 発掘調査に至る動機                 | 1           |
| 第2節 発掘調査の概要                   | 1           |
| 第3節 発掘調査日誌                    | 2           |
| 第2章 遺跡の環境                     | 3           |
| 第1節 地理的環境                     | 3           |
| 第2節 歴史的環境                     | 5           |
| 第3章 層序                        | 11          |
| 第4章 遺構と遺物                     | 13          |
| 1 1号建物址                       | 13          |
| 2 2号建物址                       | 16          |
| 3 3号建物址                       | 19          |
| 4 碑群集石地点                      | 29          |
| 5 碑・焼土散布地点                    | 32          |
| 6 3号建物址・碑群集石地点・焼土散布地点出土その他の遺物 | 35          |
| 1) 陶器                         | 35          |
| 2) 慈佛                         | 36          |
| 3) 鏡                          | 37          |
| 4) キセル                        | 37          |
| 5) 船上台                        | 37          |
| 6) 鉄器類                        | 38          |
| 7) 砥石                         | 40          |
| 7 参道と広場                       | 40          |
| 8 鳥居跡                         | 46          |
| 第5章 考察                        | 48          |
| 1 遺構                          | 48          |
| 2 遺物                          | 50          |
| 3 地方の修驗道について                  | 53          |
| 付録                            |             |
| 金峰山縁起全                        | 63          |

## 挿 図 目 次

|      |                     |    |
|------|---------------------|----|
| 第1図  | 金峰山修験道遺跡地形図及び発掘調査区  | 10 |
| 第2図  | 金峰山修験道遺跡層序模式図       | 11 |
| 第3図  | 金峰山修験道遺跡検出遺構全体図     | 12 |
| 第4図  | 1号建物址跡実測図           | 14 |
| 第5図  | 1号建物址跡出土陶器実測図       | 15 |
| 第6図  | 1号建物址跡出土古銭実測図       | 15 |
| 第7図  | 2号建物址跡実測図           | 17 |
| 第8図  | 2号建物址跡出土古銭拓影図       | 18 |
| 第9図  | 2号建物址跡出土銅・鉄製品実測図    | 18 |
| 第10図 | 3号建物址北側広場実測図        | 19 |
| 第11図 | 3号建物址跡実測図No.2       | 20 |
| 第12図 | 3号建物址・周辺出土古銭拓影図No.1 | 22 |
| 第13図 | 3号建物址・周辺出土古銭拓影図No.2 | 23 |
| 第14図 | 3号建物址・周辺出土古銭拓影図No.3 | 24 |
| 第15図 | 礫群集石地点実測図           | 29 |
| 第16図 | 礫群集石地点出土古銭拓影図       | 30 |
| 第17図 | 礫・焼土散布地点実測図         | 33 |
| 第18図 | 礫・焼土散布地点出土古銭拓影図     | 34 |
| 第19図 | 出土近世陶器実測図           | 36 |
| 第20図 | 出土銅製魔王権現半肉像         | 36 |
| 第21図 | 出土鏡拓影・実測図           | 36 |
| 第22図 | 出土銅製キセル実測図          | 38 |
| 第23図 | 出土軽石製献上台実測図         | 39 |
| 第24図 | 出土鉄器類実測図            | 39 |
| 第25図 | 出土延石実測図             | 40 |
| 第26図 | 参道実測図・出土古銭拓影図       | 41 |
| 第27図 | 鳥居手前の広場実測図          | 42 |
| 第28図 | 鳥居跡全体図              | 43 |
| 第29図 | 鳥居跡石段実測図            | 44 |
| 第30図 | 鳥居跡礫石実測図            | 45 |
| 第31図 | 鳥居跡出土古銭拓影図          | 46 |
| 第32図 | 鳥居跡出土鉄・銅製品類         | 47 |
| 第33図 | 出土した魔王権現半肉像の懸佛復原図   | 50 |
| 第34図 | 本遺跡出土のキセルの形態        | 51 |
| 第35図 | 本遺跡出土古銭の特徴          | 51 |

## 付表目次

|                         |       |
|-------------------------|-------|
| 第1表 金峰山修験道遺跡調査作業工程      | 2     |
| 第2表 1号建物址跡出土古銭一覧表       | 15    |
| 第3表 2号建物址跡出土古銭一覧表       | 18    |
| 第4表 3号建物址跡出土古銭一覧表No 1~4 | 25~28 |
| 第5表 碑群集石地点出土古銭一覧表       | 31    |
| 第6表 磨・焼土散布地点出土古銭一覧表     | 35    |
| 第7表 参道跡出土古銭一覧表          | 42    |
| 第8表 鳥居跡出土古銭一覧表          | 52    |
| 第9表 金峰山修験道遺跡出土古銭集計表     | 52    |
| 第10表 国名記入のお札、泊り人数集計表    | 61    |

## 図版目次

|        |  |
|--------|--|
| 巻頭図版 1 | 1. 金峰山・星根岩遠景 2. 星根岩近景 3. 1号・2号建物址跡全景   |
| 巻頭図版 2 | 1. 3号建物址・碑群集石地点全景 2. 鳥居跡全景   |
| 巻頭図版 3 | 1. 3号建物址周辺の遺物出土状態 2. 焼土 3. 焼土断面<br>4. 遺跡内にはヤナギラン・ベニバナイチヤクソウが咲き乱れていた  |
| 巻頭図版 4 | 1. 役行者 2. 役行者水想図 3. 相木から白猿に導かれカッパ坂を越えて樋沢に出る<br>4. 樋沢から川端下へ蝶が案内する 5. 金峰山上で吉野金峯にて祈り奉りし藤王大権現に<br>再拝す。六月十六日たそがれ時 6. 金峰山大鳥居から登拝の想定図 |
| 図版 1   | 1. 3号建物址全景 2. 碑群集石・焼土散布地点全景  |
| 図版 2   | 1. 鳥居跡の広場から参道および建物址跡地点を望む 2. 鳥居跡遠景   |
| 図版 3   | 1. 鳥居跡全景 2. 鳥居の石段 3. 鳥居跡の石垣  |
| 図版 4   | 1. 1号建物址跡出土古銭 2. 2号建物址跡出土古銭 3. 磨・焼土散布地点出土古銭<br>4. 碑群集石地点出土古銭   |
| 図版 5   | 1. 3号建物址跡出土古銭  |
| 図版 6   | 1. 出土きせる 2. 出土鏡 3. 出土懸佛 4. 出土献上台   |
| 図版 7   | 1. 1号建物址跡出土遺物 2. 出土砥石 3. 出土陶器 4. 鳥居跡出土遺物 5. 鉄器<br>6. 炭化材   |
| 図版 8   | 1. 大日堂内のお大日様 2. 大日堂内の <b>カゼン</b> の宮 3. 遺物出土状態 4. 3号建物址跡の柱穴   |

## 例　　言

- 1 本書は、長野県南佐久郡川上村大字川端下398番156番地に所在する金峰山修驗道遺跡の調査報告書である。
- 2 本調査は、平成5年5月1日～7月30日にかけて、川上村教育委員会が村費による学術調査を実施した。
- 3 本調査は、由井茂也佐久考古学会長を団長とし、地元佐久考古学会員、南佐久郡誌刊行会常任編さん委員（考古編担当）、川上村文化財保護委員を調査員に、その他大勢の方々の協力を得て実施した。
- 4 報告書作成のための整理作業の分担は以下の通りである。  
現場遺構実測図作成——井出正義・佐々木春彦・柳沢春子・島田恵子・長崎　治  
現場遺物の整理——由井　港・長崎　治  
報告書遺構実測図の整理・遺物実測・トレース・図版作成——島田恵子  
報告書に関連した遺物の洗浄・整理・拓本・清書……新津きし
- 5 本書の執筆は、第2章第1節を伴野拓也（中込小学校教諭）、第2節を上田賀（川上村文化財保護委員）、第3章、第4章、第5章を島田恵子（南佐久郡誌刊行会常任編さん委員・佐久考古学会員）が各々分担し、文末に記して文責を明らかにした。
- 6 本書に掲載した遺構の写真は島田恵子が撮影したものを使用し、出土遺物の写真は二科会写真部長野支部の島山あきまさ氏に御協力をいただいた。
- 7 本書の編集は島田が行い、由井茂也団長、由井幸憲文化財保護委員長が校閲、監修した。
- 8 本遺跡から出土した資料は、川上村教育委員会の責任下に保管されている。

## 凡　　例

- 1 本書における遺構実測図の縮尺は、80分の1、遺物は、古鏡・キセル1分の1、その他2分の1に統一しており、各実測図に縮尺を明記してある。
- 2 図版中の遺物の縮尺は、古鏡・キセル・鏡は80%、その他遺物の縮尺は約3分の1、懸佛は倍に拡大した。
- 3 挿図中のスクリントーンは、焼土を示す。
- 4 水糸のレベルは各遺構毎に統一し標高で明記した。（基準点は1箇所に定めたが地図からおこしたものである。）
- 5 金峰山の「峰」の字は、以前「峯」の字であったが本報告書では「峰」に統一した。

本調査にあたり、武藤雄六（前井戸尻考古館長）先生にご指導いただき、また、地主さんはじめ周囲の畠の方々に深いご理解とあたたかいご援助をいただきました。厚くお礼申しあげます。尚、報告書作成につき、奈良大学長水野正好先生、同教授西山要一先生、長野県埋蔵文化財センター調査研究員の市川謙之氏、白田町文化センター館長の丸山正俊氏にご教示、ご助言を得ました。記して感謝申し上げます。

# 第1章 発掘調査の経緯

## 第1節 発掘に至る動機

修験道の歴史や思想は、文献、伝説、儀礼によって知るほか、修験の残した遺跡や遺物を通して知ることができるといわれる。

秩父山系の主峰金峰山は、信仰の山とし平安時代末頃に開かれ、南北朝の時代に最も盛んであったといわれているが物証は極めて少なかった。山岳信仰の金峰山は、中世～江戸時代には川上側をはじめ甲州側から多くの修験者が訪れて、その道すじが御師、先達、在俗の人々が講を結んで修行をする場であったと考えられる。

平成4年11月文化財保護委員会は、文献、伝承をもとに川上村大字川端下石安場地籍で踏査を行い、大日沢川近くの398番地において金峰山神社大鳥居の礎石と石積並びにその北側30mの場所に、道者の修験祈禱の場宿坊跡と思われる遺構の所在を確認した。

この遺跡は山岳信仰の面から学術的に貴重であり、発掘調査および保存の必要があると判断した川上村教育委員会は、村費による学術調査の実施を決定し、土地関係者の了解と地域住民の協力を得て、地元川上村の佐久考古学会長由井茂也氏を団長に、川上村文化財保護委員会、南佐久郡誌刊行会の全面的な協力のもとに、平成5年5月1日より発掘調査を実施する運びとなった。（事務局）

## 第2節 発掘調査の概要

- 遺跡名 金峰山修験道遺跡
- 所在地 長野県南佐久郡川上村大字川端下398番156
- 発掘期間 平成5年5月1日～7月30日
- 調査に関する事務局
  - 林 忠利（川上村教育委員会教育長）
  - 佐野 正徳（川上村教育委員会次長）
- 発掘調査団組織
  - 団長 由井 茂也（佐久考古学会長）
  - 担当者 島田 恵子（南佐久郡誌刊行会常任編纂委員）
  - 調査員 井出 正義、佐々木春彦（以上佐久考古学会員）  
由井 幸恵、関 基、川上 慶、山中 重徳、上田 黄、原 好正、由井 港  
中島 美喜衛、由井 隼人、林 市四郎、吉沢 靖、由井 雅彦（以上川上村  
文化財保護委員）
  - 長崎 治（川上村学芸員）
  - 地形・地質・石質指導 伴野 拓也（中込小学校教諭）
  - 現地指導 武藤 雄六（元井戸尻考古館長）
  - 補助調査員 上原 錦三（佐久市）、柳沢 春子、新津 きし（白田町）

### 第3節 発掘調査日誌

本遺跡の調査は、平成4年11月に行なった文化財調査委員会の踏査及び試掘調査に端を発して、5月11から本格的な発掘調査に入った。先ず宿坊跡と考えられる遺構の存在を確かめるためのトレンチを入れて確認を行なった。その後、確認した遺構の掘り下げを行ないながら周辺を拡張、精査し、鳥居跡と遺構の関連を調査した。

発掘調査は5月～7月まで3ヶ月間実施し、実働日数は各月15日間であった。遺跡は森林の中にあったため、木を伐採しながら順次拡張した。覆土は森林腐植土の堆積が少なく、主に紅花一葉草の生えた表土を20cm程掘り下げるごとにその直下はローム層でたくさんの礫と共に古錢が出土するという浅い状態であった。以下作業工程を表に示した。

第1表 金峰山修驗道遺跡調査作業工程表

| 項目<br>年月   | 発掘調査 | 室内整理      |         |            |
|------------|------|-----------|---------|------------|
|            |      | 遺構        | 遺物      | 原稿執筆・図集・図版 |
| 平成5年<br>5月 | 5/10 |           |         |            |
| 6月         |      |           |         |            |
| 7月         | 7/20 |           |         |            |
| 9月         |      |           |         |            |
| 12月        |      | 図面修正・トレース | 古錢洗浄・整理 |            |
| 平成6年<br>1月 |      |           | 拓       |            |
| 2月         |      | 本         | 挿図表     | 原稿執筆・図付    |
| 3月         |      |           |         | 図版         |

第2章 遺跡の環境

第1節 地理的環境

## 1 地質概要

金峰山修驗道遺跡は川上村の南東部に位置し、山梨県境にそびえる金峰山山系の北側の麓である。金峰山修驗道遺跡一帯は径1m前後の河床礫でおおわれ、金峰山川水系の河床から比高20~30mの河岸段丘となっている。遺跡もこの河床礫でおおわれていることから遺跡において生活活動が行われていた時代には、現在の段丘地形ではなく、沼澤原であったことがうかがえる。

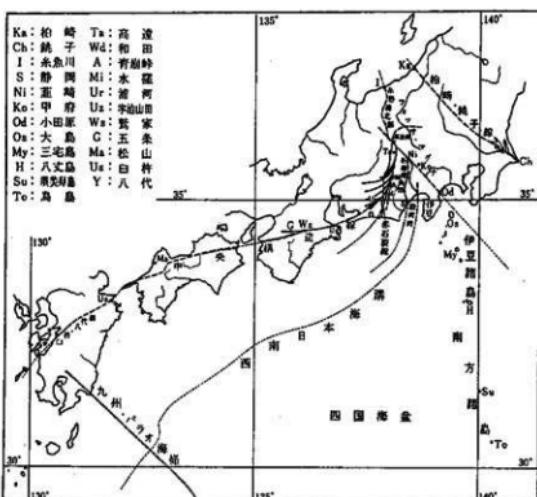
また、川上村の中央部を東西に流れる千曲川の周辺には遺跡周辺と同等の河岸段丘が見られ、そこには新期ロームが厚く堆積し、現在では高原野菜の農地として活用されている。このようにロームでおおわれた段丘に対し、遺跡のある段丘面ではロームの形跡は認められない。また遺跡は河川の氾濫によって消滅している状況から、遺跡のある段丘面の形成はローム層の堆積以後から始まり、遺跡消滅後まで続いていることがうかがえる。このことから時間的には1000年程度の間に河川の下削作用は數10mと進み、かなりのスピードで行われたことがうかがえる。このような激しい地形の変化は周辺の地質構造の影響を大きく受けている結果といえる。

金峰山を中心とした周辺の地質構造を概観すると金峰山山系の多くは花崗岩で構成され、その周辺部は川上層群とよばれる中生層からなっている。一見単純な地質構造のようであるが、地史的に眺めると佐久地方としてはかなり特異な地質である。それは中央構造線の影響を直接受けていることである。

## 中央構造線は中生代において現

在の日本列島の骨組みを形成した造山運動の結果生じた構造線である。九州の中央部を東西に横断し、四国山脈、紀伊山脈、さらに赤石山脈と続き、秩父山地まで見られるほどの大規模のものである。この構造線においては花崗岩が分布していることが特徴である。金峰山に見られる花崗岩は中央構造線の西端部に位置している。構造線は言いかえれば大断層帯で、激しい地殻変動を受けていたため地殻はもろく侵食作用の激しい一帯もある。

また、金峰山周辺では、金、銀、鉄等の鉱床が多く、古くは中世の戦国時代から太平洋戦争の時代にいたるまで採掘されていた。



中央構造線概念図

現在でも水晶の採掘が山梨県側で行われている。これらの鉱床は花崗岩による気成鉱床あるいは、接触鉱床とされている。

### 1 花崗岩

金峰山を中心とする花崗岩類の分布ははなはだ広く、底盤状の岩体である。甲府深成岩ともいわれている。

東方の甲武信岳から西へ国師岳・金峰山・小川山をへて、養父の西方に至っている東西約16kmにわたって連なり、関東山地の最高山稜部を構成している。

粗粒の黒雲母・長石・石英からなる閃雲花崗岩が普通であるが、梓川上流部・千曲川本谷上流部では部分的に



遺跡附近より屋根岩を望む…花崗岩の侵食

石英の極めて大きな結晶を斑晶状に含む花崗斑岩状岩石となっている。特にこの近辺では水晶の採掘跡が数ヶ所あり、現在でも長さ30cmを越える水晶の結晶片を採集することができる。ときには紫水晶も採集されるといわれている。これらの鉱床は花崗岩体中の気成鉱床といわれ、詳細な調査によってより広範囲に広がっていることも予想される。北側の中生層との接觸部では、堆積岩が花崗岩の熱によってマグマ状に融解し冷却固結したと思われる半花崗岩状の岩体を観察することができる。

このように岩質並びに花崗岩マグマの進入のし方から見て明らかにジュラ紀に見られた本州造山運動によって現われた西南日本外帯の花崗岩と同型の花崗岩である。

またこの地域の花崗岩は、金峰山頂部では方状節理がよく発達し、また地域によってはゼノリス状の小塊を多数含んでいる。

### 2 川上層群

御所平から十文字峠と川上断層との間に分布している。川上層群は四十累層群に位置づけられている。模式地は金峰山山麓の川端下地区東方の山地である。主に砂岩・頁岩・粘板岩・チャートの互層からなり、これに石灰岩・輝緑凝灰岩・礫岩等をはさんでいる。砂岩等の堆積岩は泥岩が頁岩に変化しているだけでなく、小片に割れやすく、露頭はくずれやすい所が多かった。特に、川端下地区に見られる露頭は硬い岩質ながら割れ目が無数に入り壊れやすい状態であった。これは花崗岩の进入による熱変成に加えて地殻変動等による動力変成の現れと考えられる。金峰山川下流の千曲川との合流付近では亦チャートが採集されている。佐渡で採集されている「赤玉」と同種のもので、県内ではかなり珍重されている。川端下地区近辺における川上層群は一般に西北西-東南東の走向で、北へ40°-70°傾斜を示している。全体として逆転しているという考え方もある。川上層群中の石灰岩には鳥巣石灰岩が多く、サンゴ・層孔虫の化石が発見されている。また石灰岩周辺の砂岩と頁岩の互層からはアンモナイト・二枚貝の化石が発見されている。以上の化石から川上層群は三疊紀からジュラ紀系と考えられている。川上層群の南縁は金峰山を構成している甲府深成岩体(花崗岩)に接している。接觸部は広範囲に接觸熱変成を受けホルンフェルス化している。そして広範囲に金属鉱床等が点在しているのが見られる。



川端下大島居近くの川上層部…硬砂岩

### 3 金峰山付近の地史

この地域の地史を地殻変動から便宜上、次の4期に区分し考えた。

#### I期…沈降期

現在の川上層群が形成された中生代の三疊紀以降である。堆積盆ができたことから始まる。堆積盆が発生すると堆積が始まり、堆積物の圧力で堆積盆はさらに進行し、さらに堆積を繰り返す現象である。川上層群の中にチャートが観察されることから、ここでの堆積盆の規模は大きく、深さは1万mを越す深海であったと考えられる。

#### II期…地殻変動期

堆積盆の沈降が終了時点から始まる。地下のマグマが堆積盆の堆積物に向かって進入し始める。このマグマの下からの圧力によって地殻は沈降から隆起へと転じる。隆起といつてもマグマの影響によって堆積物は熱変成を受け、また褶曲や断層といった変形によって動力変成も受けた。このころの地殻変動は日本列島を縦断する大規模な形で起こった。これが中央構造線である。中生代の終わりごろから第三紀にかけての時代である。マグマは地下深部のため、ゆっくり冷え固まったため花崗岩に変化したと考えられている。

#### III期…侵食期…

侵食は地殻の隆起とともに始まる。前期の地殻変動期から現在も続いていると考えてよいだろう。侵食は堆積盆に形成された堆積物から始まる。やがて、堆積物がなくなるとマグマの固結した花崗岩の侵食へと移っていく。現在の金峰山は花崗岩で構成され、川上層群は金峰山の周辺部に分布しているが、侵食開始前は金峰山の上に1万mを越す堆積岩があったと考えられる。そして、侵食後、堆積岩はわずかに残っており、現在では金峰山の花崗岩の侵食が続いているのである。

#### IV期…地形形成期

およそ10万年前の第四紀後半の沖積世において現在の段丘地形が形成された。段丘地形は氾濫原から始まる。遺跡をおおう表土の中に河床礫が認められることから、遺跡消滅後にも氾濫原は存在し、後に段丘地形が形成されたと思われる。

(伴野 拓也)

## 第2節 歴史的環境

### 金峰山と金峰山信仰の道

井

頂上に藏王尊を祀る金峰山(2,595m)は、長野県南佐久郡の南部、川上村川端下の南端山梨県との県境にあり、西に小川山、東に朝日(2,579m)国師(2,591m)更に甲武信へと連なる山脈の主峰で、南北を分つ自然の障壁となり、千曲川水系と富士川水系の分水嶺をなす。

南西は山梨県甲府市と同県北巨摩郡須玉町にまたがり麓には金櫻神社がある渓間の川は荒川の源流となり、太平洋に注ぐ。北面長野県側は、直下の麓に川端下の集落がありここを水源とする金峰山川は、居倉、秋山の境の川又地籍に至り千曲川に合流する。この川は往古、かつては、古図にも記されているように千曲川の水源とされていた。

千曲川は延々新潟県に至り信濃川と名を改め日本海に注ぐ延長実に367km、日本第一の長流となり流域三百万余住民のくらしを潤す大河川となる。

金峰山は、その千曲の水源をなす水分神の靈山として、山麓ばかりでなく、遠く下流一帯にその存在が知られて居り、内外より多くの尊信を集めた山である。

## 南北時代の勅選歌集「風雅和歌集」に順徳院の御歌

ちくま川 春行く水は すみにけり 消えていくかの 峯の白雪

と金峰山と千曲川を詠じた御歌がある。(金峰山は幾日の峰ともいう)また、金峰の西に連なる小川山(2,418m)(古名いぐら山)も平安時代の類題歌集古今和歌六帖に、

わかれては いくらの山を 越ぬれど あうことがたく なりもてくらん  
とあり、又、懷中抄にも

たるるるる 身のうきことは いくら山 いくらばかりの 嘴きなるらん

とあるように、千曲川源流の地は早くから広く世に知られていたことがうかがえる。

金峰山直下麓の川上村は東に金峰山を主峰とする秩父山塊と西に八ヶ岳の裾野に広がる台地とに開まれ、東西20km、南北12km、周囲70km、208.67平方kmの面積を有し、甲武信岳に発した千曲川が東西に貫流して流域に幾つかの、段丘平地を形成し、東西に細長く開けた小盆地である。村外との交流はいづれも峠越によって行われた。大倉、馬越、野辺山、信州峠、十文字、三国峠など。

千曲の河岸に沿って上流に向い樋沢・御所平・原・大深山・居倉・秋山・梓山の七集落と支流金峰山川に川端下の合計八集落が点在する。これらの集落は各一村をなしていたが明治の町村制施行により川上村一村に統一され現在に及んだ。はじめの集落の起源、成立等は詳かでないが村内には先土器時代の柏垂遺跡、馬場平、網文中期の大深山遺跡等を始め平安期までの多くの遺跡の存在が47箇所も確認されているのでそれらから古代の様子を偲ぶことはできる。

村内の道路は千曲川に沿って樋沢から各部落を結んで東西に走っている。この道は昔は、ちちぶみち、あるいは武州道又は秩父往還とも云われ、西は原、御所平から南方武田勢が佐久攻略に侵入して来たと云う小尾峠(現信州峠)を越えて山梨県須玉町へ。又、樋沢からは野辺山を経て佐久甲州道へ、更に中山道へと続く。東は梓山から三国峠を越えて埼玉県秩父郡大滝村中津川へ。又、十文字峠を越えて同村柄本に通じる。江戸時代柄本と秋山には関所が置かれた要路であった。特に十文字路は三峠参詣の修験道の道であり物資の輸送、江戸への近道として栄えた。関東側からは善光寺の参道となり、更に三峠参詣から木曾御嶽山参詣への道順として、中山道の裏街道の役割を果たす道もあった。元治元年の梓山村川上澄雄氏文書によると同年八月中十文字峠通行者は記帳された者だけで309人を数えることができる。

川端下から金峰山への道は秋山で武州道から分かれて秋山原に登り金峰山の巔峰を遠望し乍ら集落に達する道と、古くは居倉の「しだみじゅく」から金峰山川の西部左岸をさかのぼる道があった。「しだみじゅく」には平安時代の住居跡があり内面黒色土師器や須恵器等の出土があった。

金峰山への道は、金峰山川の左岸集落西側台地の墓所平附近石安場から、大日沢を横切り大日堂を経て十石沢附近から西股沢に入り金峰山川をさかのぼり山頂に達する。山頂から甲州側に降り金桜神社に到る修験道の行者道へと続く。修験者はもとより金峰山を目指す人は秩父道からこの道を辿った。今に道者道、あるいは行者道の名が残っている。昔この行者道を通る石安場一帯は草原の続く野中の道であったが、現在は開墾されて一面の野菜畑となり、あるいは植林となるなど様相は一変し昔の行者道はさだかでない。行者道には大日沢手前に(今は植林の中)佐久一番の鳥居と云われる金峰山の大鳥居が建てられていたが、農地造成による廃道等により川端下宿入口の現在地に昭和十二年頃移転建立された。

鳥居創建の歴史は詳らかではないが現存する建立についての記録は享保十年(1725)三月と天明二年(1782)二月の古文書のみである。鳥居の近くに大きな屋敷跡がいくつもあった。とか御師の家があった。寺院三軒の跡があった等伝承があるが、それを語ってくれたと云う人々はすでに故人となられたので尋ねる術もない。鳥居

金欄、銀欄の幟旗



1. 銀  
一、暗黒藍地牡丹唐草文様銀欄  
六十cm×三m二五  
宝暦二年六月（一七五二）  
金欄・銀欄の幟旗

2. 金  
一、暗黒藍地菊紋九章文様金欄  
六十cm×三m三〇  
宝暦九年三月（一七五九年）

3. 銀  
三、蘇芳子地牡丹唐草文様銀欄  
六十cm×二m九〇  
明和二年六月（一七六五年）



裏側  
幟の裏側  
1  
一、奉納金峯山藏王大権現  
宝暦九年  
明和二年

2  
一、奉納金峯山藏王大権現  
去下部欠損ス  
宝暦九年  
明和二年

3  
三、裏文字無し

附近的屋敷跡に宿坊のような家があったかどうか、修験者とて日暮れてどこに宿るかということは必ず起る問題である。宿坊施設のなかった古は寺院や民家に頼るはかなかったものと考えられる。金峰山信仰や三峯山信仰者の多く行き交う武州往還の宿場とも云える川上村の旅籠の歴史は詳らかでないが明治十八年の記録によると村内に十八軒の旅館があり、うち川端下三軒、居倉・絆山に各二軒である。

鳥居を過ぎ程なく大日沢の川を渡ると川端に一字の大日堂があった。現在は水害のため昭和三十四年八月に下流の安全な現在地に移転している。大日堂のことは一名姥堂とも云われているが堂内には、永禄年間に相木城主の二男常富坊法印が建立し金峰山の先達としたという胎藏界の如来像（母子像という）二体が安置されている。尚、隣にはもと屋根岩の東近くの山頂に斎されていたという、春日造りの金峰山里宮が遷座し木造の藏王権現像が安置されている。

金峰山登拝者は行者道からここに立寄り参拝したということであり、又毎年八月十四日には村人や修験者はこの大日堂に参籠して、後夜中に金峰山目ざして出發し仏晩には登頂し御来光を拝する行事が行われていたが、戦後すたれで了った。筆者は昭和九年の同日この行事（登山）に参加した。その時多勢登山者の中に、村外からは小海町から来た鷹野高一君ら數名が居たことを憶っている。この大日堂は姥堂とも云われて、女人禁制の修験道である金峰山へはここを女人結界の地とされていた。昔母娘二人の頼が禁を犯して金峰登拝に向かったところ程なく火の雨が降り二人はここで遭難し母は六十石（極枯か）娘は小十石（極枯）で倒れ絶命したということで、

金峰神社の銚口

銚

上州佐賀庄大島郷巌島鶴口也、檀那同所住人

享徳元年十二月十三日  
六郎三郎出吉

宝町時代  
享徳元年ハ西暦一、四五二年



今にその地名がある。

金峰山川の右岸、東の長尾山は金峰山川と梓川にはさまれた山で秋山の梓久保と表裏をなす山で、戦国時代武田氏によって金山開発が行われて金振の人々が多く住んで居り、梓千軒、川端千軒といわれるほどに栄えた。永禄・天正年間に最も栄え、慶長年間に衰微したと伝えられている。当時守も五寺を数えたが金山の衰退と共に他の地へ移ったということである。金山開発は武田氏以来時代の消長はあり乍らもその後昭和年代まで続いた。

川端下集落のはずれに、大巳貴命を祭神とする氏神、金峰山の里宮金峰山神社がある。本殿の奥には金剛藏王権現像がまつられている。創始建立のことは不詳であるが社内の安永四年（1775）の棟札の裏面に、慶長五歳（1600）中春仙石越前守奉建其後及大破元禄歳中林市之□□吉奉建立者也と表面の文字とは異筆の記事がある。この里宮に奉納された社宝に直径30cm位の銚口一口がある。銚に上州佐賀庄大島郷巌島鶴口也、檀那同所住人享徳元年十二月十三日 六郎三郎出吉 とある。奉納された経緯等全く不明であるが、金峰山信仰が彼の地まで及んでいたことを知るうえで重要であり、又巾60cm、長さ3m余の、金・銀織の織三流が奉納されている。いずれも氏子によるもので、宝曆二年（1751）銀の織、宝曆九年（1759）金の織、明和二年（1765）銀の織で、いづれも京都西陣で織られたものであるという。当時京都との交易や金山と金峰山信仰との関係を知るに貴重な社宝である。

金峰山里宮は川端下のほか隣接の秋山、梓山の氏神も金峰山神社で大巳貴命を祀る。又居倉にも金峰山神社の里宮がある。

金峰山山頂は全山花崗岩からなり、巨大な岩塊が積み重なっている。金峰山を特徴づける五丈石（御像石）と呼ばれる高さ18m余の岩塔が山頂のやや南西にあり、附近からは平安末期から鎌倉期の陶磁器の破片、土師、須恵器の破片、開元通宝等の銭宝、磁、劍、焼けた釘等の鉄製品の遺物が多数発見されている。頂上に修驗の建物があったが消失したと伝えられている。

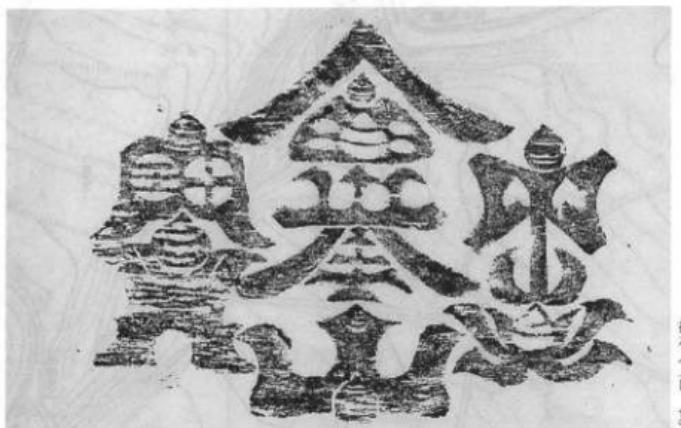
この山頂へ山梨県側からは甲府市御岳町の金桜神社からの行者道がある。甲斐国金峰山金桜神社御嶽山曉春之図と云う古絵図には、神領境内、里宮御嶽山一ノ鳥居より本宮（頂上）マテ行程九南北七里（28km）東西四里余（16km）鳥居九ヶ所、御像石高サ二十五間横十八間、絶頂ニ池アリ甲斐源美ト云元早ニモ水不涸是則水種也ト云。と記されている。また甲斐国誌にも、このことが記されている。川端下からの修驗道の行者道はこの山頂を経て

金峰神社に通じていたのである。

金峰山縁起によると四十二代文武天皇700~707の御代、役行者が東国に向かい行脚中中仙道の宿、塙名田の橋で千曲川に梵文の浮いて流れて来るを見て感じ、それより道を変えて千曲川をさかのぼり、神仏の導を得乍ら川端下に入り遂に水無月（六月）十六日黄昏時金峰山頂に達し、奈良、吉野の金峯山より分身を遣したという金剛童子現を押し肝銘、感涙し神恩に謝して七日間参籠の後、東国に下向し金峰山の信仰を広めたという。以来修験道の山として栄えた。

金峰山信仰の栄えたころ、頒布されたと思われる神宝のお札を刻った昔を今に語る古い版本（原版）が残されている。（小原勝雄氏所蔵）版面の摩滅の状態等から、長い間に多量に手摺りでお札がつくられ、多くの信者に頒布されたものと、往時を偲ぶことができる。縦24.5cm・横33cm・厚サ4.5cm角がとれ丸みを帯びたこの版本は、年輪こそ数え読みとることはできないが、一見して古さを語り金峰山信仰を今によみがえらせることのできる貴重な資料といえる。

(上田 貴)

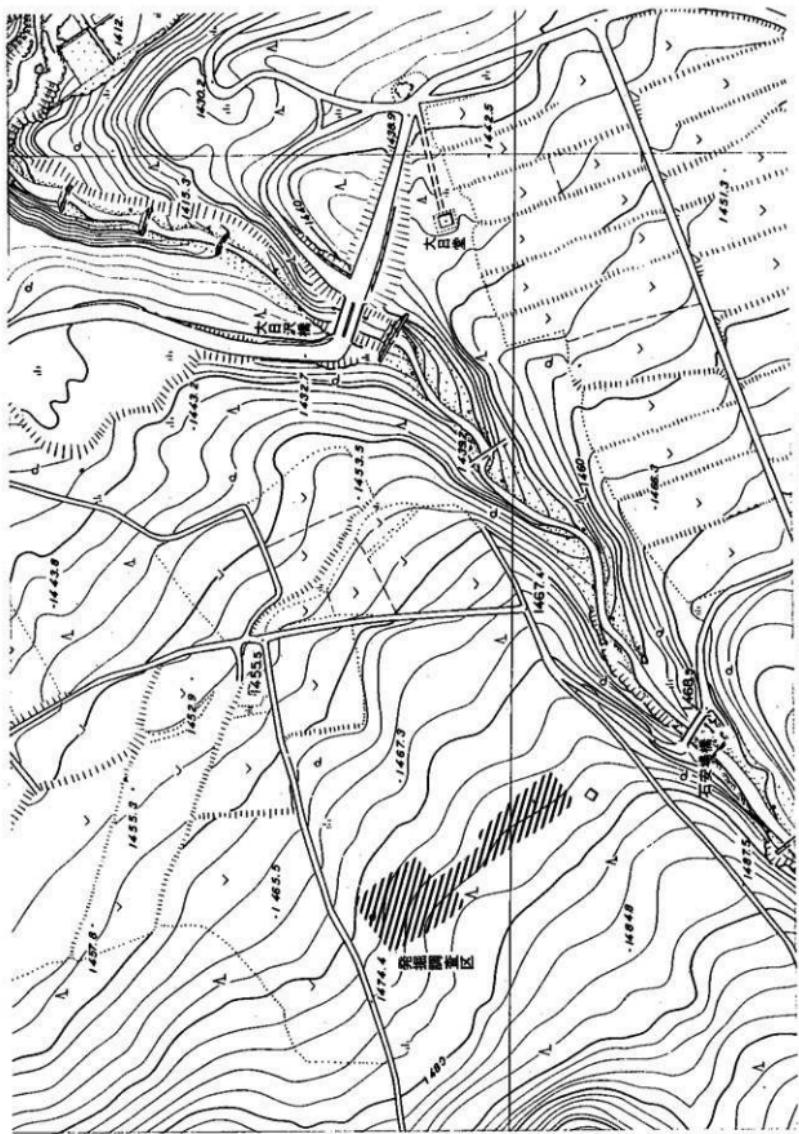


午

金峰山

宝

第1图 金峰山修整道路地形图及防火隔离带区 (1 : 5 000)



## 第3章 層序

本遺跡の層序は、第2章遺跡の環境の章で示された「地質概要」に記されているように、周辺一帯が河床礫で覆われていることが特徴としてあげられる。この河床礫のある段丘面の形成はローム層の堆積以後から始まり大日沢川の下削作用は数10mとかなりのスピードで遺跡消滅後まで続いていると考えられている。

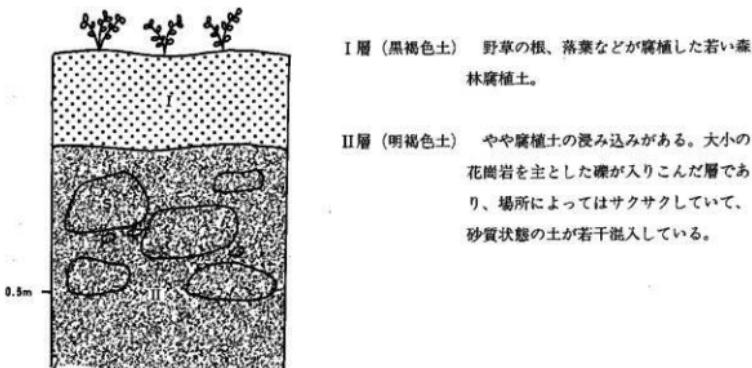
こうした状況から遺跡周辺は、小川状の氾濫の筋が數カ所に残り、一帯が氾濫原であったことを示す大小の礫が散乱している。

遺跡は、中世末に始まり江戸時代前期に最盛期を迎えており、一面に生えている野草、落葉が腐植堆積した表土を15cm～20cm程掘り下げるとき、大小の礫が顔を出しその間から古銭やキセルなどの遺物が出土するというように覆土が浅く、層序的には簡単なものであった。

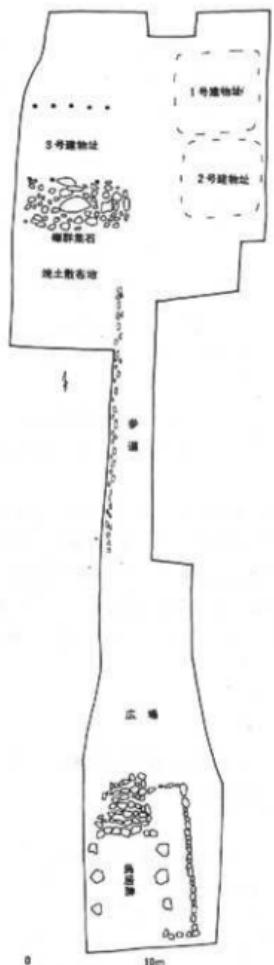
礫は、平坦面が終わるところに集中している。これは、平な土台を築くために石を集めて積み上げているのである。この場合、自然の状態の石は3～5割を占め、残りは周囲の石を集めている。こうした状態を見分けるには、石の並びや方向によって観察できる。氾濫によって流れてきた場合、石は流れる方向に向いて止まり、ほぼ一定の状態に並んでいるからである。

遺跡の周辺は、南に屋根岩と呼ばれる見事な岩盤上の岩山がそびえ、白樺やからまつ林がその裾に広がって景観としては最高の環境にある。また、遺跡の段丘下には浸食を受けてかなり下へ下へと地形をけずって深い沢を形成した大日沢川が西側～東側方向へ流路をとっている。

また、遺跡周辺に散乱している礫は、主に金峰山を中心として分布する花崗岩類で占められている。一般的な花崗岩は粗い粒の黒雲母・長石・石英からなる閃雲花崗岩であるが、この付近では、部分的に石英の大きな結晶を斑晶状に含む花崗岩斑状岩石であるといふ。さらに、水晶の採掘跡が数ヶ所に残っていて、中世には武田信玄配下の金山衆が金の採掘を行なっていたといふ伝承がある。今回の調査は、全て手掘り作業であったため、層序観察のための深掘りトレンチは設けていないので、第2章の地質概要を参照していただきたい。（島田 恵子）



第2図 金峰山修験道遺跡層序模式図



第3図 金峰山修験道遺跡検出遺構全体図



1 2号建物跡跡



2 歩道(?)



3 鳥居石段(西方より横から)



4 鳥居石

## 第4章 遺構と遺物

### 1 1号建物址跡

#### 遺構（第4図）

本建物址は、農道から林の中に入った北東端に試掘中に検出された。試掘では、一部分の掘り下げにとどまっていたため本調査に入ってから本格的な掘り下げに取り組んで完掘に至った遺構である。

平面プランは、東西7.5m、南北8.5mを測る方形プランの敷地内に建てられた建物址となる。地形が東西に緩傾斜しているため、東端に石垣を築き、おびただしい数の礫を集めて土台を作り出している。礫は氾濫によって運びこまれた1m内外の巨石を中心に、20~60cm位までの中小の礫を集めている。特に南東側に多く集められ土台を固めている。建物址の主軸方位は、N-10°-Eを示し、ほぼ北方向に主軸をとて建てられていたことが理解できる。

柱穴は、合計7個発見された。この内、P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>までは一つの建物址としての規格性をもっているが、P<sub>5</sub>~P<sub>7</sub>は配列が不揃いである。P<sub>1</sub>~P<sub>3</sub>までは4.7mを測り、P<sub>3</sub>~P<sub>4</sub>までは5mを測る。北東コーナー側に明確な柱穴が検出されなかったが、それらしき状態のP<sub>8</sub>があり、P<sub>4</sub>~P<sub>8</sub>の間隔は4.65m、P<sub>1</sub>~P<sub>8</sub>は5mを測り、ほぼ、4.7m×5mの方形の建物址の存在が浮かび上がってくる。各々の柱穴の規模は、径、深さ共に20~30cmを測る。この内、P<sub>3</sub>は石で囲い、10~20cmの長さの石を側面に立てている。この状態は、2号建物址の柱穴に最も顕著にみられ、本遺跡の柱穴の特徴といえるものである。

P<sub>5</sub>、P<sub>6</sub>の柱穴は、径30cm、深さ20cmを測る。P<sub>5</sub>は側面に石を立てていることから、やはりP<sub>3</sub>、P<sub>4</sub>と同様の柱穴を築いている。しかし、配列は不明である。これ等の柱穴からみて建物址の規模を復原すると、東西方向は約2間半、南北方向は2間半強で23.5m<sup>2</sup>の広さの建物となろう。

石を集めて土台を平坦に築いた敷地内は、南東側方向に傾斜している関係からこの方向に大半の礫を積み上げて頑丈に土台を作り出し、この礫の上面に土を5~10cm程度敷きつめている。第4図は土を剥いだ状態の礫の積み上げ部分を実測したものである。西北側は表土を削平し清掃したあとの状態であるが、土の間に礫が散布していることが分かるが、このように礫の上面に敷きつめた土は少ない。

東側は、石垣を築いて傾斜面をカバーしている。石垣は、北側65cm、南側40cmの高さに築き、石は2~4段に積み重ねている。石は、25~80cm大を主に積み上げ、支えの石は10cm大の小さいものもある。特に南側は幅110cmの大きな石を使っている。

南側は、石積みと石積みの間に幅20cm~50cmの溝が生じている。この状態から別の建物址、あるいは何等かの施設が存在していたことが理解できる。溝と石積みとの高低差は30~50cmを測り、2~3段の石を積んでいたともわれるが、調査時点の状態はかなり崩れてしまい、東側のような石積の状態はみられなかった。

また、P<sub>1</sub>、P<sub>6</sub>の中間でP<sub>7</sub>の脇に70×50cmの範囲に焼土が堆積していた。焼土は、5cmに満たない厚さで炭化粒子が混入していた。

#### 遺物（第5・6図）

本建物址内からは、試掘の時点で陶器片1点、古銭2点が出土し、さらに、本発掘調査で古銭6点が出土している。その内、古銭1点は1.2cmの破片のため拓影は省略した。

第5図の陶器は、黒褐色の釉の上に茶褐色の釉が斑点状に施釉された瀬戸・美濃系の碗である。口径9.7cmを

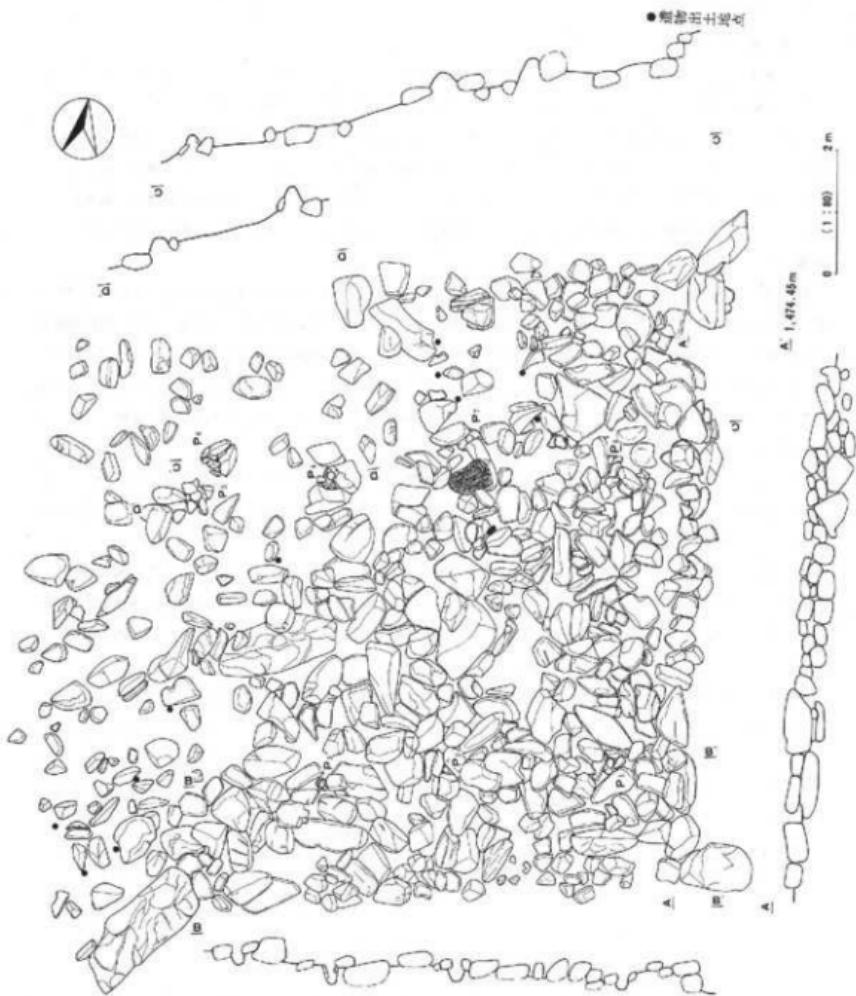
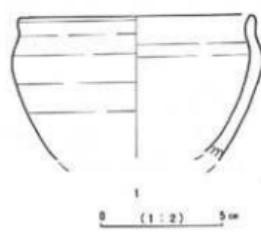


图 14 一小块砾石层平面图 (1:100)



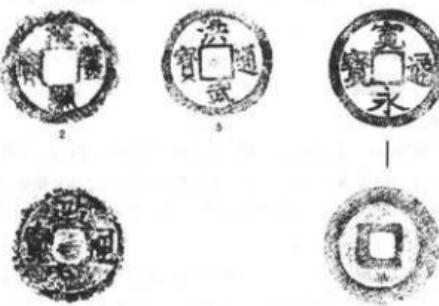
第5図 1号建物址出土陶器実測図

測り、口縁端部でややくびれ、端部のみ全体に茶褐色の鉄釉が施釉され色どりが美しい。16世紀の製品であるとの御教示を得た。出土地点は、焼土から60cm南寄りの表土直下から古銭No.4 洪武通宝と共に出土している。

第6図に示した古銭は、元豐通宝(1078年)~寛永通宝(1642年)まで7点を示した。1~3は北宋銭、4~5は明銭である。寛永通宝は、寛永3年に水戸の富



0 (1:2) 5cm



0 (1:1) 5cm

第6図 1号建物址出土古銭拓影図

第2表 1号建物址出土古銭一覧表

| 押印番号 | 銭名<br>(字体) | 初鋳年<br>(西暦)                            | 時代 | 法量   |      | 背文 | 備考     |
|------|------------|--|----|------|------|----|--------|
|      |            |  |    | 直径   | 重さ g |    |        |
| 6-1  | 元豐通宝真書     | 元祐元年<br>(1078)                         | 北宋 | 23.0 | 3.0  |    | 鏡写しビタ銭 |
| 6-2  | 元豐通宝篆書     | #<br>(1078)                            | 北宋 | 24.0 | 2.3  |    | 鏡写しビタ銭 |
| 6-3  | 政和通宝真書     | 政和元年<br>(1111)                         | 北宋 | 24.0 | 1.85 |    | 鏡写しビタ銭 |
| 6-4  | 洪武通宝真書     | 太祖洪武元年<br>(1368)                       | 明  | 20.0 | 2.55 |    | 鏡写しビタ銭 |
| 6-5  | 洪武通宝真書     | #<br>(1368)                            | 明  | 23.0 | 2.20 |    | 鏡写しビタ銭 |
| 6-6  | 寛永通宝真書     | 寛永3年<br>(1626) 初<br>寛永13年<br>(1636) 幕府 | 江戸 | 22.0 | 3.20 |    | 古寛永    |
| 6-7  | 寛永通宝真書     | 寛永3年<br>(1626) 初<br>寛永13年<br>(1636) 幕府 | 江戸 | 24.0 | 2.50 |    | 古寛永    |

商佐藤新助が藩の内諸を得た後、幕府の許可を得て銭業を始めたのが最初で、幕府が江戸橋場と近江に錢座を設けて銭入ったのは寛永13年のことである。6は、7と比較して2mm程直径が縮小している。また、7は緑背が少ない。銭年代と母銭の違いによるものであろう。しかし、両者共に寶の字の貝がス(ス宝)のようになっていることと、書体が圓字であるため古寛永に属するものである。古寛永は、明暦まで、新寛永は寛文以降をいう。

1～5の北宋・明銭は渡米銭そのものではなく、ビタ銭であるとおもわれる。字体、薄さ、縮小などにより判断できるものである。ビタ銭は鎌倉時代末期ごろから民間で鋳造することがふえてきたという。さらに、オランダ人から東洋貿易に使う銭貨の鋳銭依頼があり、万治2年(1659)から27年間鋳銭を行なった長崎貿易銭などがあるため、ビタ銭はかなり出回っていたと考えられる。

以上の出土遺物から、本建物址は中世末～江戸時代に位置付けられると考えられる。また、建物址は宿坊跡ではないかという意見もあるが、生活用品、カマド跡などの遺物、遺構の痕跡がみられないことと、古銭・供獻用陶器などの出土品、護摩を焚いたと考えられる焼土の痕跡などから、札拝をする祭殿、あるいは行者堂などの修行の場であったことなどが推定できる。

## 2 2号建物址

### 遺構(第7図)

2号建物址は、1号建物址南側の溝を隔てて隣接している。石積みはこの隣接した接点に長さ6m、幅4.5m～2mの三角形に集められている。南西側はところどころに散布しているだけで自然地形の状態にあるといえよう。礎は、10～90cmまで大小が混在している。溝を隔てた北側は1号建物址と同様、かなり崩れて石垣を築いた様相が感じられない程である。

また、三角形に石が積まれた部分の西側で礎が空白に入る地点に、90×100cm、80×80cm大の平坦な石が1.2mの間隔をもって敷いた状態にあり、礎石としての機能を考えられたが、配列などの関係から無理がある。周辺を精査したが柱穴は検出できなかった。しかし、三角形に石が集められている部分を中心として、約6m×7mの範囲に建物址あるいは何等かの施設があったと想定される。礎石状の平坦な石の状態から2本柱をもつ鳥居、または出入口に向わる柱の礎石と考えられるはしないだろうか。

この一角に散布している礎の範囲は、東西10.5m、南北15.6mの規模に広がっている。地形は、西側から東側にかけてレベル的にみて約70cm緩傾斜しているがほぼ平坦で、1号建物址のように石垣を積むほどではなかったようである。北東コーナー側の溝に面した部分に若干の石積みがみられるのみである。礎は、大きなもので2.1m×90cmの長方形の巨石があり、この他、1.4m×40cm、1.1m×40cm、90cm×70cm、80cm×40cmのかなり大きな礎が西側を中心に散布している。東南側はまばらにあり、20～50cm大小の小礎が散布しているのみで少ない。ここから南側に向かって立派な石段と石垣、礎石を有する鳥居までは平坦な広場が続く。

### 遺物(第8・9図)

出土遺物は、古銭8点、釘状鉄製品、銅製キセルの吸口～胴部片各1点が出土している。出土地点は西南側の11m×7mの範囲に分布しているが、半分は3号建物址と段をもって隣接している西側から出土している。

古銭は、2点が破片であったが銭名は判明している。銅製の古い順からみると、破片でNo5の開元通宝は唐(621年)の時代のもので古い。出土した破片を観察すると緑青が少ないが、大きさは渡米銭とピッタリ合う。表面の縁が薄く渡米銭であるかは分らない。1～4は、北宋銭で1・2は皇宋通宝、3は元豐通宝、4は元符通宝である。1・2は同じ皇宋通宝であっても、大きさ、字体が異なる。1は篆書で2は真書である。1は縁が太いが均一でない。2は縁が細くゆがんでいる。1・2共に薄い。3の元豐通宝は薄く緑青は全くみられないが割れ目断面は青い。4の元符通宝は、渡米銭と比較するとやや縮小している。6・7の洪武通宝は、6は縁が細く7は太い。特に7は緑青が少ない。8の寛永通宝は、寶の貝がスであるから古寛永に属するものである。

第7图 2号建筑物地基剖面图





第8図 2号建物址出土古銭拓影図

第9図1は、縁背がふき出た青銅製のキセルの吸口かと考えられる。吸口部分の孔は細く2mmである。胴部は1cm×0.7cmを測り空洞は大きく横に広がっている。吸口から胴部にかかる部分までは、4.4cmを測り三角形状に胴部に向かって広がり、断面は0.1mmという薄い銅板が使用されている。

2は、断面が四角形を呈した釘で8cmを測るが、先端の鋭利に尖った部分がやや欠失す

る。先から5.5cmを測る部分から1.5cmの長さで横に曲がり、さらに、2.5cmの長さで直角に曲がっている。この釘は、5.5cmを測る長い下端を板・壁に打ちつけて、逆L字(1)形の部分に銘文などを掛けたとおもわれる。

1・2共に3号建物址の段下の付近から出土している。

第3表 2号建物址出土古銭一覧表

| 押印<br>番号 | 銭名<br>(字体) | 初鋤年 (西暦)                         | 時代 | 法量   |      | 背文 | 備考     |
|----------|------------|----------------------------------|----|------|------|----|--------|
|          |            |                                  |    | 直径   | 重さ g |    |        |
| 8-1      | 皇宋通宝篆書     | 元寶二年 (1039)                      | 北宋 | 24.5 | 2.80 |    | 鉛写しビタ銭 |
| 8-2      | 皇宋通宝真書     | " (1039)                         | 北宋 | 23.0 | 1.65 |    | 鉛写しビタ銭 |
| 8-3      | 元豐通宝真書     | 元寶元年 (1078)                      | 北宋 | 24.0 | 1.95 |    | 鉛写しビタ銭 |
| 8-4      | 元符通宝真書     | 元符元年 (1098)                      | 北宋 | 24.0 | 2.85 |    | 鉛写しビタ銭 |
| 8-5      | 開元通宝真書     | 武德四年 (621)                       | 唐  | 24.0 | —    |    | 鉛写しビタ銭 |
| 8-6      | 洪武通宝真書     | 太祖洪武元年 (1368)                    | 明  | 22.0 | 1.35 |    | 鉛写しビタ銭 |
| 8-7      | 洪武通宝真書     | " (1368)                         | 明  | —    | —    |    | 鉛写しビタ銭 |
| 8-8      | 寛永通宝真書     | 寛永3年 (1625) 初<br>寛永13年 (1636) 那府 | 江戸 | 23.5 | 2.90 |    | 古寛永    |

### 3 3号建物址

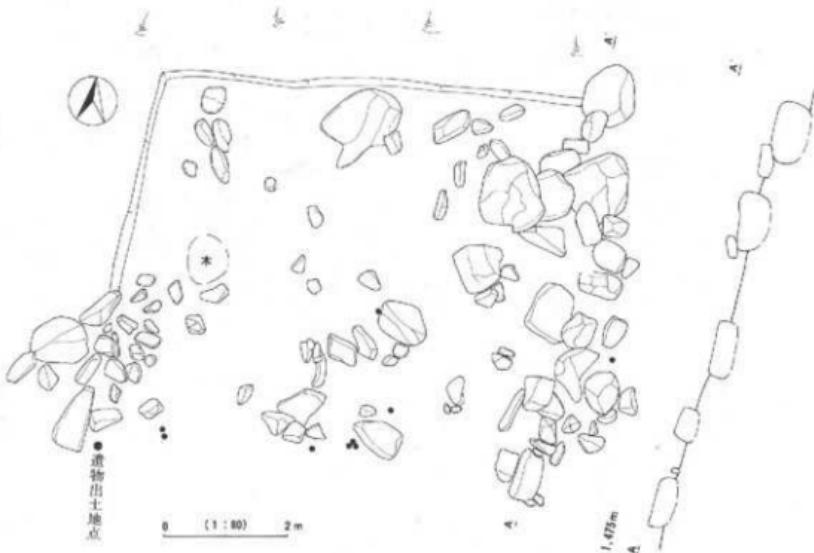
#### 遺構(第10~11図)

3号建物址の所在する地点は、1号・2号建物址と相対する西側に位置し、約30m×10mの範囲に建物、礫群焼土の点在する群がみられる。図面が大きいため各々4枚の図に分けて示したので、北方から順を追ってみていただきたい。

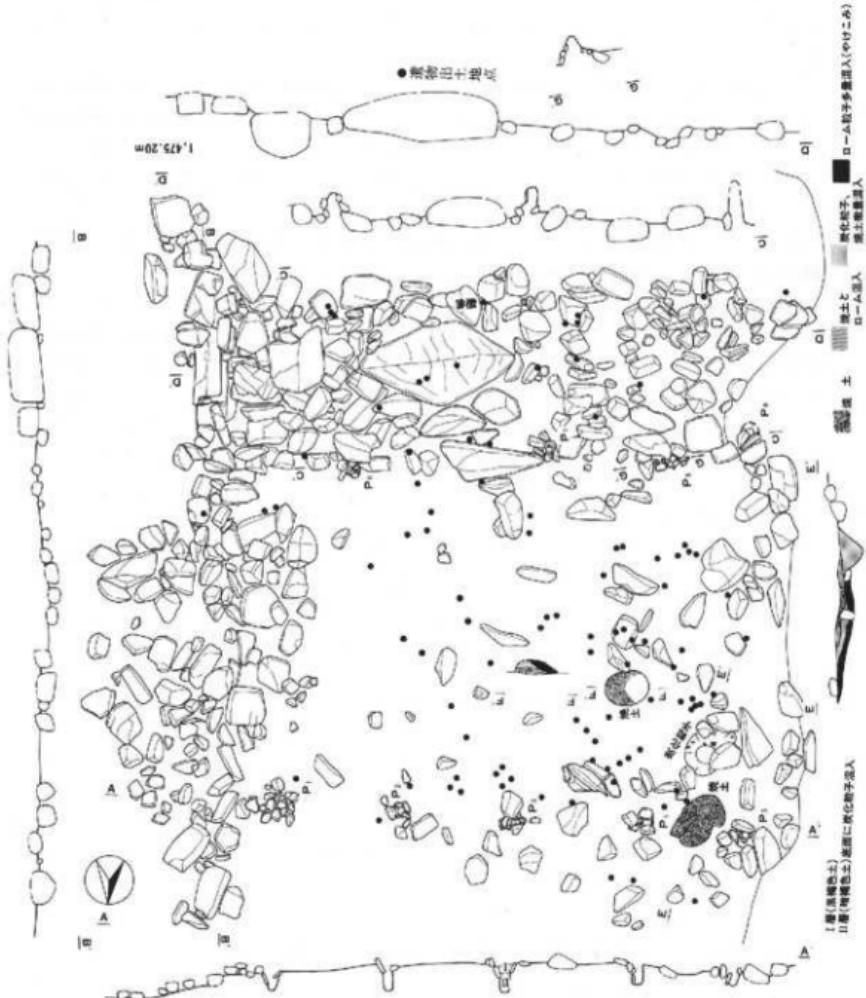
先ず、第10図は林入口の北端部で一段微高地となる地点である。1号建物址が東側に向い合う状態の位置に属する。ここは、段差の生じる東側に礫が散らばっている。大きいもので1.2mを測るが、50~80cm大の礫が大部分を占めている。きちんとした石垣を組んではいないが、ある程度の石積みをして平坦にしたもののが崩れたと考えられる。礫散布の地面と微高地中央ではレベル的に50cmの段差があるが、この程度の段差であれば大きな礫を並べたのみで石垣の役目を果したと考えられる。

北端側2mまではやや傾斜しているが、それより内側に入るとほぼ平坦になり遺物の散布がみられる。やはり建物の存在する手前から古銭などの遺物の散布がはじまっている。

次の第11図建物址の存在する地点に移りたい。ここは、北側出入口部から7m南側に柱穴が配置している。東西側に5個の柱穴が一列に並び、その間隔は1.6mを測るが、P<sub>3</sub>とP<sub>4</sub>の間が1.4mとなる。柱穴は、両側面から壁際に10cm~25cmの長さの細い梗をしっかりと埋め込んで補強し、径16cm、深さ30~50cmの穴を掘り込んでいる。覆土は黒褐色を呈し、0.5~2cm大の炭化粒子の混入がみられた。また、50cmの深さに掘り込まれたP<sub>5</sub>は層序がI層とII層に分かれていた。炭化粒子はどの柱穴も底面付近に混入している。径16cm程度の細い柱材を穴いっぱいに埋め込んで柱が立っていたと考えられる。



第10図 3号建物址北側広場実測図



第11図 3号植物柱頭米面図(1:100)

これに相対する向かい側の柱は、6m南側に位置している。この地点から礫群が散在しているため柱穴の検出は困難であった。 $P_6 \sim P_9$ まで4個の検出にとどまりこれ等の柱穴はきちんととした配列を示していない。しかし、北側の石で補強した柱穴と同様の掘り方がなされており、配列がバラバラではあっても柱穴であることは確かである。 $P_6$ は $P_1$ と $P_2$ との間に相対し、両側に上下2段の石で補強し、径20cm、深さ40cmを測る。 $P_6$ から $P_9$ までは3.3mの間隔があり、さらに30cm外側に $P_7$ が存在する。 $P_7$ は、径20cm、深さ40cmの掘り込みで、上場の両側面に礫が埋め込まれ、東側の側壁に4cm×18cmの細長い礫がしっかりと埋め込まれている。 $P_8$ は、 $P_7$ から2mの間隔があり、20cm程内側に掘り込まれている。 $P_9$ と同様東側の側壁に10cm大の小さな礫が三段に埋め込まれている。深さは30cmを測る。 $P_9$ は、白樺の木がすぐ際にありその根が張り込んでいるため完掘することはできなかったが、ピンポールの差し込みから計測すると、深さは約60cm程になると推定される。覆土は、 $P_6$ が熱を受けた土層でやわらかくベトベトしていた。どの柱穴も炭化粒子の混入が底面付近に多くみられた。

以上が柱穴の状況であるが、3号建物址は北側にきちんとした柱穴の配列があり、東西8m、南北6mの建物が存在していたことが理解できる。東端は約50cmの段差があるため礫を積んでいたが、幅2mにわたって礫が崩れて散乱している状態がみられる。また、配列のきちんとした北側の柱穴に対して、南側に相対する柱穴は礫群にはばまれてきちんとした配列ができなかつたとおもわれる。4個のみの検出にとどまることと、やや歪んだ配列となった。しかし、柱穴の掘り方は同様の方法がとられている。

建物内の土台はところどころに40~80cm大の礫が散らばっているが、ほぼ平坦で踏み締められたかのように固くなっている。 $P_4$ と $P_5$ の間に60×90cmの範囲に焼土が堆積していた。その南側30cm離れた地点に60×90cmの落ち込みがあり、5~10cm大の炭化材が散布していた。上面には焼土が微量認められたのみである。この地点からさらに1m東側に焼土が55×70cmの範囲にわたって堆積していた。焼土は厚さ10cm程度であるが、その下部15cmの厚さにわたって熱による焼けこみが生じている。この地面に直に火を焚いたことが伺える。3号建物址内には2箇所の火を焚いた跡が所在し、床面直上から古銭が80点出土している。古銭の散布は焼土を中心にして6m×6mの範囲に集中しており、焼土との関連が考えられる。また、床面直上からの古銭の出土は、この建物内は土間で床張りではなかったと考えられる。

#### 遺物（第12~14図）

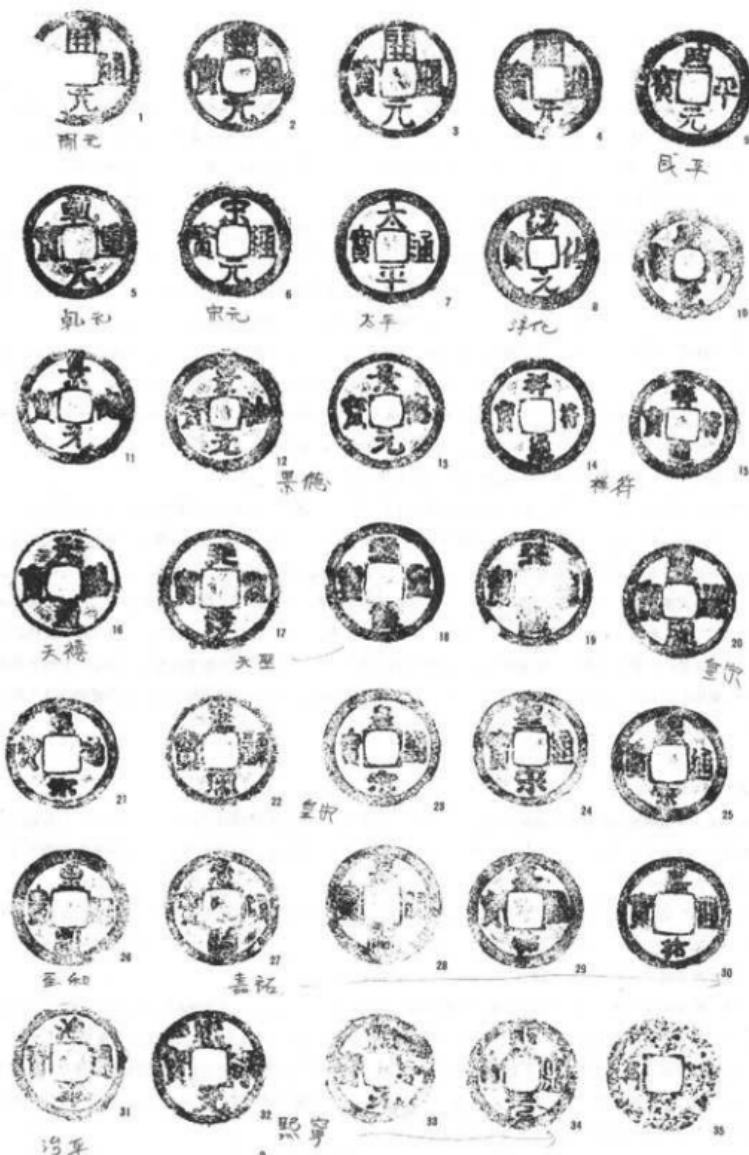
第11図3号建物址跡の断面に遺物出土地点を明示してあるが、第12~14図はこの地点から出土した古銭拓影図である。13枚重なって出土したものは1箇所の出土地点としているため、81地点95枚の古銭が拓影可能となり、発行年のあるものから順を追って並べた。

1~4は、開元通宝である。これは、唐の時代で発行年は621年にあたる。4枚共に同一の鋳型から鋳造されたものではない。各々字体が微妙に異なることと、2と4は同じ大きさであるが3は2mm程大きい。こうした点からみて渡来銭とは考えにくく鏡写しビタ銭とおもわれる。

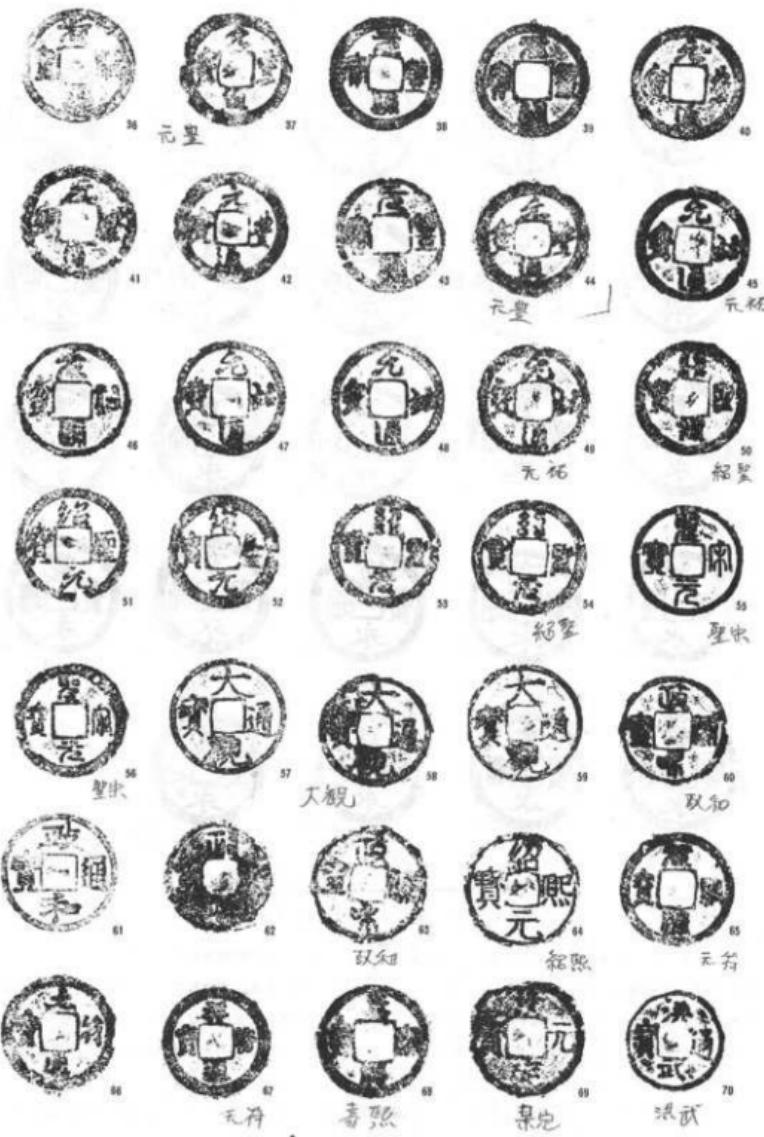
5は、乾元重宝で唐759年の発行で唯一の出土品である。6は宋元通宝で北宋960年、7は太平通宝で北宋976年、8は淳化元宝で北宋990年の発行である。6~8は、本遺跡においては各一枚の出土で貴重な資料となった。

9~10は、咸平通宝で北宋999年発行である。9は、3枚重なった状態で出土した。10も13枚重なった裏側のもので、表は4の開元通宝である。この重なった状態はしっかりと貼り付いていてバラバラにはならない。残り11枚もかなり古い年代発行のものであるとおもわれる。

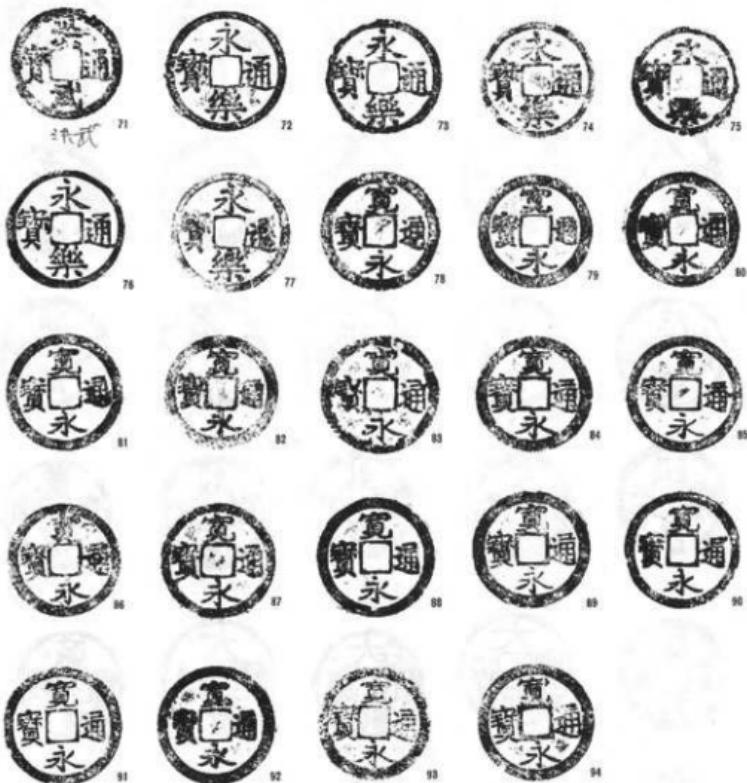
11~13は北宋銭の景德通宝で1005年に発行されている。腐蝕しているが字はかなりはっきり残っている。14~15は祥符通宝で北宋1010年発行である。16は唯一の天禧通宝で、やはり北宋1018年発行のものである。文字はす



第12図 3号建物址・周辺出土古銭拓影図No.1



第13圖 3号建物址・周辺出土古錢拓影圖 №2



第14図 3号建物址・周辺出土古錢拓影図 No.3

りへっている。17~19は天聖元宝で北宋1023年の発行である。篆書のみ3枚出土している。

20~25は、皇宋通宝で北宋1039年発行である。20と22が篆書で他は真書で書かれている。各々鋳造が異なることが観察される。26は、至和通宝で北宋1057年発行である。同年代発行で至和元宝がある。これも唯一の出土品である。27~30は、嘉祐通宝で北宋1057年発行である。これも嘉祐元宝が同時に発行されている。篆書が27・28で29・30は真書である。4枚共に中央四角形の穴が大きい。

31は、治平通宝で北宋1064年発行である。やはり同年代に治平元宝が発行されている。唯一の出土品である。32~35は、熙寧元宝で北宋1068年発行である。32・33が真書で34・35が篆書であるが各々鋳型が異なるようである。36~44は元豐通宝である。現在全国で残っている古錢では皇宋通宝に次いで二番目に多いのがこの元豐通宝

第4表 3号墳出土古錢一覧表

| 拂団<br>番号 | 銭名<br>(字体) | 初鋤年(西暦)      | 時代 | 法量   |              | 背文 | 備考                        |
|----------|------------|--------------|----|------|--------------|----|---------------------------|
|          |            |              |    | 直径   | 重さ g         |    |                           |
| 12-1     | 開元通宝真書     | 武德四年(621)    | 唐  | 24.0 | 1.5          |    | 本遺跡出土の大半は篆<br>写しヒタ錢とおもわれる |
| 12-2     | 開元通宝真書     | "(621)       | 唐  | 23.0 | 2.25         |    |                           |
| 12-3     | 開元通宝真書     | "(621)       | 唐  | 24.0 | 2.95         |    |                           |
| 12-4     | 開元通宝真書     | "(621)       | 唐  | 22.0 | 13枚<br>38.60 |    | 13枚重なって出土、<br>表面          |
| 12-5     | 乾元重宝真書     | 乾元二年(759)    | 唐  | 23.5 | 2.70         |    |                           |
| 12-6     | 宋元通宝真書     | "(960)       | 北宋 | 23.0 | 2.25         |    |                           |
| 12-7     | 太平通宝真書     | 太平興國元年(976)  | 北宋 | 23.5 | 2.30         |    |                           |
| 12-8     | 淳化元宝真書     | 淳化元年(990)    | 北宋 | 23.0 | 2.90         |    |                           |
| 12-9     | 咸平元宝真書     | 真宗咸平元年(999)  | 北宋 | 24.0 | 9.50         |    | 3枚重なって出土                  |
| 12-10    | 咸平元宝真書     | "(999)       | 北宋 | 22.0 | 38.60        |    | 13枚重なって出土、<br>裏面          |
| 12-11    | 景德元宝真書     | 景德元年(1005)   | 北宋 | 24.0 | 2.50         |    |                           |
| 12-12    | 景德元宝真書     | "(1005)      | 北宋 | 24.0 | 2.55         |    |                           |
| 12-13    | 景德元宝真書     | "(1005)      | 北宋 | 24.0 | 2.00         |    |                           |
| 12-14    | 祥符通宝真書     | 大中祥符元年(1010) | 北宋 | 23.0 | 2.60         |    |                           |
| 12-15    | 祥符通宝真書     | "(1010)      | 北宋 | 22.0 | 1.65         |    |                           |
| 12-16    | 天禧通宝真書     | 天禧年間(1018~)  | 北宋 | 22.0 | 2.25         |    |                           |
| 12-17    | 天聖元宝篆書     | 仁宗天聖元年(1023) | 北宋 | 24.0 | 2.80         |    |                           |
| 12-18    | 天聖元宝篆書     | "(1023)      | 北宋 | 24.0 | 2.65         |    |                           |
| 12-19    | 天聖元宝篆書     | "(1023)      | 北宋 | 24.0 | 2.65         |    |                           |
| 12-20    | 皇宋通宝篆書     | 元祐二年(1039)   | 北宋 | 23.5 | 2.25         |    |                           |
| 12-21    | 皇宋通宝真書     | "(1039)      | 北宋 | 23.0 | —            |    | 2枚重なって出土、<br>裏面           |
| 12-22    | 皇宋通宝篆書     | "(1039)      | 北宋 | 22.0 | 2.35         |    |                           |
| 12-23    | 皇宋通宝真書     | "(1039)      | 北宋 | 24.0 | 3.15         |    |                           |
| 12-24    | 皇宋通宝真書     | "(1039)      | 北宋 | 23.0 | 2.70         |    |                           |
| 12-25    | 皇宋通宝真書     | "(1039)      | 北宋 | 24.0 | 4.15         |    |                           |
| 12-26    | 至和通宝篆書     | 至和元年(1054)   | 北宋 | 24.0 | 2.55         |    |                           |
| 12-27    | 嘉祐通宝篆書     | 嘉祐元年(1057)   | 北宋 | 23.0 | 2.25         |    |                           |

| 挿図<br>番号 | 銭名<br>(字体) | 初鋤年 (西暦)      | 時代 | 法量   |      | 背文 | 備考                        |
|----------|------------|---------------|----|------|------|----|---------------------------|
|          |            |               |    | 直徑   | 重さ g |    |                           |
| 12-28    | 嘉祐通宝真書     | 嘉祐元年 (1057)   | 北宋 | 23.5 | 2.30 |    | 本遺跡出土の大半は篆写<br>ヒタ錢と考えられる。 |
| 12-29    | 嘉祐通宝真書     | " (1057)      | 北宋 | 24.0 | 2.20 |    |                           |
| 12-30    | 嘉祐通宝真書     | " (1057)      | 北宋 | 23.0 | 2.15 |    | 3枚重なって出土                  |
| 12-31    | 治平通宝真書     | 英宗治平元年 (1064) | 北宋 | 24.0 | 2.15 |    |                           |
| 12-32    | 熙寧元宝真書     | 神宗熙寧元年 (1068) | 北宋 | 23.0 | 2.90 |    |                           |
| 12-33    | 熙寧元宝真書     | " (1068)      | 北宋 | 22.0 | 2.55 |    |                           |
| 12-34    | 熙寧元宝篆書     | " (1068)      | 北宋 | 23.0 | 2.75 |    |                           |
| 12-35    | —          | —             | 北宋 | 23.0 | 3.00 |    | 銘明不明                      |
| 13-36    | 元豐通宝篆書     | 元豐元年 (1078)   | 北宋 | 23.0 | 3.10 |    | 3枚重なって出土                  |
| 13-37    | 元豐通宝真書     | " (1078)      | 北宋 | 23.0 |      |    |                           |
| 13-38    | 元豐通宝篆書     | " (1078)      | 北宋 | 23.0 | 2.80 |    |                           |
| 13-39    | 元豐通宝篆書     | " (1078)      | 北宋 | 23.0 | 2.75 |    |                           |
| 13-40    | 元豐通宝真書     | " (1078)      | 北宋 | 23.5 | 2.50 |    |                           |
| 13-41    | 元豐通宝真書     | " (1078)      | 北宋 | 23.5 | 2.10 |    |                           |
| 13-42    | 元豐通宝真書     | " (1078)      | 北宋 | 23.5 | 2.15 |    |                           |
| 13-43    | 元豐通宝篆書     | " (1078)      | 北宋 | 23.0 | 1.90 |    | 削れ                        |
| 13-44    | 元豐通宝真書     | " (1078)      | 北宋 | 23.0 | 1.50 |    |                           |
| 13-45    | 元祐通宝真書     | 哲宗元祐元年 (1093) | 北宋 | 23.5 | 1.95 |    |                           |
| 13-46    | 元祐通宝篆書     | " (1093)      | 北宋 | 23.0 | 2.90 |    |                           |
| 13-47    | 元祐通宝真書     | " (1093)      | 北宋 | 23.0 | 2.85 |    |                           |
| 13-48    | 元祐通宝真書     | " (1093)      | 北宋 | 23.0 | 2.45 |    |                           |
| 13-49    | 元祐通宝真書     | " (1093)      | 北宋 | 23.0 | 2.10 |    |                           |
| 13-50    | 紹聖元宝篆書     | 紹聖元年 (1094)   | 北宋 | 23.0 |      |    |                           |
| 13-51    | 紹聖元宝真書     | " (1094)      | 北宋 | 23.0 | 2.25 |    |                           |
| 13-52    | 紹聖元宝真書     | " (1094)      | 北宋 | 23.0 | 2.30 |    |                           |
| 13-53    | 紹聖元宝篆書     | " (1094)      | 北宋 | 22.5 | 2.35 |    |                           |
| 13-54    | 紹聖元宝篆書     | " (1094)      | 北宋 | 23.5 | 2.80 |    |                           |
| 13-55    | 聖宋元宝篆書     | 建中靖国元年 (1101) | 北宋 | 23.0 | 2.85 |    |                           |
| 13-56    | 聖宋元宝篆書     | " (1101)      | 北宋 | 23.0 | 2.95 |    |                           |

| 排図<br>番号 | 銭名<br>(字体) | 初鋸年 (西暦)                          | 時代 | 法量   |      | 背文 | 備考                   |
|----------|------------|-----------------------------------|----|------|------|----|----------------------|
|          |            |                                   |    | 直径   | 重さ g |    |                      |
| 13-57    | 大觀通宝真書     | 大觀元年 (1107)                       | 北宋 | 24.0 | 3.35 |    | 本道出土の大半は篆書ヒタ錢と考えられる。 |
| 13-58    | 大觀通宝真書     | " (1107)                          | 北宋 | 23.0 | 2.45 |    |                      |
| 13-59    | 大觀通宝真書     | " (1107)                          | 北宋 | 23.5 | 2.90 |    | 3枚重なり                |
| 13-60    | 政和通宝篆書     | 政和元年 (1111)                       | 北宋 | 24.0 | 2.75 |    |                      |
| 13-61    | 政和通宝真書     | " (1111)                          | 北宋 | 22.0 | 1.95 |    |                      |
| 13-62    | 政和通宝真書     | " (1111)                          | 北宋 | 23.5 | 2.15 |    |                      |
| 13-63    | 政和通宝篆書     | " (1111)                          | 北宋 | 22.5 | 2.05 |    |                      |
| 13-64    | 紹熙元宝真書     | 紹熙元年 (1190)                       | 南宋 | 23.5 | 2.20 |    |                      |
| 13-65    | 元符通宝篆書     | 元符元年 (1098)                       | 北宋 | 24.0 | 2.60 |    |                      |
| 13-66    | 元符通宝真書     | " (1098)                          | 北宋 | 23.5 | 2.45 |    |                      |
| 13-67    | 元符通宝真書     | " (1098)                          | 北宋 | 22.0 | 1.70 |    |                      |
| 13-68    | 嘉熙通宝真書     | (1237)                            | 南宋 | 23.0 | 2.10 |    |                      |
| 13-69    | 景定通宝真書     | (1260)                            | 南宋 | 24.0 | 1.40 |    |                      |
| 13-70    | 洪武通宝真書     | 大祖洪武元年 (1368)                     | 明  | 20.0 | 1.10 |    | 筑前ヒタ錢か?              |
| 14-71    | 洪武通宝真書     | " (1368)                          | 明  | 23.0 | 2.70 |    |                      |
| 14-72    | 永樂通宝真書     | 成祖永樂 6年 (1408)                    | 明  | 24.5 | 2.45 |    |                      |
| 14-73    | 永樂通宝真書     | " 永樂 6年 (1408)                    | 明  | 23.5 | 2.85 |    |                      |
| 14-75    | 永樂通宝真書     | " 永樂 6年 (1408)                    | 明  | 22.0 | 1.50 |    |                      |
| 14-76    | 永樂通宝真書     | " 永樂 6年 (1408)                    | 明  | 24.0 | 2.85 |    |                      |
| 14-77    | 永樂通宝真書     | " 永樂 6年 (1408)                    | 明  | 24.0 | 2.00 |    |                      |
| 14-78    | 寛永通宝真書     | 寛永 3年 (1626) 初<br>寛永13年 (1636) 幕府 | 江戸 | 24.0 | 2.95 |    | 古寛永 (明暦まで)           |
| 14-79    | 寛永通宝真書     | 寛永 3年 (1626) 初<br>寛永13年 (1636) 幕府 | 江戸 | 23.5 | 3.40 |    | "                    |
| 14-80    | 寛永通宝真書     | 寛永 3年 (1626) 初<br>寛永13年 (1636) 幕府 | 江戸 | 23.0 | 3.30 |    | "                    |
| 14-81    | 寛永通宝真書     | 寛永 3年 (1626) 初<br>寛永13年 (1636) 幕府 | 江戸 | 24.0 | 3.05 |    | "                    |
| 14-82    | 寛永通宝真書     | 寛永 3年 (1626) 初<br>寛永13年 (1636) 幕府 | 江戸 | 23.0 | 2.45 |    | "                    |
| 14-83    | 寛永通宝真書     | 寛永 3年 (1626) 初<br>寛永13年 (1636) 幕府 | 江戸 | 24.0 | 2.50 |    | "                    |
| 14-84    | 寛永通宝真書     | 寛永 3年 (1626) 初<br>寛永13年 (1636) 幕府 | 江戸 | 24.0 | 2.50 |    | "                    |
| 14-85    | 寛永通宝真書     | 寛永 3年 (1626) 初<br>寛永13年 (1636) 幕府 | 江戸 | 24.0 | 2.95 |    | "                    |

| 拂図<br>番号 | 銭名<br>(字体) | 初鑄年(西暦)                      | 時代 | 法量   |      | 背文 | 備考        |
|----------|------------|------------------------------|----|------|------|----|-----------|
|          |            |                              |    | 直径   | 重さ g |    |           |
| 14-86    | 寛永通宝真書     | 寛永3年(1626)初<br>寛永13年(1636)幕府 | 江戸 | 23.0 | 3.00 |    | 古寛永(明暦まで) |
| 14-87    | 寛永通宝真書     | 寛永3年(1626)初<br>寛永13年(1636)幕府 | 江戸 | 23.0 | 2.10 |    | 〃         |
| 14-88    | 寛永通宝真書     | 寛永3年(1626)初<br>寛永13年(1636)幕府 | 江戸 | 24.0 | 2.45 |    | 〃         |
| 14-89    | 寛永通宝真書     | 寛永3年(1626)初<br>寛永13年(1636)幕府 | 江戸 | 24.0 | 2.60 |    | 〃         |
| 14-90    | 寛永通宝真書     | 寛永3年(1626)初<br>寛永13年(1636)幕府 | 江戸 | 24.0 | 2.45 |    | 〃         |
| 14-91    | 寛永通宝真書     | 寛永3年(1626)初<br>寛永13年(1636)幕府 | 江戸 | 24.0 | 3.40 |    | 〃         |
| 14-92    | 寛永通宝真書     | 寛永3年(1626)初<br>寛永13年(1636)幕府 | 江戸 | 24.0 | 3.05 |    | 〃         |
| 14-93    | 寛永通宝真書     | 寛永3年(1626)初<br>寛永13年(1636)幕府 | 江戸 | 23.0 | 2.40 |    | 〃         |
| 14-94    | 寛永通宝真書     | 寛永3年(1626)初<br>寛永13年(1636)幕府 | 江戸 | 24.0 | 2.85 |    | 〃         |

であるといわれている。北宋1078年発行である。真書5枚、篆書4枚とに分かれる。

45~49は元祐通宝である。篆書が1枚見られる。50~54が紹聖元宝で、元祐通宝と1年ちがいの発行で1094年となる。篆書3枚、真書2枚に分かれる。55・56は、北宋1101年発行の聖宋元宝である。共に篆書のみであるが鑄型は異なる。57~59は大觀通宝で北宋1107年発行である。3枚共に鑄型が異なるとおもわれる。真書のみである。60~63は、北宋1107年発行の政和通宝である。64は、南宋1190年発行の紹熙元宝で唯一の出土品である。65~67は、北宋1098年発行の元符通宝である。68・69は共に南宋発行の唯一の出土品である。68は嘉熙通宝で1237年、69は景定通宝で1260年発行である。共に全国的に発掘出土数は少ない。

70は明1368年発行の洪武通宝である。70は特に小さい。これは、鋳造の過程での熔錫が型の中で冷えて固まつてゆくときに縮小することに起因していることと、錫縮みといい母錢より錢形は小さくなっている。そして中央の穴は広がるようである。全体にこの中央の穴が広がっているものかなり多く見受けられる。

72~77は、明の永樂6年(1408)に発行された永樂通宝である。永樂通宝は拓影からみても分かるようにかなりはっきりした字体が残っている。良錢であるため錢の代表とされ基準的な銅貨になったようである。

78~95までの18枚は寛永通宝である。寛永通宝は明暦までの铸造を古寛永とし、寛文以降を新寛永として製作上の相違から区別されている。その違いは、両者の書体があげられている。古寛永は隸字で新寛永は細字であること、竜の貝の足が古寛永はスのようになって(ス宝)いるが、新寛永では貝の足は、ハの字(ハ宝)に開いている。また、鋳造する母錢に変化がある。古寛永の場合は通用錢の中から比較的大型の錢を選んで母錢としていたので小さな変化がある。しかし、新寛永は手彫りの母錢が造られた上に錫縮みを少なくするために、新たに錫母錢を造りその後に銅母錢を使用している。そのため古寛永のような各々の錢に小さな変化はみられない。

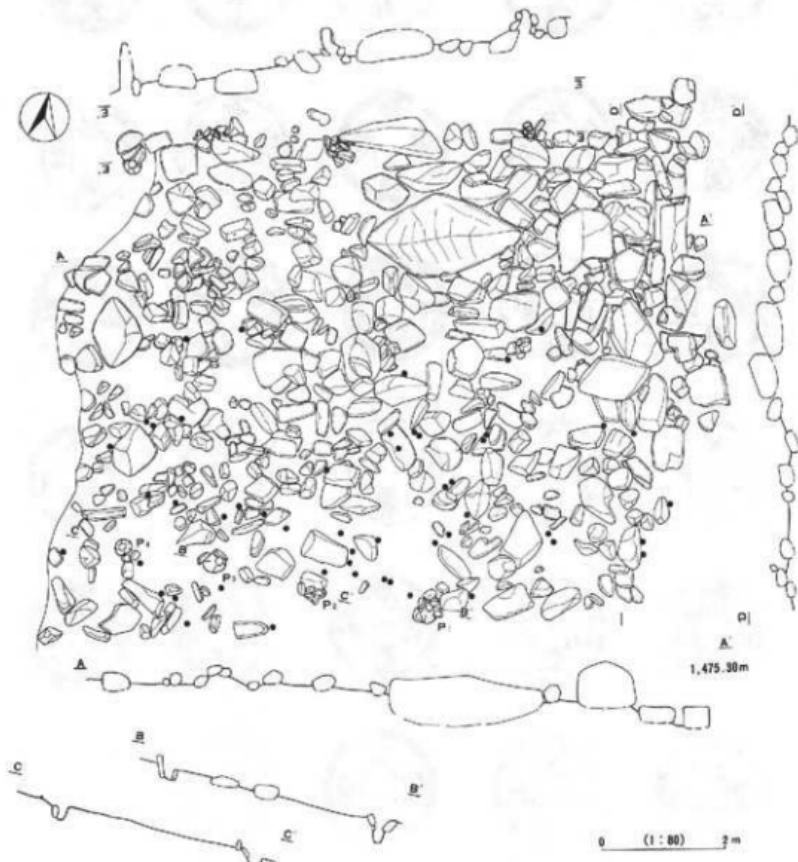
出土した寛永通宝はその全てが古寛永と区別される。それは、竜の貝がスの字になっているからである。だが古寛永は隸字で新寛永は細字であるとされているが、85・89・90・91・93・95などは細字である。しかし、これを比較することができたのである。後出する第18図のNo.14に唯一新寛永が見出された。これを見るとさすがに細字である。竜の貝はハ宝でありまさに新寛永であることが一見して分かる。

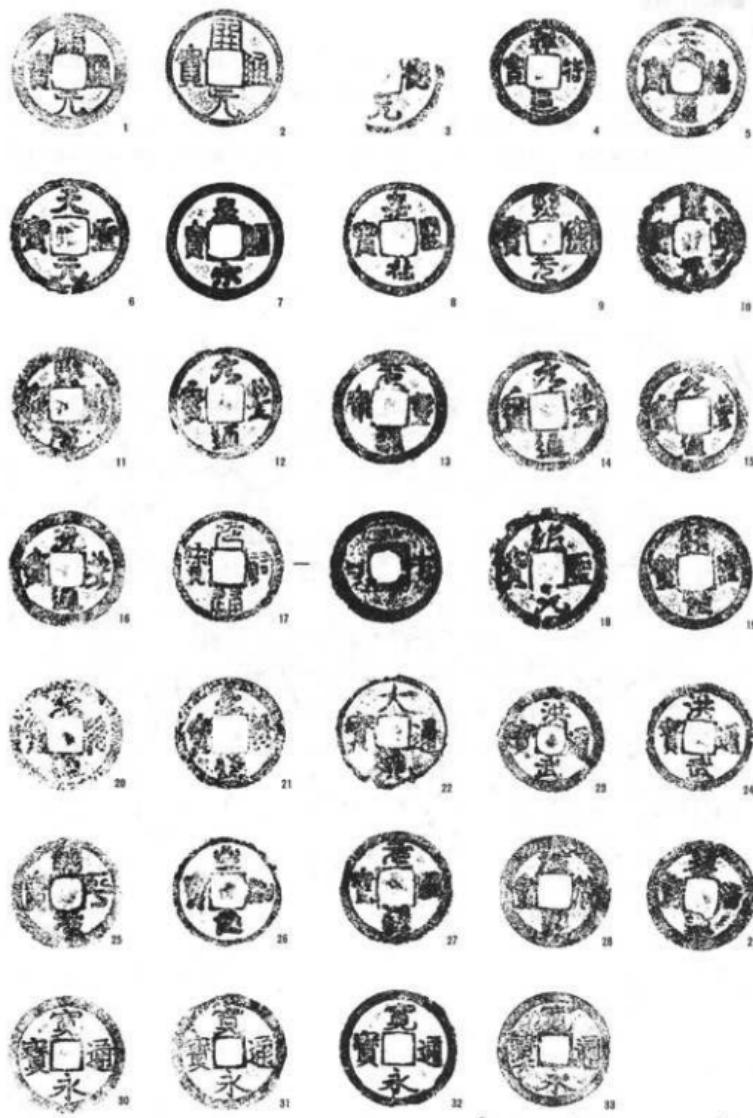
#### 4 環群集石地点

##### 造構(第15図)

3号建物址南側の柱穴の地点から南側に向かって礫群の集石がある。集石の範囲は東西10m、南北9mにわたり、最大の礫は2.5m×1.4mで菱形を呈している。次は1m前後の礫、さらに50~80cm、そして20~30cmの礫が散乱している。段差のある東側には、石段を組んだとおもわれる40×120cmの長方形を呈する平の石が認められる。この付近に大小の礫がぎっしり詰まっている。この北東コーナーを除いた南西側には礫の散布は若干散漫的になる。

南端から西側にかけて4個のピットが検出された。配列が整然としていないことと、相対する柱穴は検出され





第16图 硬群集石地点出土古钱拓影图

第5表 碑群集石地点出土古錢一覽表

| 拂図<br>番号 | 錢名<br>(字体) | 初鑄年(西暦)       | 時代 | 法量   |      | 背文              | 備考                         |
|----------|------------|---------------|----|------|------|-----------------|----------------------------|
|          |            |               |    | 直径   | 重さ g |                 |                            |
| 16-1     | 開元通宝真書     | 武德四年 (621)    | 唐  | 24.0 | 2,30 |                 | 本運跡出土の大半は模写<br>レピカ銭と考えられる。 |
| 16-2     | 開元通宝真書     | " (621)       | 唐  | 24.0 | 2,40 |                 |                            |
| 16-3     | 景德元宝真書     | 景德元年 (1005)   | 北宋 | —    | —    |                 |                            |
| 16-4     | 祥符通宝真書     | 大中祥符元年 (1010) | 北宋 | 22.0 | 1,75 |                 |                            |
| 16-5     | 天禧通宝真書     | 元祐年間 (1018~)  | 北宋 | 24.0 | 2,80 |                 |                            |
| 16-6     | 天聖元宝真書     | 仁宗天聖元年 (1023) | 北宋 | 24.0 | 2,60 |                 |                            |
| 16-7     | 皇宋通宝真書     | 天聖元年 (1039)   | 北宋 | 24.0 | 3,40 |                 |                            |
| 16-8     | 嘉祐通宝篆書     | 嘉祐元年 (1057)   | 北宋 | 23.0 | 2,30 | 錢名?             |                            |
| 16-9     | 熙寧元宝篆書     | 神宗熙寧元年 (1068) | 北宋 | 23.0 | 2,75 |                 |                            |
| 16-10    | 熙寧元宝篆書     | " (1068)      | 北宋 | 22.0 | 1,95 |                 |                            |
| 16-11    | 熙寧元宝篆書     | " (1068)      | 北宋 | 22.5 | 2,30 |                 |                            |
| 16-12    | 元豐通宝真書     | 元豐元年 (1078)   | 北宋 | 23.0 | 1,25 |                 |                            |
| 16-13    | 元豐通宝篆書     | " (1078)      | 北宋 | 23.5 | 3,10 |                 |                            |
| 16-14    | 元豐通宝真書     | " (1078)      | 北宋 | 24.0 | 2,30 |                 |                            |
| 16-15    | 元豐通宝真書     | " (1078)      | 北宋 | 22.0 | 1,70 |                 |                            |
| 16-16    | 元豐通宝真書     | " (1078)      | 北宋 | 23.0 | 2,70 |                 |                            |
| 16-17    | 元祐通宝篆書     | 哲宗元祐元年 (1093) | 北宋 | 23.0 | 2,15 | 木の字<br>ある       |                            |
| 16-18    | 紹聖元宝真書     | 紹聖元年 (1094)   | 北宋 | 24.0 | 1,85 |                 |                            |
| 16-19    | 紹聖元宝篆書     | " (1094)      | 北宋 | 23.0 | 2,30 |                 |                            |
| 16-20    | 元符通宝真書     | 元符元年 (1098)   | 北宋 | 23.0 | 1,95 |                 |                            |
| 16-21    | 元符通宝真書     | " (1098)      | 北宋 | 23.0 | 2,70 |                 |                            |
| 16-22    | 大觀通宝真書     | 大觀元年 (1107)   | 北宋 | 22.5 | 2,20 |                 |                            |
| 16-23    | 洪武通宝真書     | 太祖洪武元年 (1368) | 明  | 22.0 | 2,30 |                 |                            |
| 16-24    | 洪武通宝真書     | " (1368)      | 明  | 22.0 | 2,10 |                 |                            |
| 16-25    | 治平元宝篆書     | 英宗治平元年 (1064) | 北宋 | 23.0 | 2,40 | 錢名?<br>加治木系加刀ビタ |                            |
| 16-26    | —          | —             |    | 22.5 | 2,50 | 錢名不明            |                            |
| 16-27    | —          | —             |    | 23.0 | 2,40 | 錢名不明            |                            |
| 16-28    | —          | —             |    | 23.0 | 1,80 | 錢名不明            |                            |

| 拂団<br>番号 | 銭名<br>(字体) | 初鑄年(西暦)                      | 時代 | 法量   |      | 背文 | 備考        |
|----------|------------|------------------------------|----|------|------|----|-----------|
|          |            |                              |    | 直径   | 重さ g |    |           |
| 16-29    | —          | —                            | 北宋 | 22.5 | 2.30 |    |           |
| 16-30    | 寛永通宝真書     | 寛永3年(1626)初<br>寛永13年(1636)幕府 | 江戸 | 24.0 | 3.10 |    | 古寛永(明暦まで) |
| 16-31    | 寛永通宝真書     | 寛永3年(1626)初<br>寛永13年(1636)幕府 | 江戸 | 24.0 | 2.60 |    | #         |
| 16-32    | 寛永通宝真書     | 寛永3年(1626)初<br>寛永13年(1636)幕府 | 江戸 | 24.0 | 3.10 |    | #         |
| 16-33    | 寛永通宝真書     | 寛永3年(1626)初<br>寛永13年(1636)幕府 | 江戸 | 24.0 | 3.0  |    | #         |

ていない。P<sub>1</sub>は、径20cm、深さ40cmで左右両脇に補強の石が埋め込まれている。P<sub>2</sub>は、径24、深さ18cmを測りやや貧弱である。P<sub>3</sub>は、左右の側壁に細長い石が埋め込まれ補強されている。径18cm、深さ20cmを測る。P<sub>4</sub>は、径16cm、深さ20cmを測り左側壁に10×18cm大の石が埋め込まれている。P<sub>5</sub>と共にやや貧弱である。これ等のピットは建物の柱穴とは考えにくい。相対する柱穴が見当たらないことと、P<sub>2</sub>、P<sub>4</sub>のように貧弱であることがあげられる。ある時点においてなん等かの用途が生じたために掘られたピットであると考えられる。

#### 遺物(第16図)

礫群集石地点から出土した遺物は、第11図と第15図の接点を合わせると70点程度である。古銭を中心として鏡・陶器・キセル・刀子・なぎ簾・砾石・鉄釘・鉄塊・献上台など多種多様にわたってさまざまなものが出土している。これ等は、礫と礫の間、礫の上面などに埋め込まれた状態で出土した。ここでは古銭のみを図示したが、他の遺物は数量が少ないので、3号建物址を中心として焼土の散布している南端までをまとめた。第19図～第25図(36ページ～40ページ)に図示してある。

第16図1・2は唐621年発行の開元通宝である。2は周囲の縁が1に比べて細いが、径は共に2.4cmを測る。3は、景德元宝の破片である。これより1000年代に発行され、No.22まで北宋銭となる。No.4は祥符通宝、No.5は天禧通宝、No.6は天聖元宝、No.7は皇宋通宝で各々1枚の出土であり真書となる。

No.8は嘉祐通宝で篆書である。9～11は共に篆書の熙寧元宝である。12～16は、全国的に出土例の多い元豐通宝で、この内真書は、12・14・15・16である。No.17は元祐通宝であるが裏側左右に文字が伺える。拓影でみると木の字が右側にある。加治木系ヒタ錢かとも考えられるが、背の文字は洪武通宝以外ではめずらしい。

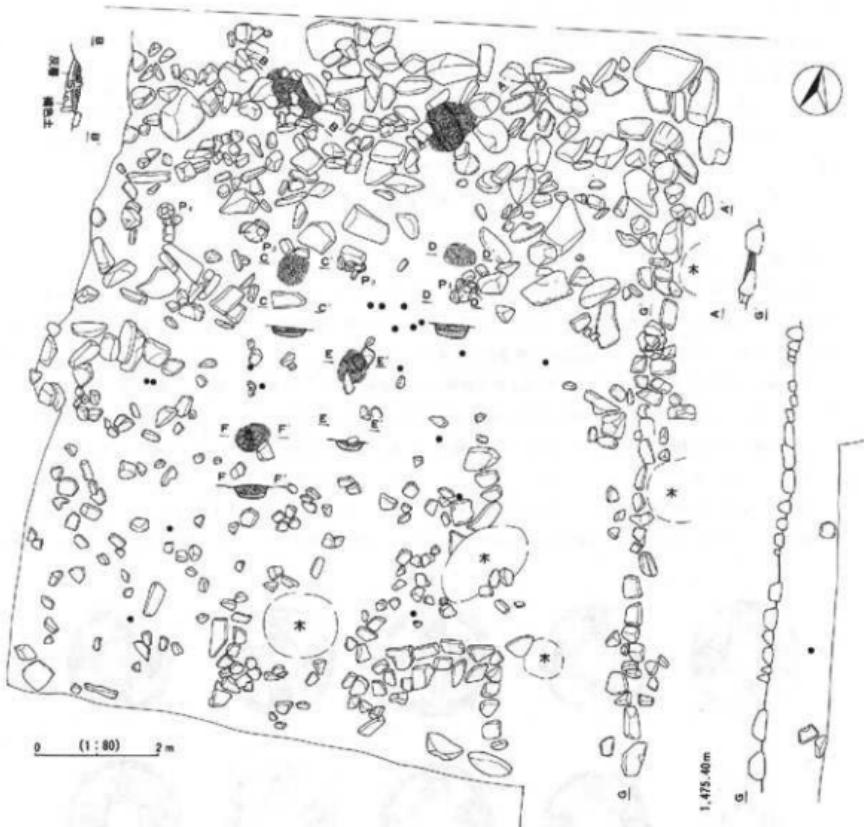
No.18は紹聖元宝、21は元符通宝である。22の大觀通宝は1170年北宋で発行された。23・24は共に洪武通宝で、径2.2cmとやや小さくなる。25～29は銭名のはっきりしないものをまとめた。この内25は治平元宝と判読できた。30～33は寛永通宝である。共に寶の貝がスであるため古寛永となる。

#### 5 矸・焼土散布地点

##### 遺構(第17図)

焼土散布地点は、第15図礫群集石地点と面積が4mにわたって重なるが、礫の集石が密になっている終わりの部分から焼土の散布がはじまっている。焼土は調査区の南側に6箇所散布していた。約6m×4mの範囲にまとまっている。

断面にAの印がついた焼土地点は、40×70cmの石の上に70×80cmの範囲に焼土が約10cmの厚さで堆積し、炭化



第17図 窯・焼土散布地点実測図

粒子の混入が認められた。石の上であったためか焼土の赤色はあまりきれいな色ではなかった。周辺から遺物はかなり多く出土している。

B地点はやはり窯密集地である。ここは、炉のように離で開んだ45cm×1mの範囲に焼土が堆積していた。焼土は8cmと薄い堆積であるが、III層は灰が埋まっていた。これは石圓いの中から灰をかき出して新しい火床を作っていたものと考えられる。C・D・E・F地点は周囲に窯の散布がみられない平坦な土の上に、50~60cmの小範囲に焼土が10~15cmの厚さに堆積していた。また、C・D地点の脇にはP<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>・P<sub>3</sub>があり、焼土との関連が想定される。さらに、第15図窯群集石地点実測図の遺物出土地点と上の第17図窯・焼土散布地点の遺物出土地点を合わせて観察すると、この焼土を中心とした地点に遺物が多量に出土していることがあげられる。

これ等の焼土の散布は、修驗道の行法の一つである護摩が焚かれた痕跡であると考えられる。厚さ10~15cm程度の焼土の堆積は、縄文時代の炉にみられる焼土の堆積と比較すると薄くて一箇所で数度の護摩を焚いていると

はおもわれない。一回一回場所を変えて行なっていたことが6箇所の焼土の散布から理解できる。

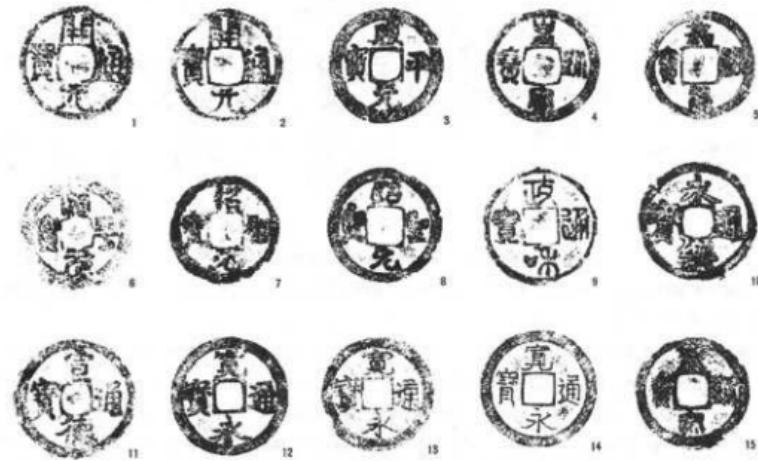
南端部の調査は図示した地点で打ち切った。これよりさらに一段地形的に上ることと、表土が薄くその下部も踏み固めた様相が全くみられない自然的な土層であったため遺物の出土が途切れていしたことなどによる。

また、東側には20~60cm大の比較的平坦な礫が南北に向かって10m程直線的に並んでいる。3号建物址の所在している東側は石積みが崩れていたため礫の散乱で通路の見分けもつかなかったが、東西の建物の相対する間に通路があったことをこの直線的な石の並び方から想定できよう。さらに、直線的な礫の並びは第26図にみられるように20mの長さにわたって鳥居付近まで達なっている。意図的に並べたと考えられる。

#### 遺物（第18図）

礫・焼土散布地点の古銭を15点図示した。10種類の銭名がありバラエティに富んでいる。開元通宝2枚、成平元宝1枚、皇宋通宝2枚、嘉祐元宝、治平元宝各1枚、紹聖元宝2枚、政和通宝、永樂通宝、宣德通宝各1枚がある。この内、明1433年発行の宣徳通宝は本遺跡では唯一の出土である。

寛永通宝は3枚出土した。この中でNo24は本遺跡唯一の新寛永である。新寛永の特色は、寶の貝がハの字になっていることと鋳造の新しい開発から文字が細字になっていることがあげられるが、その特徴がよく現れている。この唯一出土の新寛永によって古寛永との比較検討が可能となり、古寛永の中にみられた細字に近いものが又宝であっても、断定することに不安が残っていたがその不安もこの比較検討によって一掃することができたのである。古寛永は明暦(1656年)まで鋳造されたが、新寛永は寛文8年(1668年)から江戸で鋳錢が始まる。そして、手彫りによる母錢が作られた後、銅母錢を造る以前の方法から錫鑄みを少なくするために錫母錢が作られている。



第18図 種・焼土散布地点出土古銭撮影図

第6表 磺・焼土散布地点出土古銭一覧表

| 拂図<br>番号 | 銭名<br>(字体) | 初鋤年(西暦)                      | 時代 | 法量   |      | 背文 | 備考                         |
|----------|------------|------------------------------|----|------|------|----|----------------------------|
|          |            |                              |    | 直径   | 重さ g |    |                            |
| 18-1     | 開元通宝真書     | 武德四年(621)                    | 唐  | 23.5 | 2.30 |    | 本遺跡出土の大半は篆書<br>しビタ銭と考えられる。 |
| 18-2     | 開元通宝真書     | 〃(621)                       | 唐  | 22.5 | 3.00 |    |                            |
| 18-3     | 咸平元宝真書     | 真宗咸平元年(999)                  | 北宋 | 24.0 | 3.05 |    |                            |
| 18-4     | 皇宋通宝篆書     | 元宝二年(1039)                   | 北宋 | 23.0 | 1.90 |    |                            |
| 18-5     | 嘉祐元宝篆書     | 嘉祐元年(1057)                   | 北宋 | 22.0 | 1.95 |    |                            |
| 18-6     | 治平元宝篆書     | 英宗治平元年(1064)                 | 北宋 | 24.0 | 1.75 |    | 割れ                         |
| 18-7     | 紹聖元宝篆書     | 紹聖元年(1094)                   | 北宋 | 22.5 | 2.05 |    |                            |
| 18-8     | 紹聖元宝真書     | 〃(1094)                      | 北宋 | 23.5 | 2.50 |    |                            |
| 18-9     | 政和通寶篆書     | 政和元年(1111)                   | 北宋 | 23.5 | 1.70 |    |                            |
| 18-10    | 永樂通寶真書     | 成祖永樂六年(1408)                 | 明  | 24.0 | 3.05 |    |                            |
| 18-11    | 宣德通寶真書     | 宣宗宣德八年(1433)                 | 明  | 24.5 | 2.70 |    |                            |
| 18-12    | 寛永通寶真書     | 寛永3年(1625)初<br>寛永13年(1636)幕府 | 江戸 | 24.0 | 3.00 |    | 古寛永                        |
| 18-13    | 寛永通寶真書     | 寛永3年(1625)初<br>寛永13年(1636)幕府 | 江戸 | 23.5 | 2.80 |    | 古寛永                        |
| 18-14    | 寛永通寶真書     | 寛文1661年以降                    | 江戸 | 24.0 | 2.95 |    | 新寛永                        |
| 18-15    | 皇宋通宝篆書     | 元宝二年(1039)                   | 北宋 | 23.0 | 2.10 |    | 銭名?                        |

## 6 3号建物址・礫群集石・焼土散布地点出土その他の遺物(第19~25図)

## 1) 陶器(第19図)

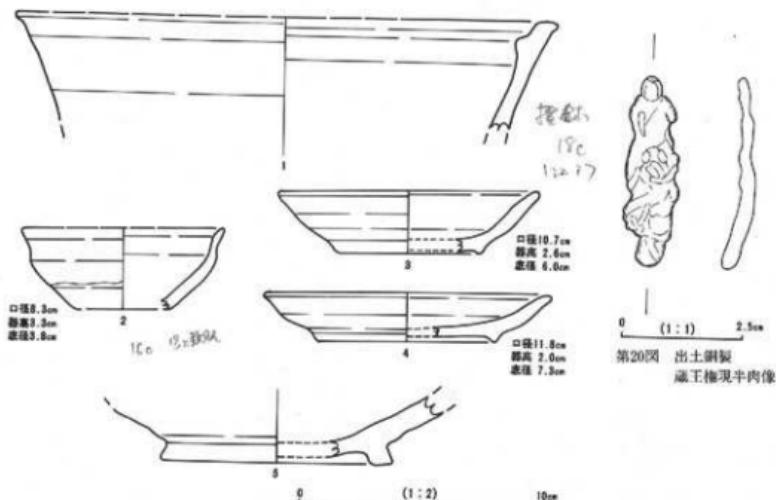
陶器は6点の出土があったが図示できたものは5点である。1は、参道ともいいく通路の右脇から出土した甕の口縁部である。紫がかった鉄鉢が正面および内側にもまんべんなく施釉されている。内面口縁部には三角形の凸帯が巡っている。口径は22.3cmを測ると推定される。瀬戸・美濃系の播磨で18世紀の製品である。

2は、口径8.3cm、器高3.3cm、底径3.8cmを測る小形の皿である。釉は内部全面と外側中間まで施釉されており、底部にかけては地肌がみえている。16世紀の瀬戸・美濃系の製品で1号建物址出土の碗と類似する。

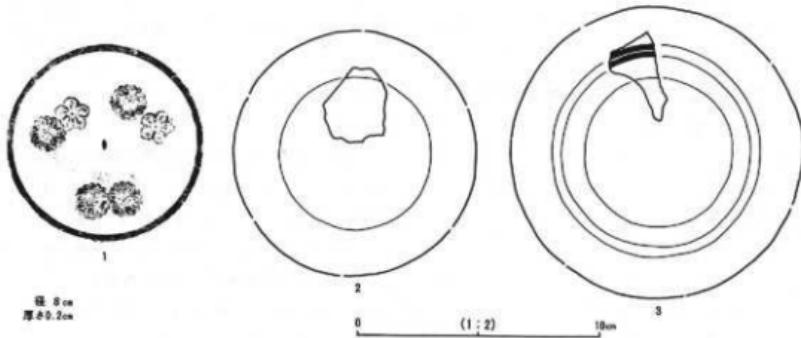
3・4は丸皿である。0.5mmに満たない台が付いている。3は、器高2.6cmを測り底面から外傾して口縁で立ち上がっている。4は、底部から直線的に大きく開いて立ち上がっているため器高が2cmと低く、3のように底面と口縁の間に稜が生じてはいない。内面に重ね焼きによる1cm大の破片がしっかり付着している。釉は両者共に淡緑色が全面に施釉されている。16世紀後半の瀬戸・美濃系の製品である。

5は、底径9.5cmを測る鉢である。外側は赤褐色を呈した釉がうすく施釉されている。内面は、青灰色の釉に黒色の線が描かれている。器厚も厚くがっしりしている。江戸中期の唐津系の製品である。

この他、陶器類は焼土が散布している付近のP<sub>1</sub>の上面からクリーム色の釉が施釉された小皿の口縁部が出土している。17世紀後半の製品である。



第19図 出土近世陶磁器実測図



第20図 出土銅製 藏王権現半肉像

## 2) 懸佛（第20図）

第20図は銅製の藏王権現像かと思われる。全長4 cmであるが、2.5cmを測る岩のようにゴツゴツした上に足を開いた人物が立っている。片足を上げているように見えないが、藏王権現像であると考えられる。ゴツゴツした岩のようなものは火炎であるかもしれない。足と足の股間に1.5~2 mmの孔がある。半肉像であるため銅板の上に貼り付けた懸佛であると考えられる。股間の孔は紐でゆわえるためにあけられているとおもわれる。初

現は鏡面に仏像や神像をあらわしたものであったというが、後に銅円板を用いるようになった。

### 3) 鏡 (第21図)

第21図は出土した鏡である。1は、径8cmを測り、縁は2.5cm、縁の厚さは0.2cmを測る。本体はそれより薄くなる。文様は、花弁16枚の菊の花と、花弁5枚の梅の花が描かれている。上方には菊と梅が対になってハの字状に配置し、中央の下方には菊の花のみが対になっている。真中には、5mmのつまみが付いており、2mmの孔があり糸状の紐を通して吊すことができるようになっている。花の文様は磨り減っている部分がみられる。完形品でP.付近の石の間に立てた状態で埋められていた。

2・3は鏡の破片である。小さな破片から推定した直径は、2が10cm、3が12cmである。両者共に文様はみられず稜線のみが巡っている。2は、凹みを有す稜線が1本認められる。3は、内側に2と同様の稜線が巡り8mm幅の凹帯を有している。その外側には幅2mmを測る二条の微隆帯が巡っている。両者共に礫群の集石した石の間から出土している。

奈良大学学長である水野正好教授に鑑定していただいたところ、江戸時代に比定されるとのことである。

### 4) キセル (第22図)

第22図は銅製のキセル類である。1は、長さ5cm、最大径1cm、最小径0.3cmを測る。全体に縁背でおおわれている。中は空洞である。キセルの吸口に近い部分にあたる。2も1と同様の部位にあたるが、長さが8.1cmとかなり残りが多い。最大径1.2cmを測る。最上端部はきれいな輪切りであるため、ここから上部に竹を入れるとおもわれる。3は、長さ6.6cm、最大径0.6cmを測り、吸口である最小径は0.3cmと非常に細くなる。また、上端には竹が入っている。ここから竹が入っているとなるとこれは細いキセルである。

No.4は、3と同様の細いキセルである。吸口に近い部位で長さ5.5cm、最大径0.6cmを測り、空洞である。

No.5は、長さ5.7cm、最大径1.1cm、最小径0.3cmで中间に稜線があり、吸口と胴部とに分かれる。1・2とは形態的に異なり、羅字はぬけてしまい空洞であった。No.6も5と形態は同様であるが細くなる。胴部最大径は0.7cmである。No.7は、吸口と胴部に分かれることの稜線の部分である。竹が組み込まれて残っている。この状態から羅字の竹はかなり奥まで入っていたことが本品とNo.3の状態から分かる。

No.8は、形態の異なる胴部である。下部は細い吸口につながり上部は羅字の竹が差し込まれると考えられる。図に示したように竹が2.5cm管の中に残っており周囲には和紙が巻かれている。戦後までこの竹を新しく付け替えるために羅字やさんがビービーと蒸気の圧力による音をたてながら回ってきたという。その時に竹を吸口と雁首の口に密着させるために和紙を巻いていたとのことである。

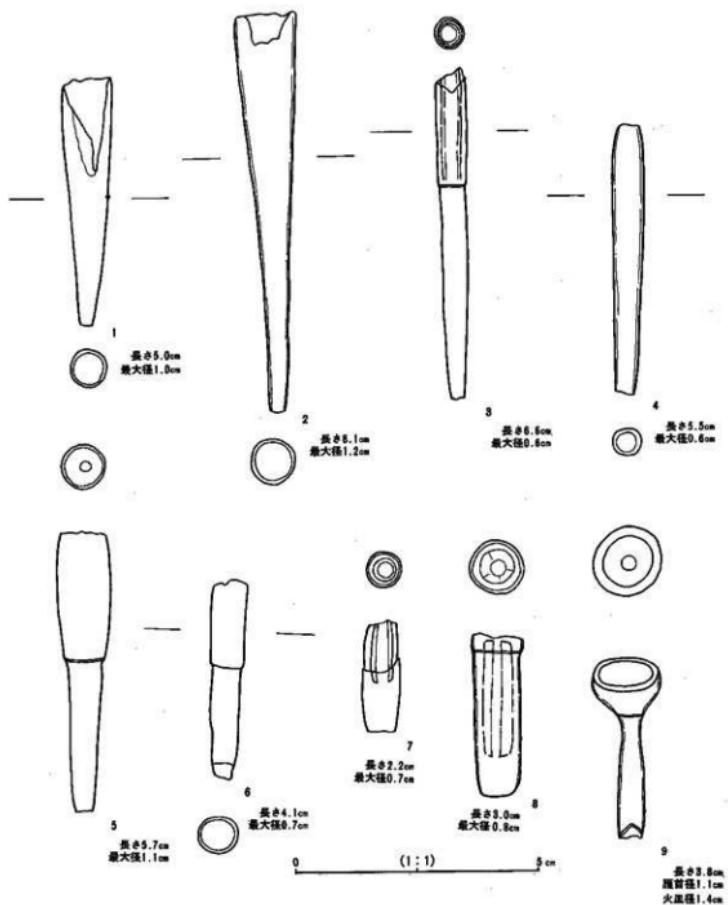
No.9は唯一の雁首と火皿である。きざみたばこを入れる火皿は、径1.4cmで深さ0.9cm、孔は0.3cmを測る。火皿は厚さ1.5~2mmでがっしりしている。

本図にかけたキセルは、3種類の形態がみられる。太いもの、細いもの、胴部の異なりなどがある。全て縁青の吹き出している青銅製である。江戸時代も古い形態であるとおもわれる。

### 5) 献上台 (第23図)

第23図は、軽石製の献上台である。1は、四角形の献上台の角の一部である。上面が平になる部分から割れてしまっている。高さは5cmを測り上面台部は7~8cm位の四角形になるとおもわれる。側面はきれいに磨かれ、脚部となるうら側は、幅2.5cmの縁取りがあり中央は縁りぬかれている。

No.2も軽石製である。うら側の脚部は割れているが、上面台部は傷があるもののほぼ残っている。径10cmの四角形を呈した台部で、その周囲3cmにわたって傾斜して縁をとり脚部へとつながるが、残念なことに脚部が欠失している。推定では高さ10cmになるとおもわれる。軽石は、佐久市瀬戸の河原で拾えるのが南限で南佐久郡下に

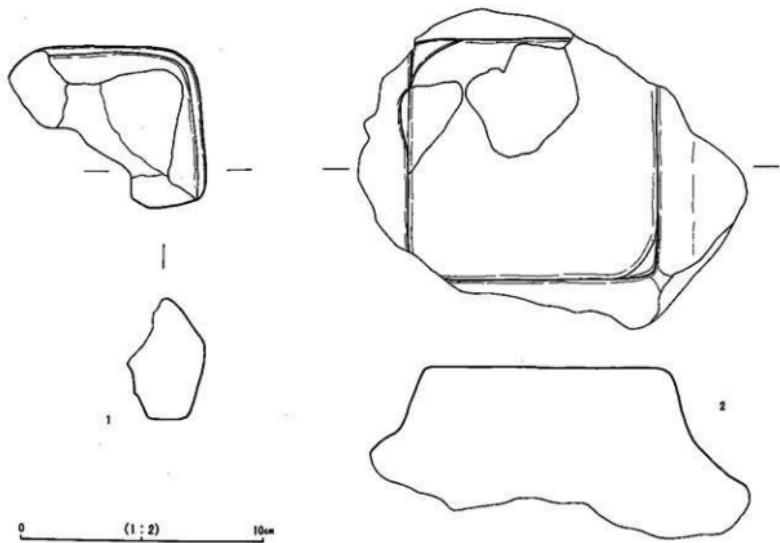


第22図 出土銅製キセル実測図

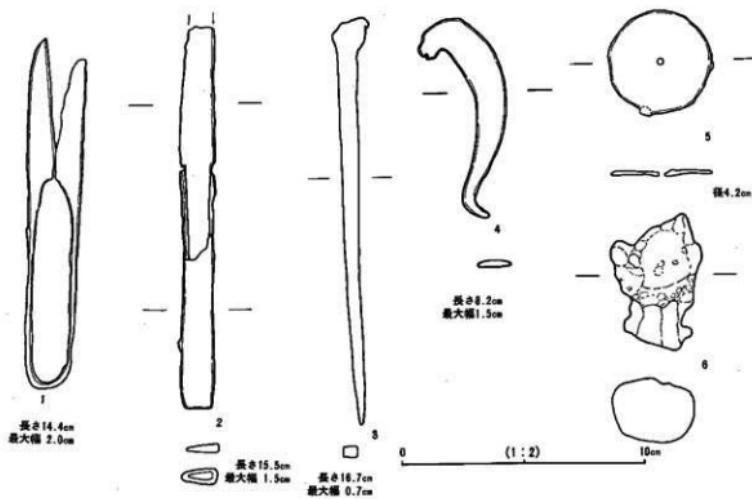
は見られない。金峰山登拝の信者、あるいは修驗者が持ち込んだと考えられる。3号建物址のP<sub>w</sub>周辺から出土した。

#### 6) 鉄器類 (第24図)

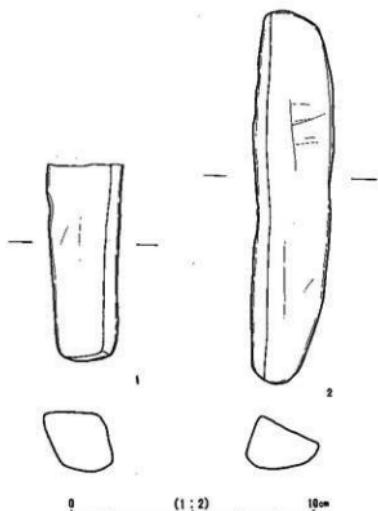
鉄器は6点を図示した。No.1は表面採集のハサミである。握る部分、刃の状態から古い形態であると考えられる。No.2は刀子であるが、柄の部分9.7cmが鞘の中に入った状態にある。刃の先端は折れているが刃は尖っている。柄の長さから刃部もかなり長かったとおもわれる。刃の現存長さは5.7cmを測る。1号建物址から出土した。3は、長さ16.7cm、最大幅0.7cmを測る断面四角形の釘である。下端は鋭く尖り、上端部には幅1.4cmを測る耳



第23図 出土石製壺上台央測図



第24図 出土鉄器類実測図



第25図 出土石実測図

かきのような薄いものが付いている。釘の一種であるとおもわれる。3号建物址の東端から出土した。

4は、全長8.2cmを測る祭祀用の石縁である。鼻・口をあらわす切り込みがある。風・虫などを薙ぎ払う農耕儀礼に関連した縁である。縁群の集石地点から出土している。

5は、径4cm、厚さ1mmの鉄製円板である。中央に2mmの孔がある。紡錘車の様相を呈しているが用途はわからない。

6は、鉄鉱石を溶かして玉鋼を取り除いた鐵滓である。重量はあるが玉鋼は全くみられない。

#### 7) 砕石 (第25図)

砾石1は表面採集である。上面と右側面が頻繁に使用された痕跡が残っている。

2は、3号建物址の南側表土層の下から出土した砾石で一面のみを使用し、特に先端が磨り減っている。砂岩の荒砾である。

#### 7 参道と広場 (第26・27図)

1号～3号までの建物の存在したと考えられる場所

から鳥居の存在する手前まで、南に向かって右側に石が直線的に配石されている。2号と3号建物址の対応する間の通路からすでに10mの配石があり、これに継続するものである。第26図の配石は18mにわたっている。砾は、20～80cmまでの平坦に近いものを選んで2～3個ずつ幅80cmにわたって横に並べてある。東側にはまだ間に20～60cmの小さな砾が散乱しているが直線的でない。今回は、道幅4mのみの調査となつたが地形的には緩傾斜していく。第26図は北側から南側にかけてはレベル的に1.6m高低差が生じている。

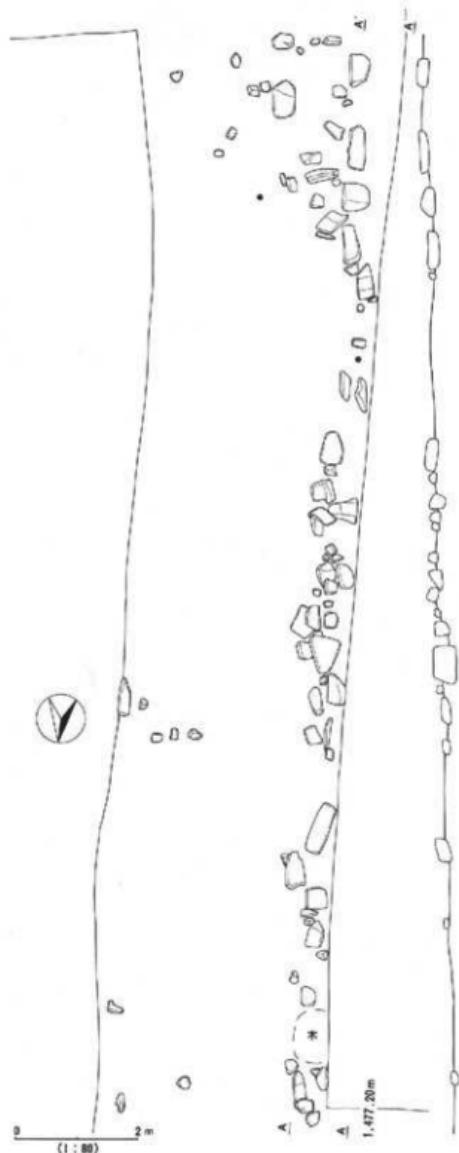
遺物は、第19図1に示した陶器擂鉢口縁部片を次ページ第26図に示した古銭元豊通宝1点が出土している。

第27図は、参道から鳥居にかかる手前の状態図である。ここから5m程広げて調査した。しかし、東側にも西側にも石の配列は認められなかった。西側はこの道幅でこれより先は微高地となり一段地形が上る。また、東側はこれより地形的に一段下る状態にあり、鳥居までの間は地形的に調査区はこの面で手いっぱいであった。

鳥居までの範囲は、幅7.5m～10m、延長17mである。レベル的には70cmの傾斜でゆるやかな平坦地が石段へと続いている。広場内には石段の手前7mから20～30cm大の砾が19個散布している。その範囲は3.8m×7mである。意図的に置かれた様相ではなく散乱しているという状態である。

また、石垣の東側には、30～70cm大の平坦な石が18個並んでいる。大きな石は敷いたような状態になっているが、石段の東端側の石が抜けていることから、そこから落としたことも考えられる。

広場内においては遺物の散布は全く認められていない。延長17m、最大幅10mという広い範囲内であるが、遺物の出土が見られないのは、そうした役目を持たない単なる広場にはかならないからであろう。



(1 : 80)



参道出土古銭拓影

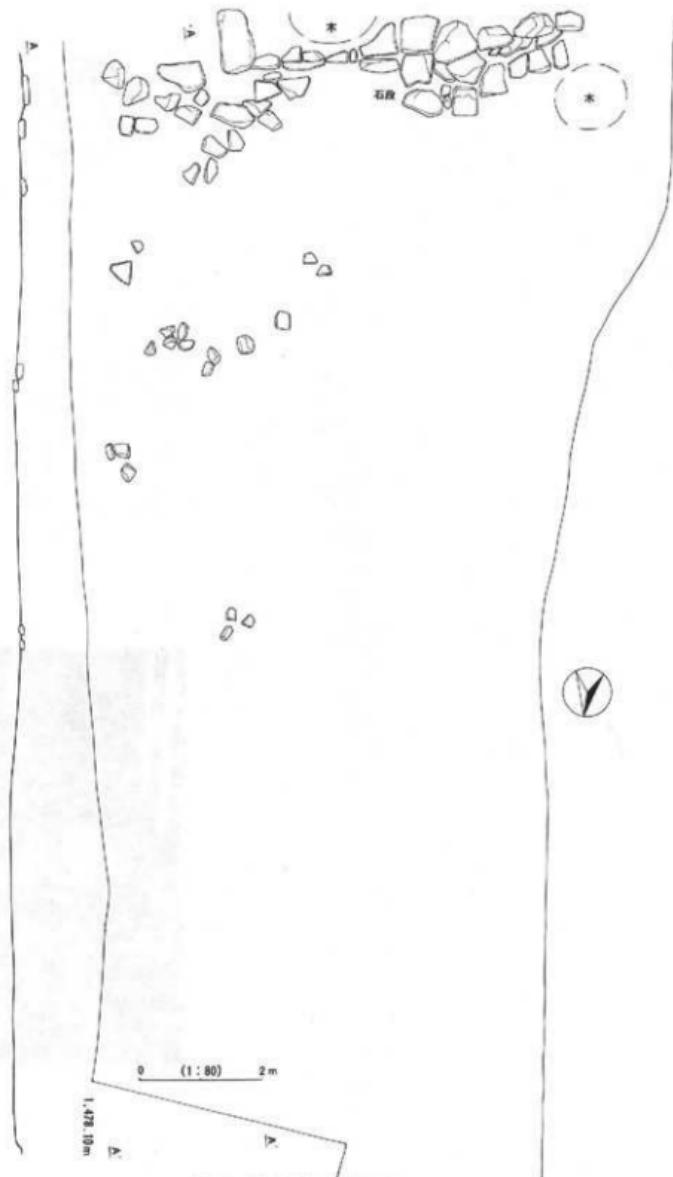
第7表

| 博団<br>番号 | 銭名<br>(字体) |        | 初鋳年(西暦) |
|----------|------------|--------|---------|
| 26-1     | 元豐通宝篆書     |        | 1078    |
| 時代       | 法量         |        | 備考      |
|          | 直径         | 重さ     |         |
| 北宋       | 22.3mm     | 1.35kg | 摩滅著しい   |



参道(北方より)

第26図 参道実測図。(出土古銭拓影図)

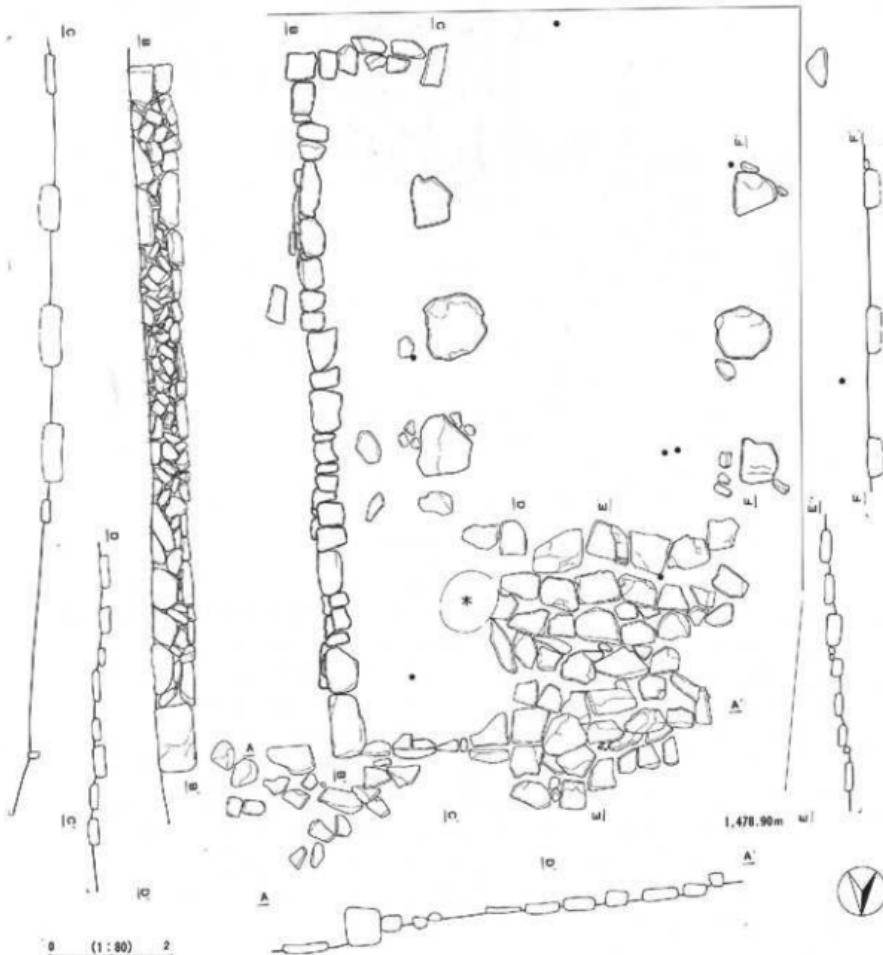


第27図 烏居手前の広場実測図

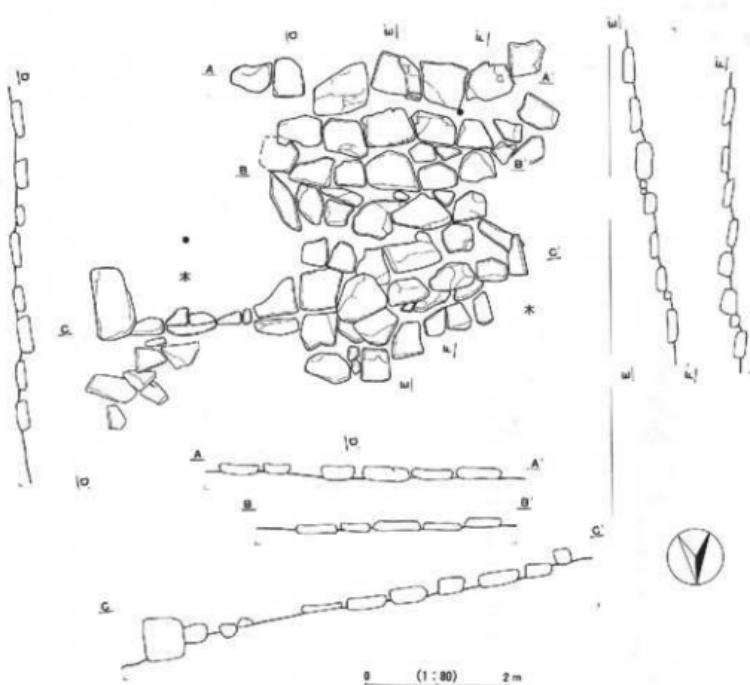
## 8 鳥居跡

### 遺構 (第28~30図)

鳥居跡と考えられる遺構は、1号～3号建物址が存在する南端から約35m離れて存在する。西側から東側へ傾斜している地形のため、東側から鳥居中央へ土盛りをし、さらに傾斜の強い東端側へ、65cmの高さに石垣を組んでいる。石垣の延長は11.5mを測る。石垣の北端側は幅1m、高さ60cmを測る長方形の大きな一つ石を使用し、



第28図 鳥居跡実測図

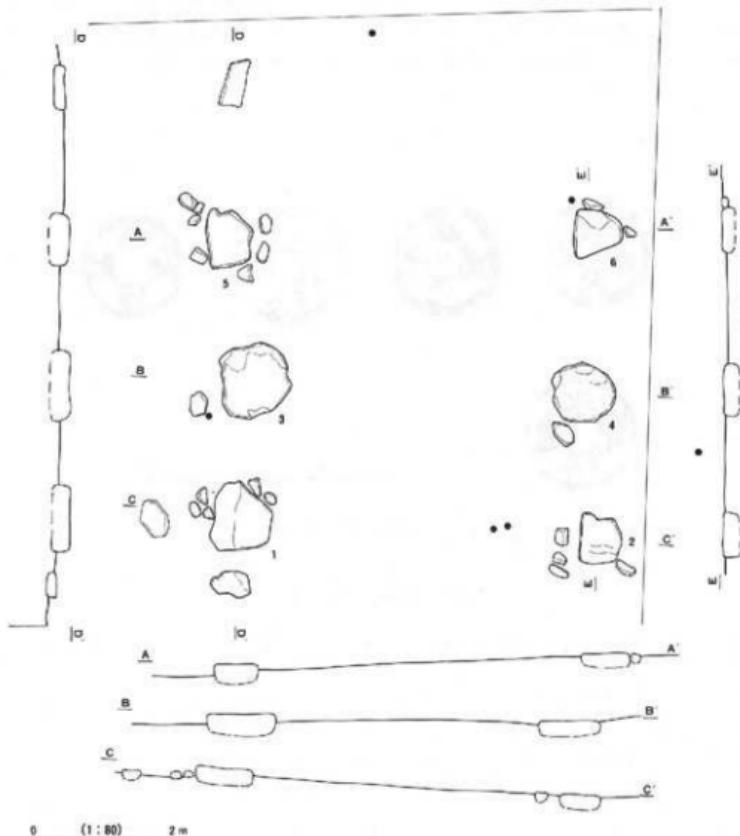


第29図 鳥居跡石段実測図 (1:70)

そこから3mまでの下段の石は60~80cmの比較的大きな石を組んでいる。中央4mは30~60cm大の小さな石を中心、支えとなる石は10cm大である。さらに南端側2.8mにわたって50~90cm大の大きな石を中心に石垣を組んでいる。上段に散かれたように組まれた石は26個で、幅15cm~1mまでという大中小の石が並んでいる。石垣は南北方向11.5mの長さに対し、東西側の並びは短く2.6mである。これは傾斜の段差がこの地点で少なくなり石垣を組む必要がなくなっているからであろう。しかし、北側の1号~3号建物址跡の石垣と比較すると這残状態は良好で崩れてはいない。時期的な隔たりが関係していると考えられる。

上に示した石段の実測図を見てみたい。石段は幅4m、長さ4.8mを測り、8段に組まれている。石は、厚さ10~20cmで平坦に削られている。最大の石は60~80cmで、小さい石は20×40cmである。計56枚の石で8段に並べられて石段が組まれている。最下段は東側に2個の石が残っているだけで西側に木があつたためか空白である。上段3段目までは横に7個の石が並んでいるが、4段~2段目までは1~2個の欠落がみられる。また並びにも乱れが多い。レベル的には55cmの段差があるのみで勾配の少ないだらかな石段である。実用的というよりはむしろ敷石状に並んだ装飾のための石段である感を量しているといえよう。

第30図は、鳥居の礎石実測図である。石段を登ると眼前に鳥居の礎石が位置している。礎石全体の範囲は、南北5m、東西6mを測る。礎石1は、1m×80cmを測り、2と対になる。2は、60×70cmである。真中に位置し

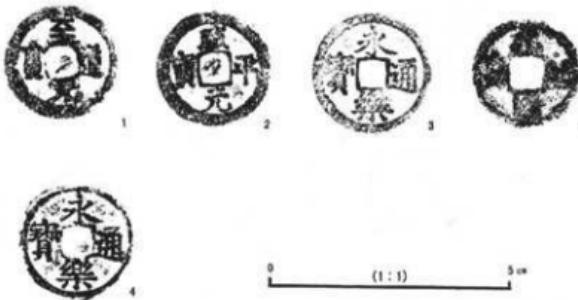


第30図 鳥居跡礎石実測図 (1:70)

ている3は径1m、4は径90cmの不整な円形を呈している。5、6は共に小さく、5が70×80cm、4は70×70cmを測る。1・2の間隔は4.4m、3・4は3.8m、5・6は4.7mを割り各々バラバラである。南北間の間隔は、1・3の間が90cm、3・5の間が1.2m、2・4の間が70cm、4・6の間が1.5mとやはりバラついている。

礎石は平坦に削られて形よく整えられ厚さは15~25cmになるとおもわれるが、遺構保存のために掘り出すことはできなかった。周間に10×20cm大の小石が埋まっていた。また、3は中央に径20cmの石壠れが認められている。こうした点から鳥居の礎石であると考えられるが、敷石状の見事な石段、石垣を築いた造りから祠のような建物の存在も想定された。しかし、古文書に残る享保10年(1725)3月、天明2年(1782)2月の記録と共に、昭和12年に川端下の宿入口に移転した大鳥居が、この地点に存在していたことを記憶している人もいることと、後出する明治30年の写真から、鳥居跡である確証を得ることができた。

鳥居跡は、石段から南北12.6m、東西9mの整地内に存在していた。東西側は調査日数の関係から8mの地点で一区切りとした。礎石周辺はレベル的にはほぼ平坦であるが、石垣側と西側端部では約10cmの差が認められ、西側がやや高い。また、鳥居跡敷地からはずれた両側はこの地点から徐々に傾斜して氾濫によって生じた小さなせぎに至り、さらに、大日沢川へと下る道に入る。



第31図 鳥居跡出土古銭拓影図

第8表 鳥居跡出土古銭一覧表

| 拓図<br>番号 | 銭名<br>(字体) | 初鑄年 (西暦)      | 時代 | 法量   |      | 背文 | 備考   |
|----------|------------|---------------|----|------|------|----|------|
|          |            |               |    | 直徑   | 重さ g |    |      |
| 31-1     | 至道元宝真書     | 至道元年 (995)    | 北宋 | 23.0 | 2.3  |    |      |
| 31-2     | 咸平元宝真書     | 咸平元年 (999)    | 北宋 | 24.0 | 2.35 |    |      |
| 31-3     | 永樂通寶真書     | 成祖永樂元年 (1408) | 明  | 24.5 | 2.8  |    |      |
| 31-4     | 永樂通寶真書     | " (1408)      | 明  | 22.5 | 2.0  |    |      |
| 31-5     | —          | —             | —  | 22.5 | 2.55 |    | 錢名不明 |

#### 遺物 (第31・32図)

鳥居跡出土の遺物は、古銭5枚があり第31図に示した。銭名は、北宋995年発行の至道元宝である。これは、本遺跡では唯一の出土品である。2は、北宋999年発行の咸平元宝である。

3・4は、永樂通宝である。特に3はしっかりした古銭である。銭の代表とされた良銭だからこそしっかりしたもののが残ったのである。反面4は字の残りは鮮明であるが薄くて貧弱である。

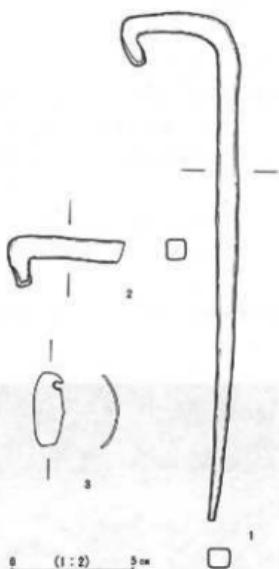
5は、土に埋まっていたため腐蝕気味で銭名がはっきりしない。

第32図は、鐵・銅器類である。1・2は、断面四角形の掲額などに使用した止め釘であると考えられる。長さ21cm、最大の厚さ0.9cmを測り、折れ曲がりの部分は4.3cmでさらに折り返しの部分が1.1cmとなる。2は、1と同様の釘で先端部のみが残った。21cmという長さと0.9cmの厚さでは相当の重量のある掲額も可能であったとお

もわれる。

3は、銅製の薄い板が湾曲し、上部に2.5mmの孔がある。鉤  
のような飾り具であったとも考えられるが小片なので詳細は不  
明である。

(島田 恵子)



第32図 烏居跡出土鉄・銅器類



大日堂全景



金峰山川(遙り目平にて)



石安場橋から大日沢川を望む

## 第5章 考察

修験道に関する調査は、長野県下はもちろん全国的にも例が少なく貴重な調査の一例となった。金峰山登拝口手前の神秘的な屋根岩の前に位置している本遺跡は、高原野菜畑の開拓が直前までせまっている林の入口に発見された。付近一帯は、河川の氾濫によって消滅した段丘面であるため、花崗岩が散乱している。下の写真に示したように遺跡はこの隙をうまく利用して遺構を築いている。さらに、修験道の靈場としてもこの隙を集石して礼拝の一部に活用している。

川上村における金峰山信仰は、古文書・川端下に現存する大鳥居・大日堂・地名・伝承などから、盛行した時代があったことを物語っている。しかし、今回の遺跡発見はこうした文献史料や建物・地名・伝承の中だけにあった修験道の存在を現実のものとして調査を通して確認するに至ったのである。

ここでは、調査から得た成果および問題点などを取り上げて、今後の調査研究のたとき台となるよう考察として若干のまとめと試論を述べることにしたい。



遺跡遠景（林の中に遺跡がある）



遺跡内に散乱している隙

### 1 遺構

本遺跡における遺構は、建物跡が存在したと考えられる石垣の築かれた3地点と、鳥居跡の石垣・石段・礎石の遺残によって確認することができた。先ず建物跡は、1号～3号と命名し各々の分析を試みたので、ここでは問題点およびその特徴を取り上げてみたい。

1号建物址は、2号建物址と隣接して東側に並び、この1号・2号と相対する形で3号建物址・礎群集石地点が西側に立地している。1号建物址は、東側に石垣が築かれて東西7.5m、南北8.5mを測る敷地内に、東西2間半、南北2間半強の建物が建てられていたと考えられる。土台は、特に地形的に傾斜している東南側に多量の隙を積み上げて頑丈に平坦面を作り上げている。

2号建物址は、1号建物址の南側に溝を隔てて隣接している。石積みの集石は2号建物址の北東側に長さ6m、幅2m～4.5mの三角形に集石して土台を作り出している。これは、地形的な関係から生じている集石の状態である。この集石から復原すると約6m×7mの範囲に建物あるいはなにかの施設があったと想定される。

1号建物址は、合計7個の柱穴を検出したが、2号建物址では、90×100cm、80×80cm大の礎石状の平坦な石

が敷いたような状態にあった他は、柱穴の検出はできなかった。しかし、石積み状の集石、平坦な土台からみてなんらかの建物址が存在していたと考えられる。また、1号・2号建物址の存在していたと考えられる地点からの出土遺物は少なく、古銭各号8点、陶器片1点、釘状鉄製品、銅製キセルの破片各1点ずつが出土したのみであった。この内、時代の決てとなる陶器は16世紀の製品であることから中世末の建物址であると考えられる。

3号建物址の存在する地点は、北側に7m×10mの範囲にわたってやや北側に傾斜する広場があり、その先に建物址の存在を裏付ける柱穴が規格性をもって東西間に5個配列している。相対する柱穴は礫群のはじまる地点に位置し、大きな礫にはばまれ4個の発見であることと規格性から若干はずれた配列を示している。しかし、柱穴は径20cm前後、深さ30~50cmを測る規模で掘り込まれているが、両側面から壁際に長さ10~25cmの細い礫を埋め込んで補強している。丁度、礫で囲んだ柱穴の状態を作り出しているのである。1号建物址の柱穴も同様の掘り込みを示していた。本遺跡での特徴といえる特色ある柱穴の掘り方である。

3号建物址は、柱穴の配列から東西8m、南北6mの建物が存在していたことが想定される。床面は平坦で堅硬な面もところどころにみられる。また、焼土が建物内の西側に2箇所堆積しており、その周囲を中心にして古銭が床面上に出土している。この点から想定できることは3号建物址は床張りではなく土間であったと考えられる。反面1号建物址のように土台全面に礫を積み、遺物の出土が焼土の周辺にわずか散布している状態とを対比した場合、1号建物址は床張りであったとおもわれる。この床張りの建物址は宿坊ではなかったかという意見もあったが、焼土の堆積が貧弱で毎日の煮炊きをした様相がなかったこと、生活用品の出土が茶碗破片1点ということからも宿坊とは考えにくい。社殿あるいは礼拝に関わる建物であると想定される。

さらに、3号建物址と隣接して礫群集石地点が東西10m、南北9mの範囲にわたって展開している。最大の礫は2.5m×1.4mで菱形を呈している。往古の氾濫原から石をこの場所に集めた感じがする。また、この集石の中に鏡・懸佛・キセル・古銭が埋められていた。そして集石の南端から焼土の散布が2箇所認められ、集石がまばらとなる地点に4箇所の焼土堆積があり、4m×6mの範囲に計6地点の焼土散布地点が存在している。礫群の集石・焼土散布地点は意図的に作られた参詣者の祭場である可能性が高い。

この祭場南端から約35m南に進むと、石垣と石段を有した鳥居の跡に達する。そして祭場の東端から直線的な配石が南に向って、一応ここでは便宜上「参道」と名付けたので参道と呼ぶことにするが、この参道に向けて18mの直線的配石が右側に続いている。意図的に配石された感を呈している。この配石が終ると鳥居まで幅7.5m~10m、延長17mの広場がある。遺物の出土が全くみられないゆるやかな傾斜の広場である。人々はここで一息入れて新たな気持で鳥居をくぐったのではないだろうか？また、女人界とされる金峰山への登拝が禁じられた女たちは、この広場を境界としてそれより先へは足を踏み入れることができなかつたのかもしれない。

鳥居は、地形的な関係から東側から中央にかけて土を盛り上げ、東端に65cmの高さに石垣を築いている。石垣は11.5mの長さにわたる立派な構造で崩れることもなく現存している。石垣上面の台地には鳥居の礫石が3個ずつ相対して残っていた。厚さ15~25cmの偏平に形作られた径60cm~1m大の不整な円形、三角形、四角形を呈す花崗岩が敷かれている。さらに、相対する礫石の手前に幅4m、長さ4.8mの規模を有す石段が築かれている。石段はゆるやかな勾配面に56枚の偏平な石を7個ずつ8段に並べている。この石段は現在は崩れているところが多いが、当時は敷石状に並べられ装饰的にもきれいな石段であって、大鳥居の勇壮で威厳に満ちたたゞまいとよく調和していたであろうと想定される。鳥居跡の敷地は石段から南北12.6m、東西9mを測る規模である。

発掘調査地点では、石垣・石段・礫石を有す立派な構造から、小さなやしろとしての祠を想定していたが、文献史料など歴史的側面からみた場合、鳥居跡としての裏付けが強力である。古文書には、享保十年（1725）三月、天明二年（1782）二月の建立についての記録が残っているとのことである。そして、この鳥居は昭和12年川端下



川端下宿入口に移転した鳥居（表）



（裏）

の宿の入口に移転し現存している。明治・大正生れの人たちはこの鳥居が発掘調査地に建っていたことを記憶している。さらに、本報告書執筆中に桶沢の吉沢学氏から一枚の写真が届けられ、確認を得ることができた。

発掘調査の結果からみた場合、1号～3号建物址は中世末～江戸時代中期初頭に比定されると考えられる。後述する古銭の集計と陶器から時期決定が裏付けられる。また、石垣の崩れ方は鳥居跡の石垣と比較した場合、時間差は明確に読みとくことができる。中世末～江戸時代中期初頭まで1号～3号建物址、礫群集石地点、焼土散布地周辺一帯が参詣、礼拝の場所であったと考えられる。

江戸時代中期前半になってから修驗道が大衆化し、地方修驗の場が独自に発展していく。金峰山を御神体とする靈山信仰の登拝はますます盛んとなり、新たに大鳥居を建立し、大日堂が創建されたと考えられるはしないだろうか？大鳥居と大日堂はセットされたものであり、1号～3号建物址との遺構の時間差はこのような状況から判断できよう。

また、現在大日堂に遷座している「カセンの宮」およびその中に安置されている木造の「藏王権現像」は、屋根岩東端の1615mを測る岩の上に奉納された精巧な作りの里宮である。一般に里宮とは、「本殿が山上にある神社で、山麓の里に置かれてある宮。普通、参拝者のために設けたもの」（広辞苑）という。屋根岩は当初修驗者の山岳靈場である「霧座」があったと想定される。筆者が初めて屋根岩の頂を仰いだ時、手を合せたくなるような神聖な山として感動したように、古来の人々もまた、はるか彼方の金峰山よりもこの屋根岩のもつ神祕的なた

たずまいに先ず心を奪われたと考えられる。でなければ、背後に屋根岩の頂を仰ぐこの地に礼拝の場を築くはずがないであろう。屋根岩と靈場、その山々から湧き出す水を集めめた川のほとりの段丘面、静寂で澄んだ空氣と冷涼な気候、こうした自然環境のもとに大衆化された修驗道は人々を惹き付けて、一大信仰圏が確立されたのである。

## 2 遺 物

本遺跡から出土した遺物は、古銭200点、銅製キセル10点、銅製藏王権現半肉像、鉄釘、刀子、ハサミ、鎌、鏡、砥石、陶器類、その他鐵器とバラエティに富んでいる。これ等の出土遺物の中で集成が可能となったのは古銭および銅製キセルがある。この他、銅製藏王権現半肉像も特殊な遺物として注目される。ここではこの三点について見解を述べてみたい。

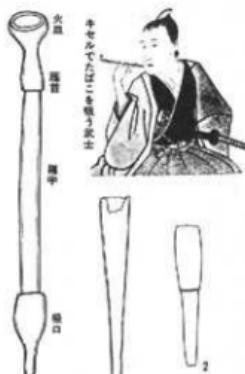


第33図 出土した藏王権現半肉像の  
感應復原図

### (1) 藏王権現半肉像

出土した藏王権現半肉像は、全長3.8cmを測る小さなものです。岩の上に足を開いて立っているその股間に2つの孔が設けられていることから、この小孔が銅板に留める役目を果していたと考えられる。半肉像の藏王権

現は、鏡面に嵌めた懸佛であったと想定される。後世には鍍銀の銅円板上に貼接したものが出現しているようである。第33図は、本遺跡出土の半肉像の藏王権現を円板上にのせ、さらに、釣手を配した懸佛の復原図である。このような状態であったと理解されるが、出土品はかなり粗雑な作りである。



第34図 本遺跡出土のキセルの形態

### (2) 銅製キセル

銅製のキセルは、1mm弱の薄い銅板を素材にして作られている。1・2・3と各々特色ある形をしており、本遺跡出土のキセルは、この3形態に分類できる。また、緑青が全面を覆っていた。

1は、吸口8cmを測り胴部が1.2cmとかなり太い。この部分から竹などを使って羅字としたとおもわれるが、太くて長い大形のキセルである。

2は、1よりやや小さくなり標準的な大きさである。吸口は綫縁がつけられて羅字との境が明白である。竹はこの綫縁付近まで差し込まれていることが、3の状況から判断できる。最大径は1cmを測る。

3は、最大径7mmの細身である。

吸口の長さは4.3cmで2と同様の綫縁が施されている。また、羅字の竹がはめこまれた状態で残存していた。竹は吸口付近までしっかりとはめこまれている。

4は、唯一の雁首である。首は径5mmでかなり細い。火皿は厚くてがっちりしている。1~3と同様緑青がふき出しており、吸口とセットになることがこの雁首の出土によって確信できた。

### (3) 古銭

古銭は、200枚近く出土したが銭名が判断できて拓本が可能となったのは、第9表の一覧表に集計してある。

本遺跡で特に出土数が多い、元豐通宝、皇宋通宝は、全国的にも



本遺跡内における鋳写しを抜粋した錢形の変化



ス 宝 ハ 宝 金局室

第35図 本遺跡出土古銭の特徴

古銭

第9表 金峰山修驗道遺跡出土古錢集計表

| No. | 銭名   | 時代 | 初鑄年(西暦) | 説方          | 枚数 | 比率% | 備考   |
|-----|------|----|---------|-------------|----|-----|------|
| ①   | 開元通宝 | 唐  | 武德四年    | (621)       | 対  | 9   | 5.8% |
| 2   | 乾元重寶 | 唐  | 乾元二年    | (758)       | 対  | 1   | 0.6  |
| ③   | 宋元通宝 | 北宋 |         | (960)       | 対  | 1   | 0.6  |
| 4   | 太平通宝 | 北宋 | 太平興國元年  | (976)       | 対  | 1   | 0.6  |
| ⑤   | 純化元寶 | 北宋 | 純化元年    | (990)       | 対  | 1   | 0.6  |
| 6   | 至道元寶 | 北宋 | 至道元年    | (995)       | 廻  | 1   | 0.6  |
| ⑦   | 咸平元寶 | 北宋 | 真宗咸平元年  | (999)       | 廻  | 4   | 2.5  |
| ⑧   | 景德元寶 | 北宋 | 景德元年    | (1005)      | 廻  | 4   | 2.5  |
| ⑨   | 祥符通寶 | 北宋 | 大中祥符元年  | (1009)      | 廻  | 3   | 1.9  |
| 10  | 天禧通寶 | 北宋 | 天禧年間    | (1018~)     | 廻  | 2   | 1.3  |
| ⑪   | 天聖元寶 | 北宋 | 仁宗天聖元年  | (1023)      | 廻  | 4   | 2.5  |
| ⑫   | 皇宋通寶 | 北宋 | 元祐二年    | (1039)      | 対  | 11  | 7.0  |
| 13  | 至和通寶 | 北宋 | 至和元年    | (1054~1055) | 廻  | 1   | 0.6  |
| 14  | 嘉祐元寶 | 北宋 | 嘉祐元年    | (1057)      | 廻  | 1   | 0.6  |
| 15  | 嘉祐通寶 | 北宋 | 嘉祐元年    | (1057)      | 対  | 5   | 3.2  |
| 16  | 治平元寶 | 北宋 | 英宗治平元年  | (1064)      | 対  | 3   | 1.9  |
| ⑯   | 熙寧元寶 | 北宋 | 神宗熙寧元年  | (1068)      | 廻  | 7   | 4.5  |
| ⑰   | 元豐通寶 | 北宋 | 元豐元年    | (1078)      | 廻  | 17  | 10.7 |
| ⑲   | 元祐通寶 | 北宋 | 哲宗元祐元年  | (1093)      | 廻  | 6   | 3.8  |
| ⑳   | 紹聖元寶 | 北宋 | 紹聖元年    | (1094)      | 廻  | 9   | 5.8  |
| 21  | 元符通寶 | 北宋 | 元符元年    | (1098)      | 廻  | 6   | 3.8  |
| 22  | 聖宋元寶 | 北宋 | 建中靖國元年  | (1101)      | 廻  | 2   | 1.3  |
| 23  | 大觀通寶 | 北宋 | 大觀元年    | (1107)      | 対  | 4   | 2.5  |
| ㉔   | 政和通寶 | 北宋 | 政和元年    | (1111)      | 対  | 6   | 3.8  |
| 25  | 嘉熙通寶 | 南宋 |         | (1237)      | 対  | 1   | 0.6  |
| 26  | 景定通寶 | 南宋 |         | (1260)      | 対  | 1   | 0.6  |
| 27  | 洪武通寶 | 明  | 太祖洪武元年  | (1368)      | 対  | 8   | 5.1  |
| ㉘   | 永樂通寶 | 明  | 成祖永樂六年  | (1408)      | 対  | 9   | 5.8  |
| 29  | 宣德通寶 | 明  | 宣德八年    | (1433)      | 対  | 1   | 0.6  |
| ㉙   | 寬永通寶 | 江戸 | 寛永十三年幕府 | (1636)      | 対  | 26  | 16.7 |

多量に出土しているようである。また、本遺跡で最も出土の多いのは寛永通宝である。26枚の出土であったが、この内、古寛永は25枚の出土があり、新寛永はわずか1枚である。この新、旧の見分け方は第1に貢の字の貝が最も分り易いといえる。第35図に示したように足が、「ス」「ハ」に分れる。古寛永はス宝、新寛永はハ宝である。魚尾宝はみられなかった。さらに、新寛永はかなりの細字である。古寛永にも細字があるがそれと比較してもさらに細字であることに驚かされる。

古寛永は、たび重なる江戸の大火で幕府財政が危機におちいる以前の明暦での銅錢が終り、寛文八年江戸大奥まで焼けるという大火で銭貨不足となり、新寛永の銅錢が江戸亀戸村で開始された。

こうした時代的背景のもとに本遺跡の成り立ちを考えると、室町時代後期（16世紀）には1号～3号建物址はすでに存在していたと想定できる。古寛永の出土数、および唐・北宋銭の出土数、陶器類がそれを物語っているのではないだろうか？

また、永楽通宝による鋳写しビタ銭の銭形の変化を本遺跡出土の中からたどることができた。永楽通宝は、明の発行で銭の質がよいため銭の代表とまでいわれて、基準的な銭貨となったように、本遺跡出土の永楽通宝もしっかりしたものが多い。しかし、鋳写しビタ銭の他にも本銭を割り削して母銭を作り、日本独特の銭貨が天正時代から寛永時代まで多種多様にわたって造られたようである。

第35図に示した拓影は、渡来銭の良質なものだけを用いて鋳写しすれば良いのだが、鋳写しビタ銭を母銭にして鋳写しするということを繰り返していると、薄くて小さい銭形になりとうとう図のような、半分にも満たないひどい銭形に変化していくのである。

このように、渡来銭から始まった銭貨の流通は、そのまま母銭にして鋳型を造って鋳造することによって続行された。そのため、本遺跡から出土した古銭の大半は、唐・北宋・南宋・明の発行銭貨である。しかし渡来銭そのものは少なく、すべて鋳写しビタ銭であると考えられる。

### 3 地方の修験道について

縄文時代の人々は、山林原野を切り開いて自然と共に生きていた。生業の全てを山林原野に求め生活の根源全てがそこにあった。ある時はやさしく、またある時は厳しい自然の中に身をおいて一体化しながら生きていた。そうした自然環境の中にあって縄文人たちは、さまざまな靈をいくしみ信仰した。呪術信仰の世界が生活の中から必然的に生まれたのである。

稲作の伝来という生業の変化によって人々は平地に移動した。こうして人々の生活はいつしか人里化していくのである。しかし、日本古来の原始信仰は根強く人々の中にうけ繼がれ、決して消え去ることはなかった。原始時代に培かれた山への限りない敬愛の念と、神が宿り、祖靈が潜っていく神聖な神域としての山岳への原始信仰は、いつしか大陸から公伝した仏教や道教と深く結びついて大きく発展していくことになる。さらに、こうしたプロセスを経て日本独特の修験道が融合し共存しながら生れたのである。

修験道の祖師と仰がれている役小角は、7世紀に実在したことを立証する記述が「統日本紀」文武天皇3年（699年）にみられる。「役君小角は初め葛木山に住み、咒術をもって称えられたが、弟子の韓國連広足に『師は妖惑の術を用いている』と讒訴され、伊豆島に流された」また、「小角はよく鬼神を使い、（それらに）水を汲ませ、薪を探らせた。もし鬼神が命に從わないときは、兜をもってこれを縛った」と書かれている。その後、役小角に対する数々の伝記が残された。「役行者本記（宗祖本記）」（室町末期）、「役君形生記」（17世紀成立）、「役行者顕末秘蔵記」（17世紀刊行）、「役公徵業錄」（18世紀成立）などがある。これらは理想化された修験道の祖師の伝記・伝説であって、実在した人物であることを示す資料は、「統日本紀」の記述のみであるといわれてい

る。そのため役小角の実像は誰に包まれたままで、私達の知る役小角は伝記・伝説の中に作り出された修験道の開祖としての偉大なる宗教者の理想像であるといえる。

奈良～平安時代に日本独自の山岳宗教修験道が生れた。山林にたてこもって修行していた山岳佛教家の思想や道教の神仏混融を中心とする密教系の加持祈禱など、さまざまな宗教の持つテクノロジーを総合して、山岳と深く結びつきながら形成、発展してきたのであった。

中世に入り、特に戦国時代の修験者は軍團に加わりさまざまな機能を果す重要な役割をになっていた。中でも南九州の島津氏は修験道と深い関わりをもっていた。先ず、戦いに関しては合戦の日取り、政策決定の最終的手段を御くじを引いて決定していた。さらに、各種の祝儀には修験道の儀礼が執行されたのをはじめとして、修験道の種々の作法も公的な作法として取り入れられていた。これらは下臣団の中心に修験者や山伏が重要な地位を占めていたことのあらわれでもある。この他にも書状を携えて全国をかけ回ったり、合戦の兵術書作成なども司どり、修験者は合戦にあたって軍團の一要員として参加し、重要な使命をになっていたのである。

佐久地方においても同様の所見が得られている。戦国時代武田軍に参加して活躍した伊田信蕃は、修験者である柳沢氏を用人として偵察させ、あらゆる情報を集めていた。また、武田信玄は大井法華堂を中心とする山伏22人にその功労に対し普請役を免除している。こうした事実からみて佐久地方における修験道の歴史はすでに中世には開始されていたことが理解できる。佐久町大字海瀬余地の友野政幸氏宅には、写真に示した山伏の法具、数々の儀札書、羽黒山修行成就書などが残っている。友野家は、中世末～江戸時代まで新海三社神社の神長を勤めた古い家柄である。

近世における修験道は、大衆化して山伏も広く民間に開放されていく方向がとられた。そのため、山伏は全国各地巡廻の生活から里に定住するようになった。山伏は里人のために加持祈禱を行なったり、永い山伏修行によって培かれた薬草・薬石の専門家でもあった彼らは、医者として頼られその治療にもあたった。そのため一般民衆との信頼関係が強くなり、地域にあっては大きな利権を獲得していくのであった。

しかし封建体制の確立した近世社会では、幕府がこの状態を見のがしあらなかった。修験道支配の企てとして先ず第一に統制を強要してきたのである。その統制の中に修験道の本末制度が組み込まれていくことになる。

近世初期勢いを増大させた本山派は、一派の独占を狙って他の門跡の修験者に対してさまざまな防害、締め出し、役錢の徵収などに初まり最終的には殺害までも行って一円支配をめざしたが、幕府の宗教支配の中に組み立てられた修験道編成の意図的政策によってくずされてしまった。それは、本山派・当山派の並立となり、さらに、本末関係に内包されない修験者が禁止されて、本山・当山のいずれかの派に属することが規定されたのであった。この本末関係をわかりやすく見るために、次の模式図を引用したい。

〈本山派〉 一円支配

聖護院門跡—(別半役)先達—(別半役)年行事—修験者

〈当山派〉 節目支配

三宝院門跡—正大先達—修験者 (師弟関係に基づく)

(1993年田中秀和)

こうして、近世修験道は幕府の宗教支配政策の中にあって、政治組織への従属と共にその統制の強要により、從来の修験道がもつ輝きが失われ紛争が絶えなくなっていくのである。



佐久町余地友野政幸氏宅に伝わる山伏の法具と儀札書

### (1) 川上村における修験道の足あと

川上村における修験道の歴史は、第2章遺跡の環境、第3節歴史的環境の節で上田貢氏が詳細に記述しているので、新発見の史料を中心に修験道の足あとをたどってみたい。

修験道が大衆化された江戸時代には、全国各地から先達に案内された信者が信仰の拠点となった靈峰を訪れるようになった。川上村においては今回発掘調査した、神祕的な様相を呈した屋根岩の頂を仰ぐ川端下の靈場、さらに金峰山の靈峰をめざした人々が集ってきていた。この事実を裏付ける文書が御所平の由井保範氏宅に残っていたので紹介したい。

文書は、由井茂右衛門が「寛延三庚午歳 題国衆御休足帳 五月吉日 信州佐久郡御所平村 由井茂右衛門」と題して半紙横二ツ折の帳面紙数19枚に宿泊者の国、郡、氏名が記録されていた。さらに、宿泊者並びにお茶の接待にあずかった廻国衆が残していくとおもわれるお札が1,000枚近く見つかっている。(次ページ参照)このお札を子孫の由井茂也氏(本調査団長)が丹念に書き写して集計をとって研究していた。筆者は本発掘調査の一年前に『諸国廻国衆記録』と題した由井茂也氏の集計ノートをコピーさせてもらい、三峯山信仰者その他にどのような人々がこのお札を残していくのか今後の研究課題としてあづからせていただいた。執筆中ふと思いつくてもしやとコピーを取り出してみると、行者と書き記してあるではないか。これぞまさに修験道行者である。一瞬興奮に包まれ小躍した。修験道の足あとを記す唯一の古文書である。考古学の発掘調査と古文書とが一致したのである。一研究者としてこの事実はやはりうれしいものである。

御所平村の由井茂右衛門家は江戸時代に代々名主役を勤めた大地主であった。旅籠が足りなかったのか詳細は分らないが、余裕のある大地主の由井家で旅人の世話をしていたと考えられる。上田貢氏の記述の中には、「金峰山信仰や三峯山信仰者の多く行き交う武州往還の宿場ともいえる川上村の旅籠の歴史は詳らかでないが明治十八年の記録によると、村内に十八軒の旅籠があり、うち川端下三軒、居倉・桜山に各二軒である。」とあるように、旅籠はかなりあったがそれ以上に宿泊の旅人が多く、民家での世話が必要であったと考えられる。

ここに記したものは、自ら行者と記した奉納乗妙典六十六部日本廻国 御札である。この他にも名前から山状であるということが理解できるが、行者と記してないので掲載を省略した。

天下泰平 勢州乗名大浦村 奉納大乗妙典六十六部日本廻国 日月清明 行者 是心

九州築前国怡土郡長野村(以下大乗妙典略す) 行者 玄心

築之前州 行者 加平次

紀州はし本村 行者 □□

下野国都賀郡小少村 行者 長八郎

肥前長崎 行者 井上角左エ門

奥州賀<口>郡<口>谷村 行者 善了

信州善光寺二世安樂 行者 俗名 長助

上野国邑楽郡奇木戸村 行者 権十郎

越後国魚沼郡宮<口>村 行者 □□

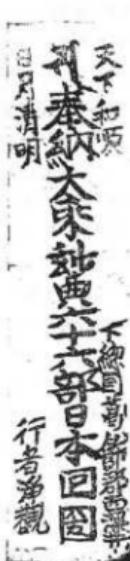
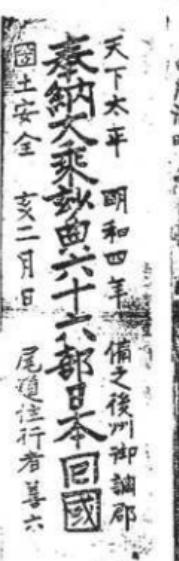
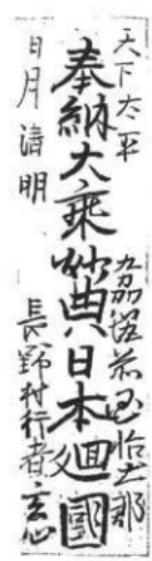
武州多摩郡山田村 行者 常心

帝風御扇聖代万才仏日増輝 天下泰平 国家安全 懸州高松領下法村杜多 修業者 清兵衛

下野国河内郡戸上村 行者 了伝

下總國萬葉郡西深井 行者 淨觀





和州中郡 行者 川野尚右衛門  
相州三浦郡下宮田村 行者 敬心  
下總佐倉 行者 担禮  
日州那珂郡□肥隈城ヶ崎 行者 正五郎  
安藝國広島 行者 伝兵衛  
濃州武儀郡□生村 行者 与七  
上野国群馬郡今古宿 行者 善心  
京都三条 行者 了  
防州大鳩郡置家室 行者 唯心  
加州金沢 行者 順了  
越後国岩船郡葛籠山村 行者 勘十郎  
豊後国西都郡 行者 吉田伊三右衛門  
下野国河内郡戸上村 行者 了伝  
伊豆国加毛郡 修業者 □秀  
武州埼玉郡小瀬村 行者 大園  
奉納諸國神社仏閣為二世安來 势州松坂飯高郡 同行四人 行者 熊藏  
豆州伊藤郡荒口村 行者 猪三郎  
浪花 優婆塞 行者 祐道  
長門豊浦中野原村慈眼寺弟子 行者  
越後国蒲原郡 行者 晃提  
野州都賀郡尻内村 行者 圓西  
泉州境 行者 敦清  
加州石川郡泉野村 行者 善右衛門  
備前国上道郡西□□ 大行者 □□□  
羽州田川郡友江村 行者 与市  
奥州某田村 行者 □□  
備前岡山 行者 □道  
下總国銚子高□ 行者 安心  
甲州都留郡大幡村 行者 可休  
豆州伊藤郷荒井村 行者 猪三郎  
肥前長崎□ 行者 小平次  
濃州賀茂郡黒川村 行者 懇兵衛  
下総州葛飾郡花□村 行者 佐右衛門  
武州江戸すがも 行者 周全  
攝州大阪本町長□□ 行者 謹岐屋□□  
信州佐久郡瀬戸村 行者 藤助  
周防国吉鋪郡山口 行者 与一郎  
備後国奴可郡小奴可村 行者 宇江 右仲右衛門

相州三浦郡秋谷村 行者 彦七郎  
幡州明石住人 行者 覚源  
尾州名古屋 行者 善助  
安房国平都中村 行者 梅翁拝  
四国阿波 行者 与右衛門  
藝州高田郡秋山村 行者 紗智  
武州桜沢郡深谷領折野郷村 行者 順敬  
雲州若狭郡東林木村 行者 要吉

(以上年月日の記入のない御札である)

元文六西天二月吉日 武州埼玉郡花崎村 行者 善京  
延享二年八月吉日 美濃州恵那郡加子母村 行者 浄円  
延享五年五月十一日 下野国塙谷郡伊佐野村 行者 利伝  
寛延四年□□□仲秋 奥州伊達郡福口田村 行者 教白  
寛延四年七月吉日 武州下足立郡鳴根村 行者 戒心  
宝曆二年壬午七月二五日 三州賀茂郡□川邑 行者 松村源八郎  
宝曆三年三月吉日(善光寺へ四十八里余) 行者 念休  
宝曆三年酉年五月吉日 佐波新太郎相川 順行者 玄教  
宝曆四年戌年二月吉日 奥州南部八戸領□□□ 順主行者 劍四郎  
宝曆五年乙亥天三月吉祥日 摂州大阪曾根崎 行者 小谷仁兵衛  
宝曆五年八月吉日 武州埼玉郡青柳村 行者 常観  
宝曆八年寅三月吉日 摂州川辺村多田庄上□川村住人 行者 得心  
宝曆八年戊寅三月吉祥日 飛州大野郡高山城下 行者 因心  
宝曆八年寅五月吉日 武江横山三丁目住 行者 誠心  
宝曆八年七月吉日 奥州仙台雄鹿郡水間村 行者 因淨  
宝曆九年己卯三月吉祥日 越後国魚沼郡四日町村 行者 菩界  
宝曆九年己卯年六月五日 但馬城崎郡三沢村 行者 □□  
宝曆十年辰十月吉日 紀州□□郡湯口村 行者 德右衛門  
宝曆十一年巳四月吉祥日 江戸京橋銀座三丁目 行者 教伝  
宝曆十一年巳八月吉日 势州豊田郡上山村 行者 因照  
宝曆十二年七月吉日 紀州糸都矢野村 行者 卿□  
宝曆十三年癸未七月吉祥日 舟州倭鹿郡志賀向日村 行者 宥園  
宝曆十三年癸未八月吉祥日 山城国京都住 行者 穂五郎  
宝曆十四年甲申二月吉日 城州愛宕郡京大仏 行者 浄喜  
明和元年六月吉日 紀州熊野□□□ 行者 与惣□□  
明和二年酉四月吉日 羽州米沢板谷村 行者 孝七  
明和二年九月 信州諏訪郡戸口村 行者 喜右衛門  
明和三年丙戌年二月吉祥日 阿州那賀郡橘浦 行者 宿心  
明和三年戊天三月吉日 上州利根郡上津村 行者 西心 発向

明和三年戊三月吉日 越後国蒲原郡羽黒村 行者 一心  
 明和三年五月吉日 信州高井郡□□村 行者 庄助  
 明和四年亥二月 備之後州御調郡尾道住 行者 善六  
 明和四年丁亥天八月吉日 江戸箕輪町 行者 弥八  
 明和五年子正月 武州足立郡桶川領羽賀村 行者 小林伝兵衛  
 明和五年子正月吉日 越後国新方町 行者 宗之丞  
 明和五年子天三月 信州中伊那郡高見村 行者 通信  
 明和六年巳丑三月 越後魚沼郡川井村 行者 宗七  
 明和六年丑三月 野州都賀郡日向村 行者 所左衛門  
 安永二年巳天六月吉日 越中富山中野町 行者 藤右衛門  
 安永五年丙申天正月吉祥日 藝州山口郡宮佐村 行者 中性  
 安永五年六月吉日 但州氣多郡芝村 行者 上藏友八  
 安永六年丁酉年安樂也五月吉祥日 武州江戸四ツ谷坂町 行者 善助  
 安永六年酉十一月吉日 僧後福山領芦田郡荒谷村 行者 達円  
 安永八年巳亥天正月吉祥日 房州長狹郡天津村 行者 正觀  
 安永八年正月吉日 豊後國源江村 行者 又平  
 安永八年巳亥年 信州佐久郡御所平村 行者 常心  
 安永九年庚子年正月吉日 武州浅草新寺町 行者 三人  
 安永十年辛丑年二月吉日 江戸牛込横町 行者 藤助  
 天明元年巳五月吉日 尾州中鳴郡一ノ宮村 行者 信西

以上110人が行者として記している。

第10表 国名記入の御札、泊り人數集計表

(由井茂也集計調査から引用)

| 国名<br>内 | 五畿<br>内 | 山城     | 大和     | 河内     | 攝津          | 和泉          | 東海<br>道 | 伊<br>賀 | 伊<br>勢 | 志摩     | 尾<br>張 | 三<br>河      | 遠<br>江 | 駿<br>河      | 甲<br>斐 | 伊<br>豆 | 相<br>模 | 江<br>戸 | 武<br>藏 | 安<br>房 | 上<br>総 | 下<br>總 | 常<br>陸      | 東<br>山<br>道 | 近<br>江 | 美<br>濃 | 飛<br>驛 |
|---------|---------|--------|--------|--------|-------------|-------------|---------|--------|--------|--------|--------|-------------|--------|-------------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|-------------|-------------|--------|--------|--------|
| 札<br>数  |         | 20     | 6      | 1      | 19          | 9           |         |        | 11     |        | 11     | 7           | 6      | 3           | 18     | 8      | 7      | 21     | 118    | 11     | 10     | 39     | 21          |             | 3      | 16     | 2      |
| 治<br>り  |         | 4      | 4      | 1      | 1           | 1           |         |        | 4      |        | 5      | 1           | 1      | 1           | 5      | 3      | 1      |        | 29     | 1      | 2      | 8      | 11          |             |        | 4      |        |
| 国<br>名  | 信<br>濃  | 上<br>野 | 下<br>野 | 下<br>陸 | 奥<br>出      | 北<br>陸<br>道 | 若<br>狭  | 越<br>前 | 加<br>賀 | 能<br>登 | 越<br>中 | 越<br>後      | 佐<br>渡 | 山<br>陰<br>道 | 丹<br>波 | 丹<br>後 | 但<br>馬 | 因<br>幡 | 伯<br>耆 | 出<br>雲 | 石<br>見 | 隱<br>岐 | 山<br>陽<br>道 | 播<br>磨      | 美<br>作 | 備<br>前 | 備<br>中 |
| 札<br>数  | 67      | 30     | 13     |        | 17          |             |         | 5      | 9      | 2      | 6      | 31          | 11     |             | 4      | 1      | 7      | 13     | 3      | 13     | 9      | 1      |             | 3           | 4      | 3      | 13     |
| 治<br>り  | 14      | 4      | 4      | 11     | 4           |             |         | 1      | 3      | 1      | 2      | 10          | 2      |             | 1      |        | 1      | 4      |        | 1      | 5      | 1      |             |             | 2      |        |        |
| 国<br>名  | 備<br>後  | 安<br>藝 | 周<br>防 | 長<br>門 | 南<br>海<br>道 | 紀<br>伊      | 淡<br>路  | 阿<br>波 | 讃<br>岐 | 伊<br>豫 | 土<br>佐 | 西<br>海<br>道 | 筑<br>前 | 筑<br>後      | 豐<br>前 | 豐<br>後 | 肥<br>前 | 肥<br>後 | 日<br>向 | 大<br>隅 | 薩<br>摩 | 二<br>島 | 壱<br>岐      | 対<br>馬      | 松<br>前 | 合<br>計 |        |
| 札<br>数  | 18      | 21     | 7      | 18     |             | 16          | 1       | 5      | 12     | 9      |        | 5           |        |             | 4      | 6      | 11     | 4      | 5      |        |        |        |             |             | 1      | 775    |        |
| 治<br>り  | 2       | 1      | 2      | 2      |             | 4           |         |        | 2      | 2      |        |             |        |             |        |        | 3      |        | 1      |        |        |        |             |             |        | 176    |        |

御札に記された時代は、元文六年～天明までとなっている。この内、宝暦、明和、安永が最も多い。修驗道の大衆化がすんだ最盛期であったと考えられる。同時に川上村における地方修驗が独自に発達した最盛期であるともわれる。本発掘調査で出土した古銭にみられるように、投銭の寛永通宝のほとんどが、明暦までに鋳造された古寛永であった。銭貨の不足から寛文八年（1668）に新寛永の鋳造が始まったが、その後、安永年間まで約110年を経ているにもかかわらず、地方の末端まで新寛永の流通がおよんでいないのであろうか。また、投銭の80パーセントが北宗・南宗・明鏡で占められていることも銭貨の流通に関連してくる問題である。この状況から、1～3号建物址は江戸前半期まで存在していたと考えられる。

発掘調査を通して筆者は次のような想定に至った。先ず、1号建物址～3号建物址が存在する地点と立派な石垣と石段、礎石を有した大鳥居とは、遺構の遺残状態に大きな差があり、その状態から両者は同時に建てられたものではなく時間的に差があることを、第4章の遺構の節で前述してある。大鳥居に関する古文書の記録は、

享保十年（1725）巳三月 二両一分六五文 野沢村 大工 吉右衛門

天明二年（1782）二月 二両一分二朱 野沢村 大工 安左衛門

とが現在までに発見されている。享保から天明二年まで57年間鳥居は建て替えの必要はなかったと考えられる。明治三十年代にすでに存在していた大鳥居が現在まで約100年以上腐蝕することなく遺残している事実が示しているように、建て替えを繰り返すたびに大鳥居は立派なものに替えられたと考えられる。だから100年以上も経た現在でも遺残しているのである。従って、1号～3号建物址は中世末から江戸時代中期初頭まで存在し、大鳥居とセットになると考えられる大日堂は、江戸時代中期から存在したものであろう。以上が、発掘調査による遺構、遺物、さらに古文書から総合して考察される所見である。これらに関しては今後発見されるかもしれない古文書などを頼りに解明していくかなければならない課題である。

さらに、修驗道の靈峰と仰がれる山々は狐師が開山と深く関わっている。それは狐師と修驗者との交流を示す狩猟の儀式に端的にあらわれ、狩猟民俗として現在も存続している。また、修驗者は薬草による医療的な技術を身に付け民間療法に尽した。そして、もう一つ薬石と共にたら師や金属加工者との関連があげられる。

川上村における修驗道は、この金属加工者との関わり合いが問題となる。武田信玄は、金峰山川左岸の山奥で金山開発を行なっていた。歴史的環境の中で上田貢氏は次のような記述をしている。「戦国時代武田氏によって金山開発が行われて金掘の人々が多く住んでおり、杵千軒、川端千軒といわれるほどに栄えた。永禄・天正年間に最も栄え、慶長年間に衰微したと伝えられている。当時寺も五寺を数えたが金山の衰退と共に他地へ移ったということである。鉱山開発は武田氏以来時代の消長はあり乍らもその後昭和年代まで続いた。」とあるように、修驗者がこの金山開発にどのように関わり、どのような役割を果していたのか。今後解明していくべき課題である。戦国時代鉱山の発掘にのり出した各地の戦国大名によって盛んになった鉱山経営は、当初山伏がその先駆者として取り組み開発してきたものである。一方、江戸時代後半には中之条役所が直接經營にあたっている。

また、発掘調査中現場へ見学に訪れた樋溝の吉沢学氏は、自宅に残っていた古いアルバムの中に発掘調査した石垣の場所に大鳥居が写っている写真があることに気が付かれて、吉沢氏の友人である佐久市の臼田都雄氏を通して筆者に届けて下さった。写真には屋根岩を背景に立派な石垣が築かれた大鳥居が写っていたのである。早速、調査団の上田貢氏と関基氏が写真を持って現地を踏査した結果、発掘調査した鳥居跡と風景と一致したのであった。さらに、川端下に移転した大鳥居と写真を見比べると、節目、傷も同一であり、移転前の写真であることが明らかになつたのである。

写真は明治30年前後のもので、写っている人物のハッピに二ツ山牧場があるが、これは、明治30年に上田竜雄氏が野辺山の二ツ山に乳牛30頭飼育し、搾乳計を設置した牧場のことである。その後、明治34年6月川端下に岩



発掘調査地点に建っていた大鳥居（明治三十年前後 吉沢学氏所蔵）

根牧場を創立し、牛30頭、馬83頭を放牧している。この写真は、岩根牧場創立の下見をした時のものであるらしいとのことである。こうした古い写真によって、川端下に移転した大鳥居は江戸時代から建てられていたものであることが明確になった。私たちはこの由緒ある大鳥居を大切に保存して後世に伝えていかなければならない。

## (2) 修験道の解体

幕府の宗教支配政策により、政治組織への従属を強要された修験道は、徐々に変質していく。かつて人里から遠くはなれた山深い山中に修行し、国境を自由自在に越えて活動していた神秘的な存在であった山伏たちは、本山派・当山派への帰属の強要と遊行禁止によって定住をやむなくされ里山伏へと変質していく。里人のために加持祈禱を行ない、薬草を用いて病気の治療を行うなどして、信頼される里山伏と、荒稼ぎする<sup>無能</sup>ぶり的な里山伏も出現てくる。

明治に入ると、王政復古の新体制の中で「神仏分離」令が発せられ、神仏の関係はここに厳しく断ち切られた。特に神仏習合の思想が濃い修験道は大打撃となった。だがまとも明治5年追い打ちをかけるように、大政官名で修験宗の廢止令が発せられ、「從来の本寺所轄のまま、天台・真言両本宗へ帰入」の命令が出されたのである。この廢止令によって全国に17万人いたとされる先達は、神官になったり、農業に入る者などで修験者は激減していく。このような過程の中で修験道は非公認のまま終焉を迎えた。戦後ようやく復興し、現在は精神修養や日本独自の宗教としてその世界観、修行、靈山登拝など大きな感心が寄せられるようになった。

こうした情勢の中での今回の発掘調査は、川上村の歴史解明に一石を投じ、今後の研究課題が多く残った。

(島田 恵子)

註1 『修験道の本』 (学研 1993年)。

2 永松 敦 「狩獵民俗と修験道—山 神——」(白水社 1993年)。

3 市川 武治 「もう一人の真田—依田右衛門佐信蕃—」(権 1993年)

4 小林 計一郎 「修験の発展」(『佐久市志 歴史編(二)中世』1993年)

5 田中 秀和 「幕藩権力の宗教支配と修験道—近世前期における津軽藩・秋田藩を中心に——」(『日本歴史第542号 1993』)。

付錄

金峯山緣起 全

御金峯山藏王天樞現奉申  
過去大恩載主釋迦年尼佛  
應身如來而久遠功以成佛  
佛而初人相成道到物終而  
爲衆生濟度假文分段同居鑿  
今則審迹而推現顯給當來者  
大慈大悲跡勤菩薩現給益利  
益方便准一也爰以破有法王出現  
世間隨衆生欲種之說法法華經  
演給就中信濃國佐久郡大井  
庄川上真鐵<sup>井</sup>尚書疏給監關  
尋人四捨代文式天皇御宇都  
伽茂<sup>伊</sup>行者逆名譽侵波安塞  
御座<sup>登</sup>等城山<sup>立</sup>夜孔<sup>在</sup>明經  
友神仙發心所無不列于其頂  
舊佛法不爲流布而人以成  
劣者而禁深重衆生等永不離  
輪迴事悲給是爲今教化諸國

修行成給中仙道踏分東國

行脚有信州鹽石田譜所橋

打渡給時水想觀成給其時

水上泛可乘浮林文風未行者

慎此川上美神有鎮避覽給季

登奉拜川添登給比六月中勑

勝余國寒園冷氣毛強草木要

之而露滑苔深雲霞覆步行

維成不如急此像生寒色馬均

御舟鐵一函足駕錫杖推路

頭嶮峻跋不給相木謂所登給

側岩根立寄何國嶺歟可越

誓有休息所巖松爲施名精

天象之可<sup>付</sup>誓意是人誘引也我者  
往古如來應化神一切衆生泰成  
庚申也放光西定雲井合消失  
畢南樹木中嶋宋猿坐<sup>是</sup>十  
大樹蟬鳴聲聞立寄見其形  
甚大眼光冷<sup>ノ</sup>異相蟬也行者  
見東方急行此異虫行隨三里程  
登給之從甫浦<sup>付</sup>爲出小川<sup>付</sup>  
二余町行過自妻手方細谷河  
流有此蟬枯木枝留光破殘聲  
此山上有鎮避<sup>ノ</sup>其神<sup>ノ</sup>神勅爲道指前  
爰顯真如寶相出都<sup>ノ</sup>有緣處<sup>ノ</sup>年<sup>ノ</sup>請  
願惱煩即苦提利益<sup>ノ</sup>遠善功及所誓  
願大聖歡喜天道祖神<sup>ノ</sup>普陀妙音兒王  
御普渡公衣拔體消失給<sup>ノ</sup>當時通決  
崇敬蟬靈神是<sup>ノ</sup>行者爰<sup>ノ</sup>休是有  
折節一天俄搔星風雨雷電<sup>ノ</sup>  
山河一同動搖枝葉茂爲<sup>ノ</sup>大木  
御普渡公衣拔體消失給<sup>ノ</sup>當時通決  
崇敬蟬靈神是<sup>ノ</sup>行者爰<sup>ノ</sup>休是有  
折節一天俄搔星風雨雷電<sup>ノ</sup>  
山河一同動搖枝葉茂爲<sup>ノ</sup>大木  
行者倒立<sup>ノ</sup>優波塞<sup>ノ</sup>草木

異跡生茂步行不自由成老  
何爲來問給答中様我此前  
在所者須可鐵高貴神ノ有  
鎮座聞參詣志深每見蓮步  
江障三從累葉重令人身自是與  
穢也神禁制御疾故從賓處  
神風舟跡繁今日空罷歸也  
誠如來金言外面喜菩薩降心安  
演給足跡立跡引替外面女夜及  
內善菩薩變成瓦願望不違殘念  
釐廟方帰行優婆塞重自是  
未大木茂道絕四野谷多方角  
難辨何所經道筋可踏今式  
手給燒茶此川身捨町斗行東  
西流有落合直出谷水不離  
登候者過所少三十猶無覺束  
所人仙人父音便手給  
謂捨簾方行見姿消失  
是則大如意女人禁制成事前給  
方便今燒茶迎施現黑地所也  
教任客深草野分伏木起分入

給岩頭松風諸行無常闇有細谷  
川水音是生滅法流行誠不思儀  
美地也造心年折算仙人斧者  
幽爲聞立寺見給七面斗翁若男  
天樹伐倒石行者顧修行者  
爲何此山來哉優婆塞答我此  
鐵近比雲都出現御座聞爲奉  
拜是迄來僕答給私人聞相之寺  
特志從是末道絕無案內無覺  
東此若看案內連給優婆塞大慨不  
淺彼男先立凌嶮路登給嚴岩  
川原道分人給數十町行者男行  
者申様奉案內中度作得一之  
跡殘老人事心許ナ寢早崩  
僅也山方角道次第子口教假  
停ナリ是別半室神也男殺通  
登山有松木頬老僧人忽然見給  
有謂給之問給老僧答察通應望  
ナリ宣佈同志手打連立木根取  
教主藥師如來也此山參詣肯賤

六臂黃昏時漸崩登給微信心南無  
金剛藏王左御手奉三  
鉢左御手少御佛膝坐落關  
妙音殊哉傳優婆塞我住普陀吳山  
會五十六億字方歲期三食晚有無  
兩緣度衆生假況通鑑樹春霞隱  
跡經年月所汝頻山願再日城市  
山秋空涌出無然坂東遠善安生  
難度依之每月朔日望近吉野  
淨此山願寫分身願利群生悲願  
也去共志有知者汝東國整等  
我住山可知度參詣肇依信心  
原孽摩住渴仰淺深觀富爲願叶  
如意事何疑可有之神託新  
示給空雲霧漸夕而失給  
現世安隱施利益淨增福世外  
教主藥師如來也此山參詣肯賤

等寒溫深所。予老若被役之步  
行不成如意途中，煩惱念願望之，  
悲事不便也。其祐苦如意未許焉。  
今歲彌勤惡事，契約此山垂跡有緣。  
安生助也。顯慈言老僧覲佛歎雲井  
道上。詒行者感泣銘所猶々奉。  
禮拜神恩，鳥謝德。七日參萬物。  
孔堯明王經有讚誦東國。有下向全  
中宮藥師如來善號也。自文以未  
東國參詣勝神。依歌人眉威人  
者依神德。養運無不成就。如何成  
美宇算。福胎天地中。萬物一脉成經。  
不脫盛衰。或風旱雨露。依遇不及。  
乖失。凶年。民患。逃散。欲成傷寒。  
鐵出禁川上。御地形甚高。陽氣少。  
極陰所也。依之。後古代耕作。  
失手。山年。民患。逃散。欲成傷寒。  
桓子孫成折桓。桓死。妻其弟給。山中  
金銀涌出。與疲民再築。宋顯砌。事  
度。雖及猶到末世。轉變又灾。不可  
有事也。究賢往百月來。平安城。

智聖大人申貴僧御座或時心中  
發善提心向佛並我生身慚勤慈  
算奉拜此道場不出之日夜碑  
肝膽流悲愴一心不亂有誓願少  
目眠給夢覘共不寐文章未竟  
向故深志不可思儀成事諸佛  
歡喜諸天熱受給具願爲乞  
自爰來於是東土捨由司經以  
万室莊嚴山有彼所號勒慈範  
住給尋行宣搔消機失給見  
夢則覽大人不斜恍夜明之明  
應其日吉日定都立鷗川  
分過甲斐國巨磨郡數庄  
相鹿坂云所尋入給里人七事  
間間欲之思召所獵師不來  
上人獵師向此邊若不思山武  
有上問給レシ義是艮山真  
以金銀藏山有由申傳候共  
我等如化丈登事候其外

更不知申上人支社愚僧等。地也。御邊紫內洛佛。獵師申株成力。是具白大能思所。十月斗山野。伎倆及亂。惟基某。社大僧行。是「一子僧行」。如何。奉隨彼山。御道大仕申。申之父心。有二七領掌牀。見之六獵師上人。搬乞立別。此大上人。御衣喝裙。追山與。分入城。巖頭吹之其牀。見給寶。如美夢以七孙万宝。莊嚴。山色蓮花。咲亂難。有事絕言語。斗也斯所。八旬余老僧肩。每八字霜燭四海浪。冬腰張梓弓。香涼掛裝。裝水精珠。數只拂抱。他忽然來給大向老僧。我生身彌勒。菩薩拜。五起願。不思我蒙差。都遙今來。惟御身定。此山由來知。呂侯語。爲聞給宣。老僧併。支成佛。直道也。峯。梵九尊。西郭曼茶羅。表先地藏。般木。尊。六道龍化。

地藏等一切衆生長夜眠覺佛果正道  
島入表六道六輪錫杖持給藥師戒  
本尊藥師如來一切衆生因緣護持  
人間一代立時早報受衆迎除願立身  
心安樂望叶給錢萬如意輪馬頭  
觀音但念衆生全無所知誓願也見次  
上本尊父殊菩薩摩智惠利鋟  
愚癡<sup>キツチ</sup>切令成正覺大日藏木尊  
大日如來本來真如利表周遍法界萬  
物一致德金闕悟禪定本尊室勝  
放人間算據神威悟禪定佛解  
如來平等性智自他一味和合內心食  
會我慢鋒削慚愧懺悔道場十雙利生  
內裏本尊釋迦如來方德圓滿佛成  
唯我人能寫啟讚頤西方燈明龍  
會我慢鋒削慚愧懺悔道場十雙利生  
本尊千手觀音無始忘想煩惱流垢  
今成佛是菩提發歷劫不思儀願令  
助無量重罪衆生平文體本尊不動  
明工根不無生恩業百人煩惱消滅  
己并本覺菩提今進勝手相本尊  
刀八兒海門專軍陣守護多塔又  
南天鐵塔是也蔽石則彌勒菩薩  
九州九國金剛界表九會又此山

次中大兜盧舍那患地大日也空  
說一度參詣華自性生極樂華教  
流布道場三密平等成心更不空  
無爲發心即到煩惱則善提生死即得解  
三部增塔地成毒害數類更無加  
害常樂我淨風吹噓山藏樹下行  
住無日月光照心蓮寶水張佛法網  
放人間算據神威悟禪定佛解  
惟我人能寫啟讚頤西方燈明龍  
會我慢鋒削慚愧懺悔道場十雙利生  
本尊千手觀音無始忘想煩惱流垢  
今成佛是菩提發歷劫不思儀願令  
助無量重罪衆生平文體本尊不動  
明工根不無生恩業百人煩惱消滅  
己并本覺菩提今進勝手相本尊  
刀八兒海門專軍陣守護多塔又  
南天鐵塔是也蔽石則彌勒菩薩  
九州九國金剛界表九會又此山

金胎不<sub>ニ</sub>曉<sub>ニ</sub>草<sub>ニ</sub>院<sub>ニ</sub>是成設王城  
鬼門<sub>ニ</sub>守<sub>ニ</sub>日<sub>ニ</sub>城<sub>ニ</sub>朝<sub>ニ</sub>中<sub>ニ</sub>一切衆生助<sub>ニ</sub>  
世利益根本也夫七珍中以金爲最  
須此山頂上山氣脉金字形相似本  
朝無雙山共可謂依云金嶺書  
名金峯山神庫<sub>ニ</sub>書<sub>ニ</sub>謂藏三大  
雄現利生廣大無邊從倉庫<sub>ニ</sub>請財  
宝涌出喻也叶<sub>ニ</sub>諸願<sub>ニ</sub>開如應  
婦和合<sub>ニ</sub>折<sub>ニ</sub>成<sub>ニ</sub>苦<sub>ニ</sub>離<sub>ニ</sub>思<sub>ニ</sub>除<sub>ニ</sub>不<sub>ニ</sub>  
祈<sub>ニ</sub>草不得<sub>ニ</sub>陽氣<sub>ニ</sub>招<sub>ニ</sub>葉<sub>ニ</sub>茂<sub>ニ</sub>春<sub>ニ</sub>居<sub>ニ</sub>  
樂耕作能成折<sub>ニ</sub>水旱年不<sub>ニ</sub>嫌  
成實智惠所<sub>ニ</sub>待<sub>ニ</sub>智惠惡<sub>ニ</sub>咒<sub>ニ</sub>  
咀<sub>ニ</sub>惡<sub>ニ</sub>降<sub>ニ</sub>伏<sub>ニ</sub>折<sub>ニ</sub>能<sub>ニ</sub>荒錄<sub>ニ</sub>如<sub>ニ</sub>拂<sub>ニ</sub>  
若草<sub>ニ</sub>又<sub>ニ</sub>仰<sub>ニ</sub>天<sub>ニ</sub>喫<sub>ニ</sub>嘴<sub>ニ</sub>不<sub>ニ</sub>污<sub>ニ</sub>天<sub>ニ</sub>還<sub>ニ</sub>  
已面如<sub>ニ</sub>原<sub>ニ</sub>含<sub>ニ</sub>着<sub>ニ</sub>本<sub>ニ</sub>過<sub>ニ</sub>去<sub>ニ</sub>歡<sub>ニ</sub>迎<sub>ニ</sub>如<sub>ニ</sub>  
現<sub>ニ</sub>微<sub>ニ</sub>基<sub>ニ</sub>利<sub>ニ</sub>土<sub>ニ</sub>有<sub>ニ</sub>情<sub>ニ</sub>非<sub>ニ</sub>情<sub>ニ</sub>等<sub>ニ</sub>有<sub>ニ</sub>無<sub>ニ</sub>  
緣上有頂下<sub>ニ</sub>來落<sub>ニ</sub>到<sub>ニ</sub>三千本<sub>ニ</sub>書<sub>ニ</sub>  
現大師世尊佳悲願有識無識妄

心教給汝志深生身彌勒爲舞此  
山近來者則姿見也老僧忽彌勒井告善薩聖衆作禮而去給彌勒菩薩  
顯自身立知寶瓶降下從地入葉白本老僧成給六申。今旱生身  
蓮華生出即花上結跏趺坐御座菩薩爲舞中此上戴三寶冠御形  
瓔珞自莊嚴御坐紫摩黃金御舞申度有老僧仰安聞事成  
慶用三拜其足十方放無所不到即共畫跡姿顯御迦命可危如何有  
然即說法然文曰如我昔所願今者已滿足化一切衆生皆令人佛道承迦  
如來久遠成道皆在衆生一念中其後當作佛号名曰彌勒廣度諸  
衆生其數無有量善哉。衆生心法備佛身德歸命本覺身法常  
住妙法心蓮臺木來具是三真德三

十七尊住心城演給釋尊一代說法  
一切諸經唯此文極此文能分別。  
大峯萬歲三童卷尾大和國吉野  
山爲置也大峯萬歲此山。更  
更三年天地三才法報應三身全胎  
人膺成木像忿怒形出現給  
即金峯一脉而御座。金彌勒寺  
是也夫以來御嶽山金峯山  
爲里宮末代到諸人運步也  
天王至惱免掛奉議持無量菩薩  
聽聞妙說法無邊天人令雲天降參  
娛樂自笑降花菩薩聖衆仰從座  
起佛足奉拜大寶言忘盡絕呆  
老僧成給今是三成御身下向

給一切衆生助給當山無始無終  
即此華院是也求世母利益  
道場也能令國土令福參請人成  
可給今世名利榮花望。當來  
彌勒慈尊出世時些引接是奉  
羅聖衆列坐今到五祖臺玄女  
重界成山不事叶間敷蕪於  
一奇瑞可顯夫造女人參詣云捨  
指雲井。蓋給比人皇五代號我院  
御宇弘仁七年丙申四月八日破山  
下向季給所五十町麓到岩屋  
中朝日極極成惟見給者明耕夷  
人膺成木像忿怒形出現給  
即金峯一脉而御座。金彌勒寺  
是也夫以來御嶽山金峯山  
爲里宮末代到諸人運步也  
天王至惱免掛奉議持無量菩薩  
聽聞妙說法無邊天人令雲天降參  
娛樂自笑降花菩薩聖衆仰從座  
起佛足奉拜大寶言忘盡絕呆  
老僧成給今是三成御身下向

金峯山緣起以上  
持主 平齋門

四



身前亦勤勸導不<sup>レ</sup>善<sup>レ</sup>。拜<sup>レ</sup>稱<sup>レ</sup>道場<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>出<sup>レ</sup>。七日七夜誦<sup>レ</sup>三<sup>ハ</sup>經<sup>レ</sup>。悲憫<sup>レ</sup>。一心不<sup>レ</sup>亂<sup>レ</sup>。有<sup>レ</sup>晝<sup>ハ</sup>願<sup>レ</sup>。少<sup>ハ</sup>目<sup>ハ</sup>歸<sup>レ</sup>。始<sup>ハ</sup>夢<sup>レ</sup>。因<sup>ハ</sup>共<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>善<sup>レ</sup>。天臺<sup>ハ</sup>上人向<sup>レ</sup>汝深志<sup>ハ</sup>不可思<sup>レ</sup>。懷<sup>レ</sup>。事<sup>ハ</sup>諸<sup>ニ</sup>佛<sup>ニ</sup>教<sup>レ</sup>。著<sup>レ</sup>諸<sup>ニ</sup>天<sup>ニ</sup>受<sup>レ</sup>。其願<sup>ハ</sup>為<sup>レ</sup>令<sup>ハ</sup>叶<sup>レ</sup>。爰<sup>レ</sup>身<sup>ハ</sup>來<sup>レ</sup>。從<sup>レ</sup>是東土<sup>ニ</sup>始<sup>レ</sup>由<sup>ハ</sup>句<sup>ニ</sup>詣<sup>レ</sup>。以<sup>ハ</sup>七珍<sup>万</sup>字<sup>ニ</sup>莊嚴<sup>レ</sup>。山<sup>ニ</sup>有<sup>レ</sup>彼<sup>ノ</sup>所<sup>ハ</sup>勤<sup>レ</sup>勸<sup>レ</sup>導<sup>レ</sup>。住<sup>レ</sup>給<sup>レ</sup>。尋<sup>レ</sup>行<sup>レ</sup>。置<sup>レ</sup>燭<sup>レ</sup>。失<sup>レ</sup>給<sup>レ</sup>見<sup>レ</sup>財<sup>ニ</sup>則<sup>ハ</sup>實<sup>レ</sup>。上人<sup>ニ</sup>不<sup>レ</sup>斜<sup>レ</sup>悅<sup>レ</sup>。復<sup>レ</sup>明<sup>ハ</sup>曉<sup>レ</sup>。雖<sup>ニ</sup>其日<sup>ニ</sup>吉<sup>ニ</sup>定<sup>レ</sup>。立<sup>レ</sup>關<sup>ニ</sup>川<sup>ニ</sup>自<sup>ニ</sup>越<sup>レ</sup>。聞<sup>レ</sup>。勢<sup>多</sup>多<sup>ニ</sup>難<sup>レ</sup>。雪<sup>ニ</sup>東<sup>ニ</sup>臨<sup>レ</sup>。遂<sup>ニ</sup>行<sup>レ</sup>。經<sup>レ</sup>秦<sup>ニ</sup>信<sup>レ</sup>。臨<sup>レ</sup>峨眉<sup>ニ</sup>分<sup>レ</sup>過<sup>レ</sup>。中華<sup>ニ</sup>國<sup>ニ</sup>聲<sup>ニ</sup>數<sup>レ</sup>。王<sup>ニ</sup>相<sup>レ</sup>屬<sup>レ</sup>。凡<sup>ニ</sup>云<sup>ニ</sup>所<sup>ハ</sup>尋<sup>レ</sup>。始<sup>レ</sup>里<sup>人</sup>々<sup>ニ</sup>事<sup>ニ</sup>問<sup>レ</sup>。欲<sup>ニ</sup>思<sup>レ</sup>所<sup>ハ</sup>獨<sup>ニ</sup>獵<sup>レ</sup>一人<sup>ニ</sup>。上人<sup>ニ</sup>獵<sup>レ</sup>。向<sup>ニ</sup>此<sup>ニ</sup>若<sup>ニ</sup>不<sup>レ</sup>思<sup>レ</sup>。山哉<sup>ニ</sup>有<sup>レ</sup>十間<sup>ニ</sup>始<sup>レ</sup>。須<sup>レ</sup>額<sup>ニ</sup>頭<sup>ニ</sup>赤<sup>ニ</sup>是<sup>ニ</sup>。是<sup>ニ</sup>是<sup>ニ</sup>。山<sup>ニ</sup>有<sup>レ</sup>金<sup>ニ</sup>銀<sup>ニ</sup>鐵<sup>ニ</sup>。山<sup>ニ</sup>有<sup>レ</sup>由<sup>ニ</sup>傳<sup>レ</sup>。共<sup>ニ</sup>我等<sup>ハ</sup>如<sup>ニ</sup>凡<sup>ニ</sup>天<sup>ニ</sup>業<sup>ニ</sup>事<sup>ニ</sup>條<sup>ニ</sup>。其<sup>ニ</sup>外<sup>ニ</sup>寶<sup>ニ</sup>不<sup>レ</sup>知<sup>レ</sup>。申<sup>レ</sup>。上人<sup>ニ</sup>夫<sup>ニ</sup>在<sup>レ</sup>懲<sup>レ</sup>。等<sup>ニ</sup>也<sup>ニ</sup>。御<sup>ニ</sup>召<sup>ニ</sup>入<sup>レ</sup>。給<sup>レ</sup>。須<sup>レ</sup>領<sup>ニ</sup>申<sup>レ</sup>。榜<sup>ニ</sup>十日<sup>ニ</sup>斗<sup>ニ</sup>山<sup>ニ</sup>野<sup>ニ</sup>。伏<sup>レ</sup>後<sup>ニ</sup>。制<sup>レ</sup>其<sup>ニ</sup>革<sup>ニ</sup>方<sup>ニ</sup>タシ<sup>ニ</sup>。是<sup>ニ</sup>具<sup>レ</sup>。大<sup>ニ</sup>龍<sup>ニ</sup>愚<sup>ニ</sup>所<sup>ハ</sup>專<sup>レ</sup>。大<sup>ニ</sup>而<sup>ニ</sup>是<sup>ニ</sup>マ<sup>ニ</sup>アセ<sup>レ</sup>。然<sup>ニ</sup>何<sup>ニ</sup>上人<sup>ニ</sup>學<sup>レ</sup>隨<sup>ニ</sup>山<sup>ニ</sup>御<sup>ニ</sup>際<sup>ニ</sup>仕<sup>レ</sup>。申<sup>ケ</sup>レ<sup>ハ</sup>、犬<sup>ニ</sup>心<sup>ニ</sup>ケルニヤ<sup>ニ</sup>厭<sup>レ</sup>。特<sup>ニ</sup>見<sup>ケ</sup>レ<sup>ハ</sup>、獵<sup>ニ</sup>師<sup>ニ</sup>人<sup>ニ</sup>眼<sup>ニ</sup>乞<sup>レ</sup>別<sup>ニ</sup>。比<sup>ニ</sup>上人<sup>ニ</sup>御<sup>ニ</sup>御<sup>ニ</sup>。照<sup>ニ</sup>山<sup>ニ</sup>裏<sup>ニ</sup>分<sup>レ</sup>。峨々<sup>ニ</sup>巖<sup>ニ</sup>頂<sup>ニ</sup>吹<sup>ケ</sup>レ<sup>ハ</sup>。其<sup>ニ</sup>其<sup>ニ</sup>見<sup>ケ</sup>矣<sup>ニ</sup>。如<sup>ニ</sup>雲<sup>ニ</sup>。以<sup>ニ</sup>七珍<sup>万</sup>至<sup>ニ</sup>莊嚴<sup>ニ</sup>。山<sup>ニ</sup>五色<sup>蓮<sup>ニ</sup></sup>花<sup>ニ</sup>開<sup>レ</sup>。隨<sup>ニ</sup>有<sup>レ</sup>尊<sup>ニ</sup>絕<sup>ニ</sup>言<sup>ニ</sup>。謂<sup>ニ</sup>斗<sup>ニ</sup>也<sup>ニ</sup>。斯<sup>ニ</sup>所<sup>ハ</sup>八旬<sup>ニ</sup>余老僧<sup>ニ</sup>眉<sup>ニ</sup>垂<sup>ニ</sup>八字<sup>ニ</sup>蓄<sup>レ</sup>。觀<sup>ニ</sup>四海<sup>ニ</sup>漫<sup>タ</sup>ミ<sup>ニ</sup>。顯<sup>ニ</sup>張<sup>ニ</sup>。口<sup>ニ</sup>香<sup>ニ</sup>掛<sup>ニ</sup>摸<sup>ニ</sup>姿<sup>ニ</sup>。水<sup>ニ</sup>清<sup>ニ</sup>幽<sup>ニ</sup>摸<sup>ニ</sup>。把<sup>ニ</sup>拂<sup>ニ</sup>。拂<sup>ニ</sup>拂<sup>ニ</sup>然<sup>ニ</sup>來<sup>ニ</sup>。上人<sup>ニ</sup>向<sup>ニ</sup>老僧<sup>ニ</sup>。致<sup>ニ</sup>身<sup>ニ</sup>所<sup>ハ</sup>勤<sup>レ</sup>禱<sup>ニ</sup>。釋<sup>ニ</sup>云<sup>ニ</sup>起<sup>ニ</sup>願<sup>ニ</sup>。不<sup>ニ</sup>思<sup>ニ</sup>識<sup>ニ</sup>蒙<sup>ニ</sup>。夢<sup>ニ</sup>都<sup>ニ</sup>通<sup>ニ</sup>。爰<sup>ニ</sup>來<sup>ニ</sup>。脚<sup>ニ</sup>定<sup>ニ</sup>。此山<sup>ニ</sup>由<sup>ニ</sup>召<sup>ニ</sup>。後<sup>ニ</sup>語<sup>ニ</sup>為<sup>ニ</sup>聞<sup>ニ</sup>。真<sup>ニ</sup>老僧<sup>ニ</sup>仰<sup>ニ</sup>。ヶ<sup>ハ</sup>夫<sup>ニ</sup>我<sup>ニ</sup>山<sup>ニ</sup>無<sup>ニ</sup>無<sup>ニ</sup>。諸<sup>ニ</sup>説<sup>ニ</sup>出<sup>ニ</sup>世<sup>ニ</sup>本<sup>ニ</sup>體<sup>ニ</sup>。衆<sup>ニ</sup>生<sup>ニ</sup>成<sup>ニ</sup>佛<sup>ニ</sup>道<sup>ニ</sup>也<sup>ニ</sup>。某<sup>ニ</sup>八葉<sup>九葉<sup>六</sup></sup>而<sup>ニ</sup>。

當盡不還。當盡不還。先地藏願。本尊六道能化地藏菩薩。一切衆生長夜。眠寢。佛界。正道為入。入六道。六輪轉枝焰。藥資。本尊藥師如來。一切衆生因緣。受持。人間一代五時。懶受。衆生逆候。願立。身心安樂。至祐。靈官。如迦輪頭。周頭觀音。但衆生全無所知。難曉也。兄。呪上。木尊文殊菩薩。唐。唐智闡判劍氣。難識。切今。成正真覺。<sup>74</sup> 大日。旃檀。本尊大日如來。未來真如相。表。周遍法界萬物。一悲。令開悟。讚。平等。本尊勝財如來。<sup>75</sup> 平等性智。自他一味。和合。內心。普救。度脫。利。憐。憫。憍。憍。過場也。內裏。<sup>76</sup> 本尊釋迦如來。万法圓通。唯我一人能為。教。應顯也。西方。復明清。<sup>77</sup> 本尊千手觀音。無始忘懷。煩惱。垢。今。成。佛。東土菩薩。第。歷劫不出。諸願。令。助。無量重罪。生。十。千。百。日。本尊。不動明王。根本無生。惠慈。百八煩惱。消滅。已。身。本。宣。菩。提。授。進。勝。手。履。目。本尊。刀。八。臂。身。門。火。尊。陣。守。護。多。空。等。刀。開。天。義。發。鑿。世。也。寶石。即。那。勤。藥。菩。薩。掌。中。大。馬。廬。舍。財。悉。現。大。日。也。宮。治。藏。法。界。道。場。也。端。八。業。五。智。五。佛。<sup>78</sup> 上。來。菩。提。下。化。衆。生。消。滅。凡。富。山。頭。一度。參。詣。藥。自。生。極。樂。密。教。引。流。布。道。場。三。密。如。平。等。成。几。聖。不。二。淨。土。主。免。心。則。煩。惱。則。菩。提。生。死。則。涅。槃。三。總。歸。增。增。她。成。者。輩。出。帶。密。願。更。無。煩。惱。常。來。供。淨。風。吹。鳴。山。微。指。行。住。塵。眾。<sup>79</sup> 月。光。照。心。達。智。火。張。佛。法。編。教。人。間。魚。搏。神。威。燭。佛。法。嚴。厭。惡。智。利。切。愚。蠻。新。於。警。利。生。藥。衆。生。望。給。然。天。金。剛。山。申。八。佛。法。流。布。為。